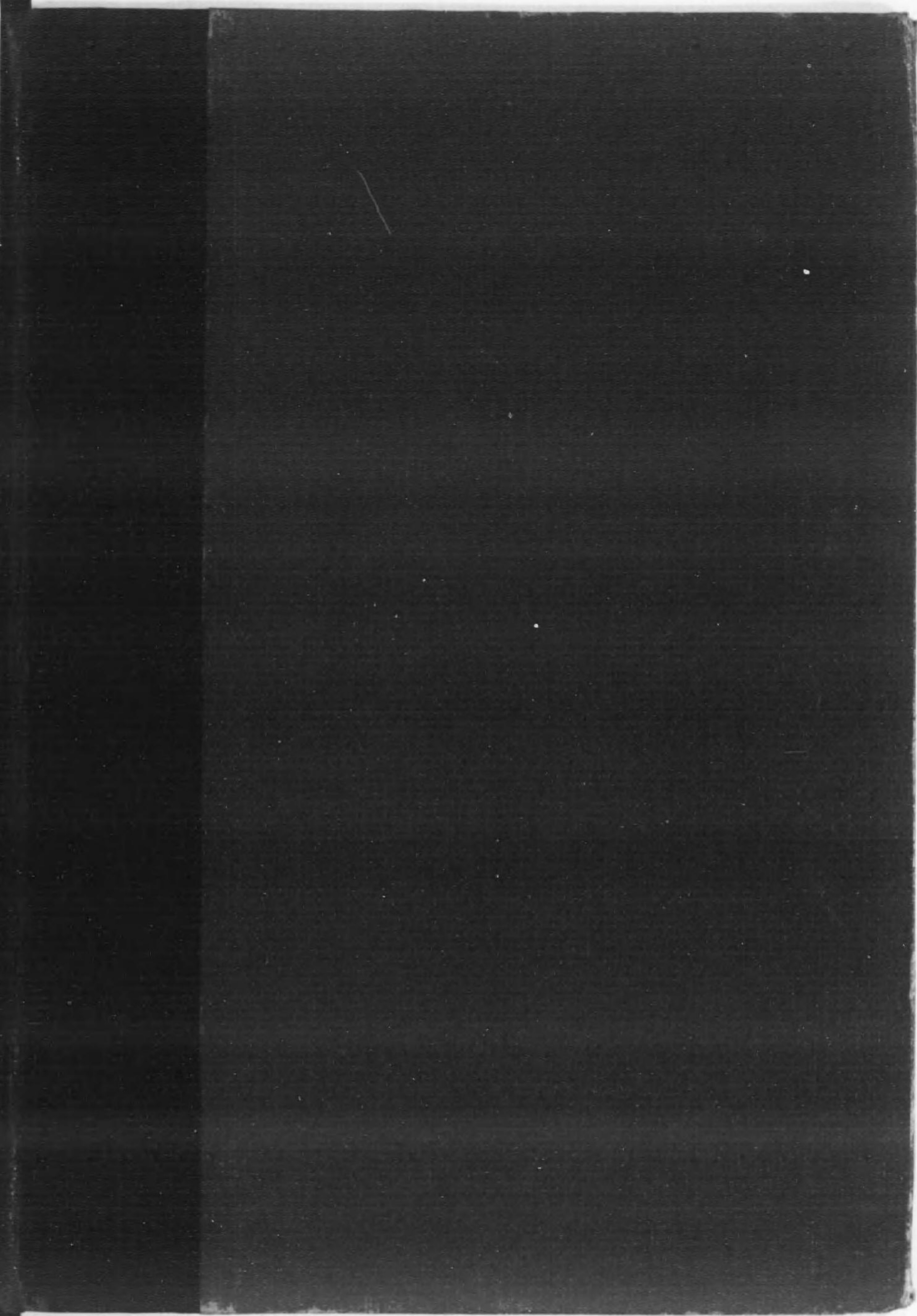
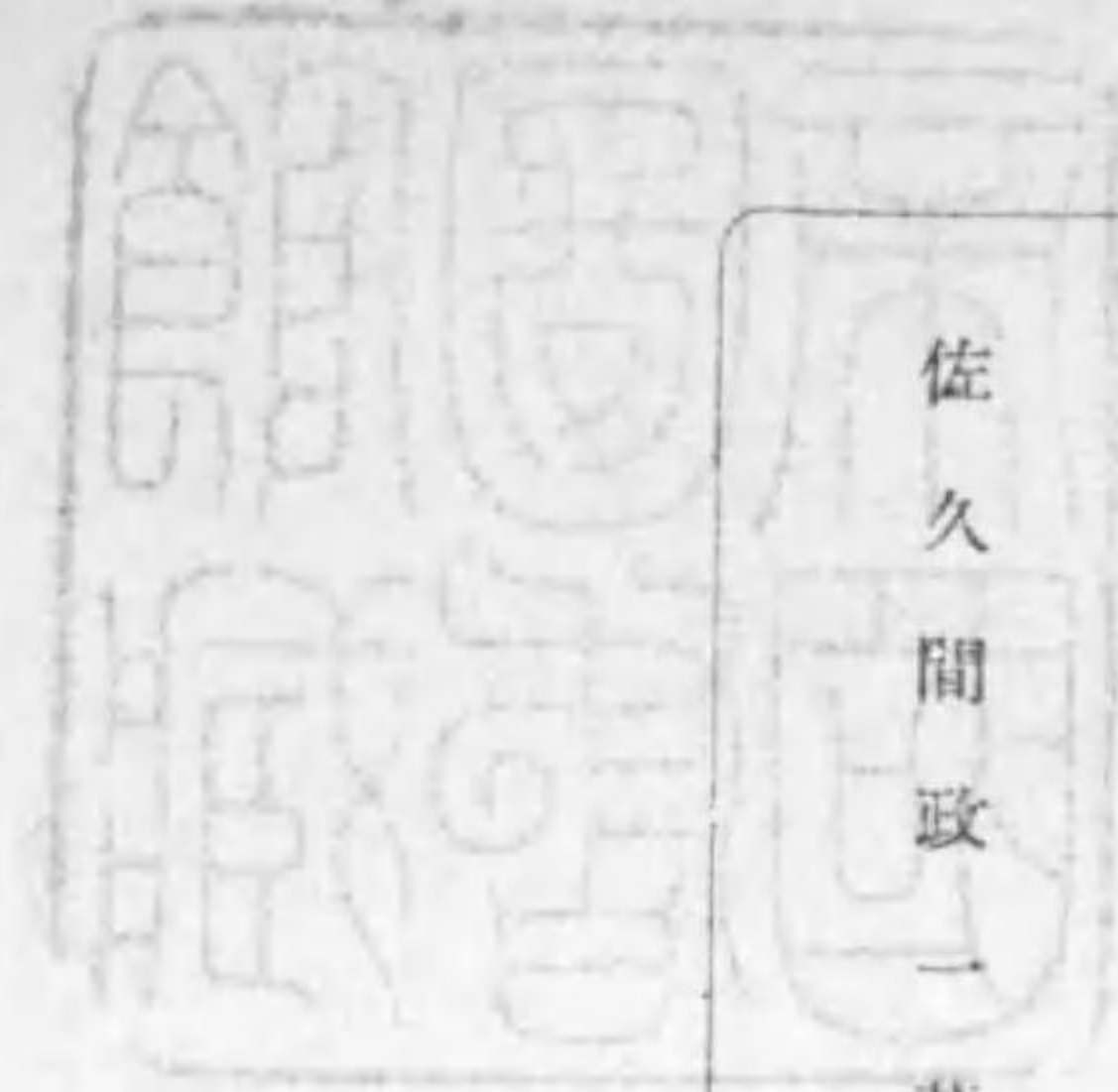




始



845  
SA45  
2



獨逸文法講話

佐久間政一著



東京郁文堂書店刊行

~~1013~~  
48

603  
1624

## 序

本書は、初めて獨逸文法を學ぶ人々、或は既に若干の文法的智識を有する人たちに對して、容易く斯學の要領を會得せしめんがために、編述されたもので、この目的のために、講話體を選び、用例にはすべて邦譯を附し、なほ英語の智識を既に有する人達のために、聯想用又は比較用として、出來得るだけ多くの英譯をつけて置いた。

叙述の方式・繁簡の程度については、すべて著者が二十年に近い文法講授の經驗を基礎とし、努めて獨逸人のための獨逸文典や、英米人のための獨逸文法書を直譯的に模倣することを選び、邦人學生の理解力の特質を標準として定めたものであるから、從來の文法書のそれとは、自ら異るところがあらう。即ち邦人の理解しやすい方面の叙述は、出來得るだけこれを緊縮し、理解に苦しむところ或は常にあやまり易い諸點については、つとめて精しく説述し、なほ註を加へて、精確明晰なる印銘を刻みつけようと企てたのである。

講話書としての性質上、本書には練習問題が缺けてゐる。これは或は遺憾であるかも知れないが、由來練習問題なるものは、師に就いて學ぶことを前提とするものであつて、自修の場合に、獨力で巧みにこれを利用するが如きは、頗る困難な事柄であり、又これがためには、著者は別に一個の解答書を添える義務を有する。本書はむしろ類例を出來得るだけ多く掲げ、これに解説を施す事によつて、練習問題の掲出に代えようとするものである。

今本書の依憑したる参考書をあげると、下の如くである。

Bennetwig, Schwierigkeiten unserer Muttersprache (1920)

- 2 —
- Blab, Neuhochdeutsche Grammatik (1900)  
 Curme, A Grammar of German Language (1905)  
 Gurle, Deutsche Schulgrammatik (1906)  
 Ham and Leonard, German Grammar (1908)  
 Geise, Deutsche Grammatik (1923)  
 Kayser and Montaser, Brief German Course (1904)  
 " " " , Foundation of German (1909)  
 Krause-Merger, Deutsche Grammatik für Ausländer (1907)  
 Mattias, Handbuch der deutschen Sprache II. Teil (1908)  
 Menjing, Deutsche Grammatik für höhere Schulen (1924)  
 Schelle, Grammatik der deutschen Sprache für Ausländer  
 (1903)  
 Vogel, Deutsches Nachschlagbuch (1911)  
 Abelader, Richtig Deutsch (1928)  
 Besselt, Grammatisch-Stilistisches Wörterbuch der deutschen  
 Sprache (1906)

其他 Flügel-Schmidt-Tanger, Wörterbuch der englischen und  
 deutschen Sprache (II); Muret-Sanders' enzyklopädisches Wörter-  
 buch (II); 片山正雄氏文法辭典; 青木先生の諸著作等に依ると  
 ころが多い。

昭和五年三月下旬

仙臺に於て

佐久間政一識

## 増補版序言

拙著正續『獨逸文法講話』が、叙述と紙幅との都合によつて、  
 遂に収録し得ざりし文法の諸部分を集め、『續々獨逸文法講話』  
 となし、以て獨逸文法全般に亘つての講述を全うせんと企圖し  
 たのは、今年の初めであつたが、翻つて考へると、この目的の  
 もとになさるべき講述が、實用に資するよりも、寧ろ理論的方  
 面の闡明に努むると多く、従つて當面の急に應じて、迅速且つ  
 適確に、彼土の語法を會得せんと欲する人たちにとつては、此  
 著が謂はゞ贅澤なる部分を包有するによつて、これらの人々  
 の失望を買ふこと必ずしも少なからざるべきを思ひ、暫らく該  
 企劃を中止して、未収録の部分中、特に詞論を終りたる學徒に  
 必要なるべき箇所を取り、補遺一章を編んで、正篇重版の機を  
 利し、これをその卷末に附するとした。學修者これによつて  
 若干の利便を得らるれば、著者の望は足るのである。

昭和十二年八月下旬

仙臺にて

著者誌

# 目次

第一章	冠詞及び名詞	1
第一節	變化	1
第二節	名詞の數	19
第三節	名詞の性	23
第四節	冠詞の用法	30
第二章	前置詞	37
第一節	二格を支配する前置詞	39
第二節	三格を支配する前置詞	44
第三節	四格を支配する前置詞	55
第四節	三格と四格とを支配する前置詞	62
第三章	形容詞	75
第一節	強變化	77
第二節	弱變化	80
第三節	混合變化	82
第四節	變化についての注意事項	84
第五節	比較	88
第六節	名詞的用法	101
第四章	代名詞	110
第一節	人代名詞	110
第二節	物主代名詞	125
第三節	指示代名詞	132
第四節	關係代名詞	142
第五節	疑問代名詞	154

第六節	不定代名詞	...	159
第五章	動詞	...	164
第一節	弱變化動詞の現在變化	...	166
第二節	強變化動詞の現在變化	...	163
第三節	動詞の過去變化	...	170
第四節	動詞の過去分詞	...	178
第五節	時稱の構成と意義	...	180
第六節	自動詞と他動詞	...	191
第七節	命令法	...	198
第八節	分離動詞と非分離動詞	...	199
第九節	說話助動詞	...	212
第十節	非人稱動詞	...	235
第十一節	能動と受動	...	235
第十二節	不定法と分詞	...	246
第十三節	可能法	...	263
第六章	副詞	...	299
第一節	時の副詞	...	301
第二節	處の副詞	...	305
第三節	方法の副詞	...	309
第四節	原因の副詞	...	314
第五節	副詞の位置	...	317
第七章	數詞	...	324
第一節	基数	...	325
第二節	序數	...	331
第三節	分數	...	334
第四節	其他の定數詞	...	339

5.10

第五節	不定數詞	...	341
第八章	接續詞	...	344
第一節	對結接續詞	...	347
第二節	附結接續詞	...	352
第九章	支配	...	360
第一節	他動詞	...	360
第二節	自動詞	...	365
第三節	再歸動詞	...	374
第四節	非人稱動詞	...	381
第五節	形容詞	...	386
第十章	感歎詞	...	391
第十一章	標號の用法	...	394
補遺	格の用法	...	405
第一節	第一格	...	405
第二節	第二格	...	409
第三節	第三格	...	418
第四節	第四格	...	424

第一章  
冠詞及び名詞  
第一節  
變化

1. 獨逸語では泰羅萬象一切のものが性を持つてゐる。性には男性・女性・中性の三つがある。しかし事物そのものが有する性即ち自然性と、文法上の性とは必ずしも一致しては居ない。由來言語の上に性の觀念を明白にあらはす習慣のないわれらにとつては、——云ひ換へると、宇宙のものを、しかく性的に區別して考へることをしないわれらにとつては、——名詞の性を記憶することが、獨逸語にぶつかつた時の最初の難關であることは云ふを待たない。然し「物」の名を覺えたからとて、性を知らなければ、その實用上の効力の半分以上は失はれるものであるから、これはどうしても諳記しなければならぬのである。今一例をあげると、Mifch (机)、Brief (手紙)、Garten (庭) は男性であり、Tinte (インキ)、Feder (ペン)、Tür (戸) は女性であり、Papier (紙)、Messer (ナイフ)、Glas (コップ) は中性である。

2. 冠詞 (Artikel) は名詞 (Substantiv) の前に置かれて、先づ其性を示す用をする。冠詞に定冠詞・不定冠詞の別がある。男性の定冠詞は der, 不定冠詞は ein; 女性の定冠詞は die, 不定冠詞は eine; 中性の定冠詞は das, 不定冠詞は ein であつて、これは英の the 及び a (or an) に該當する。今例を以て示すと:—

男性 Der [ein] Vater (the [a] father [父])  
 Der [ein] Sohn (the [a] son [息子])  
 女性 Die [eine] Mutter (the [a] mother [母])  
 Die [eine] Tochter (the [a] daughter [娘])  
 中性 Das [ein] Kind (the [a] child [子供])  
 Das [ein] Mädchen (the [a] girl [少女])

3. 數 (Numerus) には單數複數の別がある。定冠詞は複數に於ては三性に共通して、一つの形 „die“ を持つてゐるが、不定冠詞には複數形がない。だから不定冠詞を有する名詞を複數にするときは、名詞だけになるわけである。

單數 Der Vater, ein Vater [男]; die Mutter, eine Mutter [女]; das Kind, ein Kind [中].

複數 Die Väter [定冠詞あるものの複數], Väter [不定冠詞あるものの複數]; die Mütter, Mütter; die Kinder, Kinder.

4. 冠詞は「格」(Kasus) によつて形をかへる。格に四つある。この變化 (Declination) を表記すると:—

	男	女	中	複	
定冠詞	第一格	der	die	das	die (the)
	第二格	des	der	des	der (of the)
	第三格	dem	der	dem	den (to or from the)
	第四格	den	die	das	die (the)

【註】 格の意味を、解り易いやうに「が」(一格)、「の」(二格)、「に」(三格)、「か」(四格)と説明する習慣であるが、二格は單に「の」の意味で用ゐられる計りではなく、これは英の of the 又は of a に該當するもので、英語で to think of the (or a) x と用ゐる時の of の意も、二格に含まれてゐる。又三格を單に「に」とのみ云ふのは、不充分である。三格は所謂「與格」で、「に」と「から」とを意味してゐる。

	男	女	中	複	
不定冠詞	第一格	ein	eine	ein	(a, an)
	第二格	eines	einer	eines	(of a, an)
	第三格	einem	einer	einem	{to or from a or an
	第四格	einen	eine	ein	(a, an)

5. 冠詞が格によつて、變化すると同じく、名詞も格によつて變化する。但し女性名詞は、單數に於ては、決して變化しない; 變化するのは冠詞だけである。

變化の種類を大別して三つにする。強變化・弱變化・混合變化がそれである。

【I】 強變化 (Starke Declination) とは、之に屬する男性及中性名詞が單數の二格で、語尾に es 又は -es を、複數三格では、語尾に n を採るものである。又 -en, -men, -lein などに終るものは、複數三格で、この n を附けない。女性名詞にも強變化するものがあるけれど、それは前述の如く、單數では變化しない。——強變化の特徴は、かゝるものであるが、これに屬するものを、更に複數形のつくり方から見て、三種に分ち、其各を更に二つづつの群れに別けることが出来る。

【A】 は名詞の單數形一格が、其處で複數一格の形となるもの、但しこれには語幹の母音即ち幹母音 (Stammvokal) が複數となる時、變音 (Umlaut) となるものと、ならざるものがある。

【註】 Umlaut とは、a に対する ä; o に対する ö, u に対する ü; au に対する äu である。

【B】 は名詞の單數形一格の語尾に、-e を附することによつて、複數一格の形がつけられるもので、これにも複數となる際、幹母音を變ずるものと、變じないものとある。



[C] は、名詞の單數一格の語尾に、-er をつけて、複數一格の形をつくるもので、これにも幹母音を變ずるものと、變ぜざるものがある。

【註】 男性を Masculinum と云ひ、M. と略し；女性は Femininum と云ひ、F. と略し；中性は Neutrum と云ひ、N. と略す。一又一格は Nominativ で、N. と略し；二格は Genitiv で、G.；三格は Dativ で D.；四格は Accusativ で A. と略す。一又單數は Singular で S.；複數は Plural で Pl. と略す。

6. 強變化第一類の例を示すと。

[I・A] 幹母音を變ぜざるもの。

[I・A]	{	N. der Diener (the servant 下男)	die Diener
		G. des Dieners (of the servant)	der Diener
		D. dem Diener (to the servant)	den Dienern
		A. den Diener (the servant)	die Diener

不定冠詞のときは、ein Diener, eines Dieners, einem Diener, einen Diener と變化す；此場合の複數形に冠詞のないことは、すでに述べた通りである。——これに屬するものは、der Schüler (生徒)、der Wagen (車)、das Fenster (窓)、das Zimmer (室)、das Mädchen (少女) などである。

[I・B] 幹母音を變ずるもの。

[I・B]	{	N. der Vater (the father 父)	die Väter
		G. des Vaters	der Väter
		D. dem Vater	den Vätern
		A. den Vater	die Väter

不定冠詞を有するものは、ein Vater, eines Vaters, einem Vater, einen Vater と變化し、その複數に冠詞のなきことは、言ふを待たぬ。——之に屬するものは、der Garten (庭)、der

nder (兄弟)、der Apfel (林檎)、der Vogel (鳥)；女性名詞 I.、die Mutter と die Tochter の二つである。——第一類のものは、變音しない方が多く、變音するものは僅少である。

【註】 女性名詞の強變化を指示すると、die Mutter, der Mutter, der Mutter, die Mutter；die Mütter, der Mütter, den Müttern, die Mütter.

7. 強變化の第二類

[II・A] 幹母音を變ぜざるもの。

[II・A]	{	N. der Tag [the day]	die Tage
		G. des Tag[es] [of the day]	der Tage
		D. dem Tag[e] [to the day]	den Tagen
		A. den Tag [the day]	die Tage

【註】 單數二格の語尾に、-es をつけるのは、主として一級りの名詞、即ち單級名詞であるが、此種のものでも、口調の都合上、-s だけをつける事もある。但し齒音即ち | とか、|ch とか、|r もに終るものは、多級のものでも、發音の都合上、-es をつけるのが原則である。單數三格の語尾につける -e は單級名詞か、齒音に終る多級名詞かに於てであるが、これは省かれる事が多い。

之に屬するものは、der Hund (犬)、der Tisch (机)、der Freund (友人)；das Jahr (年)、das Tier (動物)、das Schiff (舟)、等で、其數は非常に多い。

[II・B] 幹母音を變ずるもの。

[II・B]	{	N. der Baum [the tree]	die Bäume
		G. des Baum[es] [of the tree]	der Bäume
		D. dem Baum[e] [to the tree]	den Bäumen
		A. den Baum [the tree]	die Bäume

【註】 -nis に終るものは此變化に屬す。これに -es 又は -e を附する

ときには、*nis* を重ねて *n* とする: *das Geheimnis* (秘密), *des Geheimnisses*, *dem Geheimnisse*, *das Geheimnis*; *die Geheimnisse*, *der Geheimnisse*, *den Geheimnissen*, *die Geheimnisse*.  
一 *nis* に終る名詞は、中性又は女性である。

之に属するものは、男性又は女性の名詞で、*der Kopf* (頭)、*der Hut* (帽子)、*der Stof* (ステツキ)、*der Stuhl* (椅子)、*der Fuß* (足); *die Magd* (下女)、*die Stadt* (市)、*die Maus* (鼠)、*die Hand* (手) の如きものである。

8. 強變化の第三式。

[III-A] 幹母音を變ぜざるもの。

[A-III]	N.	das Feld (the field)	die Felder
	G.	des Feldes	der Felder
	D.	dem Felde	den Feldern
	A.	das Feld	die Felder

[III-B] 幹母音を變ずるもの。

[B-III]	N.	das Buch (the book)	die Bücher
	G.	des Buches (of the book)	der Bücher
	D.	dem Buche (to the book)	den Büchern
	A.	das Buch (the book)	die Bücher

第三類に属する名詞は、其母音を變じ得らるゝ限り、複數に於ては、悉くこれを變ずる事、第一類及第二類と異なるところである。此變化には、女性名詞は一つも屬して居ない。[例] *der Gott* (神)、*der Leib* (身體)、*der Wald* (森林); *das Dorf* (村)、*das Dach* (屋根)、*das Tal* (谷)、*das Glas* (コップ)。

【註】 *-tum* に終る名詞は、すべて此變化に屬して *-tümer* となる。一又 *-tum* に終るものは、男性か中性かである: *der Reichtum* (富)、*das Altertum* (古代)。

9. 名詞の變化の第二種は、【II】弱變化 (Schwache Declination) である。これは單數一格以外のすべての格に於て、語尾に *-(e)n* が附加されるものである。但し女性名詞が單數に於て變化しないことは、強變化と同様である。

【註】 單數一格に於て既に *-e* を有するもの及 *-er* に終るものは、單に *n* のみを附ける。

S.	N.	der Mensch (人)	der Neffe (甥)	die Schwester (姉妹)
	G.	des Menschen	des Neffen	der Schwester
	D.	dem Menschen	dem Neffen	der Schwester
P.	A.	den Menschen	den Neffen	die Schwester
	N.	die Menschen	die Neffen	die Schwestern
	G.	der Menschen	der Neffen	der Schwestern
P.	D.	den Menschen	den Neffen	den Schwestern
	A.	die Menschen	die Neffen	die Schwestern

弱變化に属するものは、男性及女性の名詞で、中性名詞は一つも之に屬してはゐない。例へば、*der Affe* (猿)、*der Soldat* (兵士)、*der Graf* (伯爵)、*der Hase* (兎); *die Straße* (街道)、*die Tante* (伯母)、*die Mauer* (壁)、*die Tür* (戸)、*die Uhr* (時計) などである。

【註】 なお注意すべきことは、I) *-in* に終る女性名詞は、複數の時、*n* を重ねて、*-innen* とする。例: *die Freundin* (女友)、*die Freundinen*; *die Königin* (女王)、*die Königinnen*.

II) *der Herr* (紳士・主人・君) は單數にては、語尾に *-n* のみを附ける; 複數にては、*-en* をつける。即ち、*der Herr*, *des*, *dem*, *den Herrn*; *die*, *der*, *den*, *die Herren*.

III) 古くは弱變化に属する女性名詞も、單數二格以下で、*-en* を語尾に取つた。例へば、*die Frau*, *der*, *der*, *die Frauen*;

die, der, den, die Frauen このことについては、後に述べる。

10. 名詞の變化の第三種は、【III】混合變化 (Gemischte Declination) である。これは單數に於ては、強變化に従ひ、複數に於ては、弱變化に従ふ。複數となるときに、幹母音を變ずるものはない。

S.	{	N. der Staat (the state 國家)	das Ende (the end 終)
		G. des Staates	des Endes
		D. dem Staate	dem Ende
		A. -den Staat	das Ende
P.	{	N. die Staaten	die Enden
		G. der Staaten	der Enden
		D. den Staaten	den Enden
		A. die Staaten	die Enden

混合變化に屬するのは、男性及中性名詞で、der See (湖)、der Bauer\* (農夫)、der Nachbar\* (隣人)、der Witter (従兄弟)、der Doktor (ドクトル); das Hemd (シャツ)、das Bett (臥床)、das Ohr (耳)。

【註】I\*) der Bauer, der Nachbar は、弱變化としても、混合變化としても取扱はれる; der Bauer, des, dem, den Bauern 又は der Bauer, des Bauers, dem Bauer, den Bauern.

\*\*\*) der Doktor は外來語で、其單數では初めの o が短かく、強く、複數では第二の o が長く、強く發音される。即ち數によつて、強音の所在が異なるのである。

【註】II) das Herz (the heart 心臓) は、これに屬するけれど、單數二格では des Herzens, 三格では dem Herzen となる、四格は無論 das Herz; 複數は Herzen である。

11. 次にかゝるものは、其單數一格に於て、m を有した

と見做さるべきもので、今の變化から見ると、例外の如くであるが、これは強變化の一變態と見るのが正しからう。

【例】 der Name[n] (the name 名), des Namens, dem Namen, den Namen; die, der, den, die Namen.

これに屬するものは、der Friede (平和)、der Funke (火花)、der Gedanke (思想)、der Same (種子)、der Glaube (信仰)、der Wille (意志) 等。

12. 外國より傳來せるものにして、既に獨逸化せる名詞は、全く獨逸的に變化される; 例へば das Exempel (例) [強・I・A] der Barbier (理髮師) [強・II・A]; der General (將軍) [強・II・B]; das Regiment (聯隊) [強・III・A]; der Advokat [辯護士] [弱] (v は w に讀む); der Professor [混] 等であるが、其他に他國語で、独自の複數形を保留してゐるのがある。

a) 英佛から來たものでは、複數に語尾 -s を採るのがある; かゝるものは、女性名詞ならぬ限り、單數二格に於て、語尾に -s をつける。— (例) [英] der Klub, (club, クラブ), des Klubs [複] die Klubs; das Dock (dock, 船渠), der Jockey (jockey 競馬騎手), die Lady (lady, レディ); [佛] das Etui (etui 袋), des Etuis, die Etuis; das Portemonnaie (portemonnaie ポルトモネー、財布), der Ballon (ballon 風船), das Milieu (milieu 環境) 等がそれである。

【註】然し獨逸語でも此 -s を使用することがある; der Kerl (奴), [複] die Kerls (本來は die Kerle); das Mädel (=Mädchen), [複] die Mädels (本來は die Mädchen); das Fräulein (嬢), die Fräuleins (本來は die Fräulein). — これらは元來低獨逸語から來たもので、俗語に使用されてゐる。

b) ラテンから來たもので、-um に終る中性名詞は、複數で、

-um を -en に變ずるか、又は之を =a に變ずる：單數二格には勿論 -s をつける：das Adjektivum (形容詞)、des Adjektivums, [複] die Adjektiven (od. Adjektiva); das Verbum (動詞)、des Verbams, [複] die Verben (od. die Verba); das Gymnasium (ギムナジウム) [複] Gymnasien); das Museum (博物館); [複] Museen).

【註】 -us に終るラテン語は、單數に於て變化せず、複數では -en を取るものがある：der Rhythmus (リズム); die Rhythmen; der Globus (球)、die Globen.

c) 希臘語から來た名詞で、單數が =a に終るものが、複數で語尾に =ta を添加し、又は =a を =en 變へるものがある。單數二格は矢張 -s を語尾に採る：das Thema (テーマ、主題)、des Themas, die Themata (od. Themen); das Dogma (教義) des Dogmas, o.e. Dogmata (od. Dogmen); das Drama (戯曲)、die Dramen; das Diorama (透視畫)、die Dioramen; das Komma (コンマ)、die Kommata (od. Kommas).

其他の國語から來たもので、独自の複數形を取るものがあるが、煩を避けて、茲では省略する。他國語らしいものは、念の爲使用前に、字引にあたつて見るがよい。

13. 今茲で、男性・中性・女性の名詞を、其變化によつて、所屬を示すと：

- 男性名詞は、強・弱・混、いづれにも屬し、
- 女性名詞は、強・弱だけに屬し、
- 中性名詞は、強・混だけに屬する。

だから、これを裏から云へば、

強變化は、男性・女性・中性名詞に亘つてゐるが、

弱變化は、男性・女性の名詞だけを包括し、  
混合變化は、男性・中性の名詞のみを包括するようになる。

然しかやうな統計的の事は、敢えて牢記する必要はない。要は各名詞個々にわたつて、其變化を暗んずるにあることを忘れてはならない。

14. 二個の名詞を連結して、一個の名詞をつくる時は、出來上りたるものを、複合名詞 (Zusammengesetzter Substantiv) と稱する。例へば Haus (house) と Tür (door) とが複合して、Haus-tür (家へ入る戸口、玄関の戸口) となり、Feld (field) と Weg (way) とが結合して Feldweg となるやうなものである。此際前に來るものを規定詞 (Bestimmungswort [R.]) 後に來るものを基礎詞 (Grundwort [R.]) と云ふ。後の方が複合語の基礎概念を作つてゐるからである。

【註】 I) 上記 Haustür, Feldweg の如きは、其間に何等の接續音をも介在させないで、直接にくつついてゐるのであるが、Badegast (浴客) や Tagereise (日中の旅) のやうに、間に e を入れるものもあるし、Blutstropfen (血の滴り)、Landesvater (國君) のやうに、間に -s 又は =s を採つたり、Fürstengeschlecht (王族)、Hafenfuß (鰐病者) のやうに間に -n 又は =n を入れたりするものもある(これには一々理由があるが、煩を避けて、こゝでは述べない)。

II) 前掲の複合名詞の規定詞は、みな名詞であるが、其外に Edelwild (鹿; edel [noble]+Wild), Jungfrau (處女; jung [young]+Frau) の如く、形容詞なるものもあり; 別に動詞の幹と名詞とを連絡したのものもある。例へば動詞 stehen (立つ; stand) の幹 steh と名詞 Pult (机) と結合して, Stehpult (高脚机) が出來、動詞 wohnen (住む; dwell) の幹 wohn と Haus とが結合して, Wohnhaus (住宅) が出來るやうなものである。

III) 複合名詞をつくる際に、三つ同じ文字 (Buchstabe [WR.]) が積くやうになる時には、其一つを削つて、二個だけ連続させる。例へば Schiff (船) と Fahrt (航海) とを複合せしむるときは、Schiff + Fahrt となつて、f が三つ続くけれど、これは其一つを削つて、Schiffart [S.] (航海) とする。又 Stamm (樞) と Macher (製造者) とを結合すれば Stamm + macher となれど、その一つを省いて Stammacher (樞職人) とする; Bett (ベット) と Tuch (布) とを結合せるものが、Bettuch (敷布) となり、Zoll (關稅) と Linie とが複合すると Zolllinie (稅關線) となるのは、この規則によるのである。但し綴を分けるときは、その一つを後ろにつける: Bettuch.

IV) 一個の複合名詞を基礎詞として、これに更に規定詞の附けられたものがある。例へば Bau (建築) と Meister (師匠) とを結合して、Baumeister (建築師) をつくり、之に Stadt (市) を加へて、Stadtbaumeister (市の建築師) とするやうなものである。Kriegsschauplatz (戰場) の如きも、まづ Schau (見物) と Platz が複合し、後に Krieg (戰爭) がこれについてのもので、かやうな複合を、二重複合 (Doppeltzusammensetzung [S.]) と稱する。

複合名詞の性及變化は、基礎詞に依るのが原則である。例へば Haustür に於て、Haus は中性、Tür は女性であり、出來上つた Haustür は女性である。又 Feldweg に於て、Feld は中性、Weg は男性であるが、この複合名詞は男性である。變化も其通りで、Haustür は Tür の變化に従ひ、die Haustür, der, der, die Haustür; die, der, den, die Haustüren と變化し、der Feldweg は des Feldweg(e)s, dem Feldweg(e), den Feldweg; die Feldwege, der Feldwege, den Feldwegen, die Feldwege と變化する。

【註】 僅少ではあるが、如上の原則に背くものがある; 例へば Mut (心地) は男性であるのに、Großmut 寛大、Wehmut (悲哀) などは女性となつてあるし、Teil (部分) は男性でも、Vorteil (利益)、Erbeil (遺産) などは中性であり、Ehe (結婚) は女性なるにも拘らず、Widchen (縁懸) は男性である如きが、それである。

15. 次に述べなければならぬのは、固有名詞の變化であるが、その前に名詞の種類について、一瞥を投げて置かう。

名詞を其意味によつて分けると、次の五種になる。

i) 種族名詞 (die Gattungsnamen)

der Mensch (人), das Buch (本), die Stadt (市), der König (王)。

ii) 固有名詞 (die Eigennamen)

Goethe (ゲーテ), Berlin (伯林), der Rhein (ライン河), das Elsaß (アルサス)。

iii) 物質名詞 (die Stoffnamen)

das Wasser (水), das Gold (金), das Holz (木材), das Mehl (穀粉)。

iv) 集合名詞 (die Sammelnamen)

der Wald (森林), die Klasse (級), das Heer (軍隊), das Volk (民衆)。

v) 抽象名詞 (die Begriffsnamen)

der Schlaf (眠), das Glück (幸福), die Arbeit (労働), die Schönheit (美)。

16. 固有名詞の變化については、まづ人名から述べる。

1) 人名の二格には -s をつけるのが通則であるが、齒音 (s, f, m, n 等) に終るものは、發音の都合上、二格には -ens

をつける。又 *e* に終る女性名詞は、二格に於て *-nis* をつける。他國人の名もこれに倣ふ。

	男	女	男	女	男(他)
N.	Heinrich	Berta	Frieh	Luiſe	Cicero
G.	Heinrichs	Bertas	Friehens	Luiſens	Ciceros
D.	Heinrich	Berta	Frieh	Luiſe	Cicero
A.	Heinrich	Berta	Frieh	Luiſe	Cicero

【註】 I) 二格の語尾が、*-ens* となるものにおいて、三格・四格に *-en* をつける人があるが、これは古い形で、今ではその必要はない。一又 *e* に終る女性の名の二格を *-ens* とする方法は、男性の名にも影響して、Goethe の二格が、Goethens となる例もあるが、これも必要のないことで、Goethes で充分である。

II) 二格の語尾の *s* の前に、Apostroph (') をつけるのは、極めて愚なことである。これは他國の文法の模倣であつて、全然其必要がないのみならず、これをつけるのは間違である。即ち Goethes Werke (ゲーテの著作) であつて、Goethe's Werke ではないことを記憶しなければならぬ。

III) 他國人の名前で、*s* に終るものは、其前に前置詞 von (of) をつけるか、定冠詞の二格 des をつけるか、或はその儘にしておいて、終りに略語符をつける； die Briefe (手紙、letters) von Paulus; die Briefe des Paulus; die Briefe Paulus'.

□) 人名には普通定冠詞をつけないのであるが、三格四格のいづれであるかが、わかりにくい場合とか、形容詞が前につけられたときとか、家庭用語などでは、定冠詞をつける。定冠詞がつくと、名前そのものは變化しないのが原則である。即ち Faust に定冠詞をつければ、der Faust, des Faust, dem Faust, den Faust であり、Berta に定冠詞をつければ、die Berta, der Berta, der Berta, die Berta である。形容詞をつけた例は、der junge (若い; young) Schiller とか、die ſchöne (美しい

beautiful) Berta とかするのが、其例であるが、形容詞の變化は、まだ述べてゐないから、變化の全形を示すのはやめる。

【註】 Goethe の名作に、die Leiden des jungen Werthers (若きヴェルテルのなやみ) といふのがあるが、今の文法では Werthers の *s* を削らなければならない。

ハ) 姓名をすつかり擧げる場合には、最後のもののみ變化する。例へば Goethe は正式に云ふと、Johann Wolfgang von Goethe であり、Lessing は Gotthold Ephraim Lessing である。かゝる場合には、Goethe や Lessing だけが變化する。

【註】 I) 但し Jesus Christus (イエス・キリスト) は特別の變化をする； [N.] Jesus Christus, [G.] Jesu Christi; [D.] Jesu Christo; [A.] Jesum Christum. 然し今では冠詞をつけ、名前そのものは變化をさせない方法も行はれてゐる。

II) Johann Wolfgang von Goethe とか、Friedrich von Schiller とかの von は、貴族たる稱號であつて、「の」の義ではない。これはあつてもなくても變化には關係がない； die Werke Friedrich Schillers 又は die Werke Friedrich von Schillers. 又 von を有する名を日本語で云ふ時は、正式には von をも入れる。例へばフォン・ビーベルシュタイン (von Bieberstein) 氏。

ニ) 人名の前に稱號が來り、此稱號の前に冠詞のなきときは、人名のみ變化し、冠詞があるときは、稱號のみ變化して、人名は其儘である。

N.	König Wilhelm	der König Wilhelm
G.	König Wilhelms	des Königs Wilhelm
D.	König Wilhelm	dem König Wilhelm
A.	König Wilhelm	den König Wilhelm

(例) die Werke des Dichters Schiller (詩人シラーの著作);  
die Familie des Meisters Anton (アントン親方の家族)

但し君 (Mr.) を意味する Herr は、冠詞の有無に拘らず、Herr  
それ自身がいつも変化をする。

N.	Herr Weber	der Herr Weber
G.	Herrn Webers	des Herrn Weber
D.	Herrn Weber	dem Herrn Weber
A.	Herrn Weber	den Herrn Weber

- 【註】 I) 稱號が冠詞を有する場合、二格に於て冠詞のみ變化せる例も  
ある: der Bürgermeister Schmitt, des Bürgermeisters (des  
Bürgermeisters の代り) Schmitt.  
II) (der)-Herr の次に、更に一詞の稱號來るときは、此第二の  
稱號は變化しない: der Herr Professor (教授) Schmitt; des  
Herrn Professor Schmitt; dem, den Herrn Professor Schmitt.  
III) 帝王の名の後に附せらるる稱號、即ち後裔については、形  
容詞の章で述べる。

17. 固有名詞の第二種は、地理的のものであるが:

イ) 國名・土地名は通常は中性で、形容詞の來ない限り、定  
冠詞をつけない。二格には *s* をつける。但し齒音に終るも  
のには、二格の意味をあらはすとき、前置詞 von (of) をとら  
しめる。例へば England (英國) の二格以下は Englands, Eng-  
land, England と變化し、Berlin (ベルリン) は、Berlins,  
Berlin, Berlin と變化する。然し Paris (巴里)、Mainz (マイ  
ンツ) の如きは、齒音に終るから、二格の意味の時は、von を  
つける: die Umgebung von Mainz (マインツの周圍)、die Hän-  
jer von Paris (巴里の家々; これに對してベルリンの家々は  
die Häuser Berlins と云ふ)。

【註】 I) von をつける代りに、其前に該固有名詞の種類をあらはす普通  
名詞の二格をつけてもよし、其際固有名詞の變化しないことは人  
名に於けると同じである; die Häuser der Stadt Paris 一因に

云ふが、英の the city of Paris を譯するときに、die Stadt von  
Paris とする必要はない、いつも die Stadt Paris とする。

II) 地理的固有名を構成する基礎詞が、男性又は女性であつて  
も、固定せる以上は、これを顧慮しないで、中性として取扱ふの  
である。例へば Königsberg の基礎詞 Berg は「山」の義で、  
男性であるが、地名となつた時は、中性である。又 Magde-  
burg の Burg は「城」の義で、女性であるが、これも地名と  
なると、中性として取り扱はれる。

ロ) 中性以外の國名地名には、いつも必ず定冠詞をつけ  
る、形容詞の有無には關しない。例へば Mandchurei (滿洲)、  
Mongolei (蒙古)、Türkei (土耳其)、Schweiz (瑞西) は女性で、  
Balkan (バルカン) は男性である。女性の場合は、勿論冠詞そ  
のものの外變化はない。例へば die, der, der, die Schweiz. 男性は  
單數二格で、(e)s を語尾につける: der Balkan (バルカーン)、  
des Balkans, dem, den Balkan. 一複數の國名にもまた定冠詞をつ  
ける: die Niederlande (ネザーランド; Niederländer とは云は  
ず)、die Rheinlande (ライン州)。これらは普通の複數と同じ  
く取扱はれる: die Niederlande, der Niederlande, den Niederlanden,  
die Niederlande. 一中性以外の地理的名稱の前の冠詞は、邦人が  
忘れやすいものだから、特に注意を要する。

【註】 男性の地名は der Haag (海牙)。

ハ) 湖海・山川・森林の名は、常に定冠詞を附し、普通名詞と  
同様の取扱ひをする。

(ヒマラヤ山)	(ライン河)	(オーデル河)
der Himalaya	der Rhein	die Oder
des Himalayas	des Rheins	der Oder
dem Himalaya	dem Rhein	der Oder
den Himalaya	den Rhein	die Oder

(例) die Quelle des Rheins (ライン河の源); die Täler des Sarzes (ハールツ山の谷; [一格] der Sarz)。

【註】 I) 近來此種の二格の s を附せざる風があるけれど、これは正しくない、矢張 des Rheins, des Rifs (der Nil=ナイル河) とするのがよい。

II) これらの名詞に形容詞の附屬する時の變化は、形容詞の條にゆづる。

18. 地名國名又は山川名の前に、其種屬を説明すべき普通名詞が、同格的に置かれるときは、普通名詞のみ變化して、固有名詞は變化しない。

(例) der Berg Fuji (富士山), des Berg(es) Fuji; der Fluß Mijs (木曾川), des Flusses Mijs; die Stadt Paris, der Stadt Paris; das Dorf Niwa (丹羽村), des Dorfes Niwa.

此例は月の名の前にも行はる; der Monat Mai (五月), des Monats Mai. 然るに Monat を用ひざるときも、二格に s を採らざる風が生じて來た; der Mai, des Mai (古くは des Mais)。

【註】 人名の場合をも考へ合せよ; der Dichter Goethe, des Dichters Goethe; mein Bruder Karl, meines Bruders Karl; (例) die Werke des Philosophen Schopenhauer (哲人シローペンハウエルの著書; der Philosoph [弱變化] 哲人)。

## 第二節

### 名詞の數

19. 名詞は普通單數・複數の兩形を有するものであるが、複數形を缺くものも少くはない。

(A) 固有名詞に於て。

これには、ほとんど複數はない。然し (1) 同名の人物のいくたりかをあらはすとき(即何々家の人々)、——(2) 家族をあらはすとき、——(3) 普通名詞化して「の如き人物」の意をあらはすときには、複數形が出来るのである。その規則は:

i) 男性名は大抵 -e を附するか、-s を附ける; 例へば Heinrich の複數は die Heinrichs 又は die Heinrichs; Wolf の複數は die Wolfe 又は die Wolfs である。但し a, e, el, en, er, i 等に終るものは、複數に於ても、其儘にしておいて、たゞ三格で -n をつけるだけである; Alexander の複數は、die Alexander で、二格は der Alexander, 三格が den Alexandern; 四格が die Alexander となる。

【註】 o に終るものは、複數で ne(n) を加へる; Otto の複數は Otto-ne(n) であり、Cicero の複數は、Cicerone(n) である。

ii) 女性の名は、-e に終るものは複數で -n をつけ、-a で終るものは -s をつける。Maria の複數は die Marien であり、Leonore の複數は、die Leonoren である; そして Anna は die Annas となり、Berta は die Bertas となる。子音に終るものは、其儘で居る; Hedwig は die Hedwig となる。

【註】 男名・女名の變化について、詳しく云へばなほ規則があるけれど、



固有名詞の複数は、左程展開されるものでないから、此位にして置く。

iii) 家族をあらはすときは、姓の後に *er* を付ける；*die Schmidts*=*die Familie Schmidt* (シュミットの家族)；*die Brauns*=*die Familie Braun* (ブラウンの家族)。

iv) 普通名詞として用ゐるときは、單に *die* のみを付ける；*die Münchhausen*=*Männer wie (as) Münchhausen* (ミュンヒハウゼンの如き人達)；*die Goethe*=*Männer wie Goethe* (ゲーテの如き人たち)。

(B) 物質名詞 (Stoffname [M.]) に於て。

物質名詞は其本質上複数をもち得ざるものなれど、種類を示す時には、複數形が使用されることがある。これは *sorten*=*arten* と同意味である (*sorte*, *Art* は共に「種類」の意)；*das Papier* (紙) から *die Papiere* が出来るが、これは *die Papierarten* (紙の種類 [複]) の義；*der Wein* (葡萄酒) の複數 *die Weine* は *die Weinsorten* (葡萄酒の種類 [複]) の義である。

【註】 但し往々にして普通名詞的に解して、複数を用ゐることがある；*das Wasser* は「河海湖沼」の意味では、複數 *die Wässer* を使用し、*das Papier* も「書類・證券」の意味で、複數 *die Papiere* が使用される。

(C) 抽象名詞 (Begriffsname [M.]) に於て。

これにも本質上複数はない筈だが、その性質を有する個體・個物を云ひあらはすときは、複數形があり得るものである；例へば *die Schönheit* は、「美」と云ふ抽象的の性質を指す言葉なれど、此性質を有する個體、例へば「美人」をあらはすときには、*die Schönheiten* (美人達) の形が用ゐられる；又 *das Schreiben* は「書く事」(writing) の意味なれど、「手紙・文書」の意味で

は、*die Schreiben* と複數に使用することが出来る。又前掲 (A) の如く種類をあげるときにも、複數が用ゐられ得る；*die Krankheit* は「病氣」(sickness) の義であるが、其複數 *die Krankheiten* は「種々の病氣」の意味に使はれる。—— 一般に行爲をあらはす抽象名詞は、複數形を採る事が多い。*der Sprung* (飛躍)、*die Sprünge* (何回か飛躍)；*der Gang* (使用などに行く事)、*die Gänge* (何回か行く事；幾度かの用足し)。

(D) 集合名詞 (Sammelname [M.]) に於て。

これにあつては、同一種類のもの全體を總括するときには、複數があり得ないけれど、その集團の多數を云ひあらはすときには、複數形を使用することが出来る。例へば *Christenheit* [S.] は、基督教全體を指し、*Pflanzenreich* [M.] は植物界全體を指すものなれば、これには複數はあり得ざる譯であるが、一團の生徒より成る *Klasse* [S.] (クラス)、一群の兵士より成る *Heer* [M.] (軍隊) の如きは、かゝる集團のいくつかを云ふときに、複數を作り得るのである；即ち *die Klassen* (いくつかのクラス)、*die Heere* (いくつかの軍隊)。

20. 抽象名詞や物質名詞は、いろいろな意味で、複數形を採り得ることは、上に述べたが、それらのうちには、この際別の文字と複合しなければならぬものがある。今二三の例を挙げると、*das Unglück* は抽象名詞で、「不幸」の義であるが、いくつかの「不幸なる出来事」を意味するときは、*die Unglücksfälle* となり、*der Streit* は同じく抽象名詞で、「争」「争論」を意味するが、その複數は *die Streitigkeiten* となる、*der Rat* が「忠告・評議」の意味のとき、複數は *die Ratschläge* となり、*der Beruf* (職業) がいろいろな職業を意味する時、*die Berufsarten* となり、*Obst* (果物) と云ふ集合名詞が、複數のときには、*Obstarten* 又は *Obstsorten* (果物の種類) となるが如きであ

る。この種はまだ澤山あるが、煩しいから、列挙することはやめる。

21. 次には、複数の形のみあつて、單數形のないものがいくつか存在する。例へば「兩親」を意味する die Eltern には、單數のありやうがない。強ひて分ければ、der Vater (父)と die Mutter (母)となるだけである。兄弟姉妹を總括する die Geschwister, 幾日か續く休暇を意味する die Ferien, 兄弟だけを總括する die Gebrüder 等は之に屬する。又病名でも複數に使はれるものがある; die Blattern (疱疹)、die Masern (麻疹)、又 Trümmer (碎片)や、Kosten (費用)の如きは、いつも複數形式で使はれる。

22. 一個の單數形に對し、二個の複數形があり、それによつて意味を別々にするものがある。例へば die Bank には二つ複數形があつて、die Bänke と云ふときは、「ベンチ」を意味し、die Banken と云ふときは、「銀行」を意味する。従つて單數の die Bank には、兩義がある譯である、此種のをあげれば:

das Band .....	die Bänder (紐)	die Bande (桎梏)
das Gesicht .....	die Gesichter (顔)	die Gesichte (幻)
das Licht .....	die Lichter (燈火)	die Lichte (蠟燭)
der Mann.....	die Männer (男)	die Mannen (家來)
die Mutter .....	die Mütter (母)	die Muttern 螺旋)
der Ort.....	die Orte (町・村)	die Orte (場所)
die Sau .....	die Säue (牝豚)	die Sauen (野猪)
das Wort .....	ie* Wörter (詞)	die* Worte (言)

【註】 字引は、個々の文字 (Wortabel [辞]) を集めたるものだから、Wörterbuch と云ふ。然し「貫讀の辭」などには、Worte des Lobes と用ふる。即ち前のは、單語を一つ一つに數ふる場合、後者は意味の聯絡する言葉に指すに使用するものである。

### 第三節

#### 名詞の性

23. 名詞の性の起源を述べても、少しも實用にならぬから、略する。一番良い方法は、名詞を暗記するとき、定冠詞をつけて覚え込むことである。性の觀念の乏しい邦人は、動もすれば性の事を忘れ、名詞だけを記憶裡に残すのである。例へば犬を der Hund だと覚えて仕舞へば良いのに、犬は Hund だとしか覚え込まぬ。この故に實用となると、さつぱり運轉が利かなくなる。名詞の性を記憶するには、これ以上の良法は絶無であるが、これを記憶して居れば、性の區別上、多少の裨益があらうと思はれる規則を、下に掲げて見る。然しこれは効果あまり多くはないから、くたたく説くのはやめる。それは、名詞の形による區別法と、意味による區別法とである。

24. 意味 (Bedeutung [意]) に依る區別法。

人類や禽獸は大抵自然性に依るが、其幼弱なるものは、中性となつてゐる。

【例】 der Mann (男・夫)、die Frau (女・妻); der Onkel (叔父)、die Tante (叔母); der Stier (牡牛)、die Kuh (牝牛); der Gänserich (雄鶩)、die Gans (雌鶩); das Kind (小兒); das Kalb (犢)、das Ferkel (乳豚)。

【註】 人類にての例外は、das Weib (女・妻)。—又男性名詞に in を附して、それに対応する女性名詞をつくるものもある; der Lehrer (男教師)、die Lehrerin (女教師); der König (國王)、die Königin (女王); der Hund (雄犬)、die Hündin (雌犬)。

無生物に就いて云へば、

[A] 男性なるものは:

i) 四季・十二ヶ月・七曜・方位・風の名。

der Frühling (春)、der Herbst (秋)、der Januar (一月)、  
der Mai (五月)、der Montag (月曜)、der Mittwoch (水  
曜)、der Osten (東)、der Süden (南)、der Orkan (暴  
風)、der Passat (貿易風)。

【註】 春を意味する Frühjahr は中性なれど、これは複合名詞で früh  
+ Jahr だから、基礎詞の性に依つたのである。

ii) 礦石・果樹及び穀物・農作物の名。

der Diamant (金剛石)、der Granit (花崗石)、der Quarz  
(珪石); der Weinstock (葡萄樹)、der Pfirsich (桃); der  
Reis (米)、der Roggen (ライ麦); der Hafer (燕麥); der  
Hanf (大麻)。

【註】 果樹にして、Baum を基礎詞となすものは、この性によつて、  
勿論男性である: der Kirschbaum (櫻の木)、der Kastanien-  
baum (栗の木)、der Birnenbaum (梨の樹)。

iii) 貨幣の名。

der Pfennig (プフェニヒ [五厘])、der Dollar (ドル)、  
der Louisdor (ルイドル)、der Pfaster (ピアスター)、der  
Gen (圓)。

【註】 但しマルクは女性である: die Mark.

[B] 女性なるものは。

i) 小鳥・昆蟲及高木・果實・草花の名の大部分。

die Nachtigall (鶯)、die Wachtel (鶉)、die Drossel (鶇);  
die Wanze (南京蟲)、die Biene (蜂)、die Fliege (蠅);  
die Eiche (榎)、die Tanne (杉)、die Kiefer (松)、die  
Ruhe (胡桃)、die Pflaume (李)、die Rose (薔薇)、die  
Rohr (石竹)。

【註】 但し der Käfer (甲蟲) の如きは、別である。

ii) 河川名の大部分。

die Weser, die Oder, die Elbe, die Wolga.

【註】 der Rhein, der Po, der Nil, der Main 等は別である。

iii) 船の名。

これは其名稱の本来の性に従ふべきであるが、近來女性  
にする風がある: der Kaiser Wilhelm [本来の性による];  
die Moltke [本来性 der]、die Hamburg, die Deutschland  
[本性は二つとも中性]。

[C] 中性なるものは。

i) 國名地名の大部分。

(das) Preußen (普魯西)、(das) Japan, (das) Berlin (伯林)、  
(das) Luzern (ルツェルン)。

【註】 中性のものは、形容詞なき限り ([例] das schöne Luzern (美し  
いルツェルン)、附せられざるを常とす。—中性ならざるもの die  
Schweiz, der Haag 等については、既に述べた)。

ii) 集合名詞及物質名詞の大部分。

das Heer (軍隊)、das Gebirge (山脈)、das Volk (民衆);  
das Fleisch (肉)、das Brot (パン)、das Eis (氷)、das  
Eisen (鐵)、das Silber (銀)、das Kupfer (銅)。

iii) 動詞を其儘名詞としたる時及他の詞類を名詞化する時。  
das Wissen (知ると; wissen 知る (to know) より)、  
das Schreiben (書くと; schreiben 書く (to write) より)、  
das Schwimmen (泳ぐこと; schwimmen 泳ぐ (to swim)  
より); das Ich (「私」と云ふ言葉)、das Aber (「然し」  
と云ふ言葉)、das Ach (「ア、」と云ふ詞)。

【註】 文字の名も中性である: das A (アと云ふ文字)、das I (イ  
と云ふ文字)。

25. 次に形 (Form [F.]) による區別法を述べるが、これも大  
じた効果はないから、ごく大體に止める。

[A] 男性に屬するものは。

i) -er, -en, -ig, -ich, -ing, -ling に終るものの大部分。

der Finger (指)、der Schneider (裁縫師); der Morgen  
(朝)、der Magen (胃); der Honig (蜂蜜)、der Essig  
(酢); der Stroh (藁)、der Teppich (絨氈); der Hering  
(鱈)、der Ränning (雀); der Feigling (臆病者)、der  
Günstling (寵人)。

[B] 女性に屬するものは:

i) -ei, -heit, -keit, -schaft, -ung 及び -ie, -ion, -it, -tät に終る  
もののすべて。

die Sklaverei (奴隸たること)、die Brauerei (醸造業)、  
die Freiheit (自由)、die Dankbarkeit (感謝)、die Freundschaft  
(友誼)、die Zeitung (新聞)、die Kleidung (衣服)、  
die Poesie (詩)、die Nation (國民)、die Profession (行  
列)、die Grammatik (文法)、die Humanität (人道)。

【註】 -in に終る名詞のことについては、既に述べた; die Lehrerin  
(女教師)、die Hündin (牝犬)。

[C] 中性に屬するものは:

i) -chen, -lein なる語尾を有するもの、即ち縮小名詞 (Dimi-  
nutiv [M.])

【註】 -chen, -lein は其示すものが、小さいか、愛らしいか又は親愛な  
るものであることをあらはす。またこれを有する名詞の語幹の  
母音は、變母音となるのが普通である: die Blume (花)、das  
Blümlein (小さい・可愛い花)。—又 -chen, -lein を、どの名詞  
にも勝手につけてよいと云ふわけではない; -chen のつくもの、

-lein のつくものは、きまつてゐる。但しごつちをつけてもよ  
いものもある。

das Fräulein (嬢; Frau [F.] がら); das Väterchen (おとう  
さん; Vater から); Lämmchen 又は Lammlein (小羊; Lamm  
[M.] 羊から)。

ii) tum に終る名詞の大部分。

Das Christentum (基督教)、das Reichertum (帝國)、das  
Eigentum (財産)

【註】 但し Irrtum (迷誤)、Reichtum (富) は男性に屬する。

iii) Ge- を先頭に有する集合名詞の大部分。

【註】 Ge- を名詞の前に附して (之を前綴 Vorsilbe [F.], Präfix [M.]  
と云ふ)、その事物の集積又は反覆を示す場合がある; 例へば  
Stein (石) から Gestein (群石) が出來、Tier (動物) から  
Getier (群獸) が出來るやうなものである。此際幹母音が變つ  
たり、語尾がついたり又はなくなつたりすることはある。

Das Gebirge 連山; (Berg [M.] 「山」から)、das Gewölle (積  
雲; Wolke [F.] 「雲」から) 其他 das Gebüsch (叢)、das Ge-  
spräch (對話)、das Gehölz (小林) 等。

【註】 但し die Gemeinde (自治團體) は別である。

26. 名詞の形そのものは一つなれど、性を異にし、従つて意  
義を異にするものがある。これにはまた二種あつて、複數形を  
同一にするものと、別にするものである。前者の例は、單數形  
See には、男性のもの (der See) と女性のもの (die See) とが  
あつて、前者は「湖」を意味し、後者は「海」を意味するが、其  
複數形は die Seen 一つしかない。後者の例は、單數形 Bauer  
には、男性のもの (der Bauer) と中性のもの (das Bauer) とが  
あつて、前者は「農民」を指し、後者は「鳥籠」を意味し、井

複数形も、前者は混合變化又は弱變化であるから、die Bauern  
となり、後者は強變化だから、die Bauer となるのである。今  
この二種の他の例をあげると、

[A] 複数形を同一にするもの。

der Bulle (=der Stier 牡牛) [弱]	}	die Bullen
die Bulle (法王教書) [弱]		
der Heide (異教徒) [弱]	}	die Heiden
die Heide (荒野) [弱]		
der Kunde (=Käufer 華客) [弱]	}	die Kunden
die Kunde (報知)		

[B] 複数形を二つ有するものは。

der Band (=ein Buch 書籍) [強 II•B]	.....	die Bände
das Band (帶、紐) [強 III•B]	.....	die Bänder
der Bund (同盟) [強 II•B]	.....	die Bünde
das Bund (束、把) [強 II•A]	.....	die Bunde
der Tor (=der Narr 愚者) [弱]	.....	die Toren
das Tor (門、都門) [強 II•A]	.....	die Tore
der Leiter (案内者、指揮者) [強 I•A]	.....	die Leiter
die Leiter (梯) [弱]	.....	die Leitern
der Steuer (税) [弱]	.....	die Steuern
das Steuer (舵) [強 I•A]	.....	die Steuer
die Wehr (防禦) [弱]	.....	die Wehren
das Wehr (堤防) [強 II•B]	.....	die Wehre

【註】 此外に單數でも複数でも、同形同義でありながら、性の定まらぬ  
ものもある。例へば Barometer (晴雨計) の複数形は、die Baro-  
meter だが、性は男性又は中性である。Kamin (暖爐、複数形は

Kamine), Münster (大伽藍; 複数形は Münster), Szepter (王  
笏; 複数形は Scepter) 等は此種に屬し、Muskel (筋肉; 複  
Muskele) は男性又は女性に屬する。

27. 名詞の數は前節に於て、性は本節に於て説いた。次節  
に於ては、冠詞の用法を説くつもりであるが、それには短かい  
文章で例示する必要があるから、次には人(稱)代名詞と、助  
動詞 sein (to be; ある) との變化を掲げねばならない。

人(稱)代名詞は英語と同じく、三つの人稱と二つの數に分  
れ、三人稱の單數に於ては、性を區別するのであるが、これに  
sein の現在變化を配當すると、下のやうになる。

	單		複
第一人稱	<u>ich</u> bin (I am)		<u>wir</u> sind (we are)
第二人稱	<u>du</u> bist (thou art, you are)		<u>ihr</u> seid (you are)
第三人稱	<u>er, sie, es</u> ist (he, she, it is)		<u>sie</u> sind (they are)

そこで三人稱複數の sie の頭字を大書して、「貴君」の義に  
使用する。變化は一切、又彼等 (they) の意味の時と同一であ  
る。又 du は夫婦・親戚・親友などの間に用ゐられるが、神又は  
小供に對して使用されるものである。複数 ihr も勿論かうし  
た場合に使はれる。書簡中では、du の頭字は大書される。英  
語で thou の用ゐられる範圍よりも、獨逸で du の使はれる範  
圍の方が遙かに廣い。——又英語の I はいつでも大書される  
が、獨逸語の ich は文頭に來ない限り大書されない。

28. 助動詞 sein と相並んで重要なるものは、haben (to have  
持つ) であるから、今こゝに其現在變化をかゝけるが、これは  
上の sein と共に、必らず暗記しなければならない。

第一人稱 ich habe (I have) wir haben (we have)  
 第二人稱 du hast (thou has, you have) ihr habt (you have)  
 第三人稱 er, sie, es hat (he, she, it has) sie haben (they have)  
 第三人稱複数の頭字を大書して、對稱の敬稱に使用することは、上と同様である： Sie haben (you have).

### 第四節

#### 冠詞の用法

29. 定冠詞は事物を既に知られたるもの、確定せるものとして（又はそうだと想定して）あらはし——従つてそれは「その」、「あの」、「例の」、「われらの知つてゐる」、「一件の」等の義を持つてゐる——、不定冠詞は、或物をまだ知らぬもの、初めて話頭に上れるもの、又は不定のものとしてあらはすのが根本義である。

【註】 I. だから對話では、初めて出て来る・未知のものには、不定冠詞を使用し、一旦そのものと極まつた後は、定冠詞を使用するのである。

(例) Ich habe einen Hund, und der Hund ist groß.  
 (私は犬を所有してゐて、その犬は大きい)。

【註】 II. 既に述べた事であるが、不定冠詞には複數形がないから、不定冠詞を有する名詞を、複數にするときは、冠詞をつけない。

(例) Er hat ein Buch. Er hat Bücher (ein Buch の複數)。

30. 次に定冠詞は、種屬全體に互る判斷を下すときに、單

數（又は複數）の名詞の前に付けられる。

Der Mensch ist sterblich (mortal).  
 (人は死すべきものである)。

これは人間なる種屬全體についての判斷を、云ひあらはすものである。其他：

Die Kunst (art) ist lang (long), das Leben (life) kurz (short).  
 (藝術は長く、人生は短か)。

Das Gold (gold) ist gelb (yellow). (金は黄色である)。

などの類である。その複數は、

Die Menschen sind sterblich. (人々は死すべきものである)。

の類である。但しかゝる總括的判斷は、不定冠詞を用ゐてもなし得る。其際は、其種屬中の或不定の一個を携へ來つて、全體を代表させる意味である。例へば：

Ein Dieb (thief) ist furchtsam, ein Löwe (lion) stark.  
 (泥棒はびくびくものだが、獅子は強い)。

冠詞なき複數も、また全稱的判斷を下すことが、出来る。此際定冠詞があつても、同じである。

(Die) Nachtigallen sind Singvögel.  
 (鶯〔複〕は鳴禽〔複〕である)。

31. 其他に於て、冠詞の有無についての細則をあげると：

#### (A) 冠詞の省略さるべき場合は

i) 人名又は中性の地理的固有名詞の體；例へばフリードリッヒ (人名) の戦争は、die Kriege (wars) Friedrichs と云つて、die Kriege des Friedrichs と云はない。

【註】 I) 但し男性・女性の地理的固有名詞の前には、いつも定冠詞の必要なことは前に述べた： die Schweiz, die Niederlande (複), der Haag. — 山川海峽林名にもこれに附することは、同じく前述のとほりである： der Rhein, die Oder, der Himalaya

【註】 II) 人名又は中性の地名も、之に形容詞がつくときは、必ず冠詞をつける。例へば露國は Rußland [M.] であるが、これに「廣い」と云ふ形容詞をつければ、冠詞が附着して、das weite Rußland となる。London (ロンドン); das alte London (古いロンドン); Luzern (瑞西の市名); das herrliche Luzern (美しいルツェルン); Napoleon; der große Napoleon (偉大なるナポレオン); Anna; die schöne Anna (美しいアナ) の類である。然し人名にあつては、家庭用語に於て、又は格を明示しなければ意味が通じない恐れあるときには、定冠詞がつけられる。

Der Karl kommt (comes).

(カールが来る) [家庭用語]。

Fritz lobte (praised) den Karl.

(フリッツがカールをほめた) [格の明示]。

ii) 物質名詞・抽象名詞が、a) 全稱的判斷を示すか、b) 或特定のものを示す時の外の場合。

【註】 a) 全稱的判斷の例は既に 29 節に述べたから、b) 特定のものを示す場合をあげると、Ich trinke das Bier. の如きもので、これは或きまつた (例へば「さつき話した」の如きもの) ビールを飲むことを意味し、Ich esse (eat) das Brot (bread). も或特にきまつたパンを食べることを意味してゐる。

即ち一般には：

Ich trinke Bier. (私はビールを飲む)。

Ich esse Brot. (私はパンを食べる)。

Ich habe Schlaf. (私は眠むい)。

Er hat Mut. (彼は勇氣がある)。

其他の例をあげると、「パンを焼く」は Brot backen; 「忍耐をする」は Geduld haben; 「水をくむ」は Wasser schöpfen; 「嘔吐を催す」は Ekel empfinden である。

【註】 I) 全稱的判斷はまた無冠詞でも云ひ表はす事が出来る: Freiheit ist das höchste (highest) Gut. (自由は最高の寶である。) Gold und Silber sind Edelmetalle. (金銀は貴金屬である。)

II) 英語にては、或語句を不定に云ひあらはすときは、動詞に to をつけ、これに關聯するものは、動詞のうしろに置く習慣であるが、獨逸では動詞に zu をつけないで、最後へもつて行く習慣である: to have patience = Geduld haben; to bake bread = Brot backen.

iii) 二格が先行するとき、後續する名詞に於て。

例へば das Haus des Onkels (Onkel [M.] = uncle; 叔父) に於て、二格を先行させると、des Onkels Haus となつて、定冠詞が失はれる。かゝる二格をザクゼン二格 (sächsischer Genitiv) と稱する。der Ring (ring; 指輪) der Schwester = der Schwester Ring; die Wohnung des Lehrers = des Lehrers Wohnung.

iv) 客語的名詞として用ゐられる名詞の前。

Er ist Schüler. と云ふ文章に於ては、er は主語 (Subjekt [M.]) で、ist Schüler は客語 (Prädikat [M.]) である。そして Schüler は名詞だから、これを客語的名詞といひ、國籍・身分・職業などを云ひあらはすもので、通常無冠詞である: Er ist Japaner. (彼は日本人だ); Sie ist Amerikanerin. (彼女はアメリカ婦人だ。); Seid ihr Schneider? (君たちは裁縫師か?) 等。

【註】 定冠詞をつけると、全く特定のものをあらはらす: Er ist der Schüler. と云へば、『彼は「今話した」「御承知の」「例の」「一件の」生徒です』の義となる。一但し不定冠詞はつけてもよろしい: Er ist ein Schneider.

v) 書物の表題、文の題名等に於て。

Deutsche Grammatik (獨逸文典)。

Lehrbuch der Nationalökonomie (國民經濟學教科書)。

Artikel bei Stoffnamen 物質名詞に於ける冠詞 (の用法)。

【註】直ちに内容を示さないで、別の普通名詞を借りて来た書名には、定冠詞がある: „Der praktische Schulmann“ (實際的教師 (雜誌名))—又「何々についての本」の義のとき、何々丈けを使用するには、定冠詞をつけて一格にする: der Roman (小説について、小説論); das Drama (戯曲について、戯曲論)。

vi) 呼び掛け・號令などに於て。

Herr Grant! (グラント君) Frau Müller! (ミューラア夫人)

Kopf hoch! (頭をあげよ) Brust heraus! (胸をつき出せ!)

vii) 對語・熟語・成句・格言などに於て。

Haus und Hof (家屋敷)、Himmel und Erde (天地)、Leben und Tod (生死)、Grund und Boden (土地); Krieg führen (戦ふ; to make war), Hand anlegen (着手する)、Wind machen (大言する)、Mut schöpfen (勇を鼓する)、Not lehrt (teaches) beten. (困窮は祈ることを教ふ; 苦しいときには神を頼むことになる)。

【註】前置詞と結合するものについては、前置詞の章其他で、示すことにする。

[B] 冠詞の附せらるるを普通とするもの:

i) 四季・十二月・七曜の名。

Der Frühling (春)、der Mai (五月)、der Sonntag (日曜日)、der Mittwoch (水曜日)。

【註】但し意味によりては、ein Sonntag も無冠詞の Sonntag もあり得る事は勿論である。上記の規則は通常の場合をさしてゐる。

ii) 代價の基本となる數量の單位の名詞の前、但し普通此際

は四格である。

Die Butter kostet (costs) 2 Mark das Pfund [Mf.].

(バターは一ポンド二マークを價する)。

Das Band kostet eine Mark den Meter.

(リボンは一米突一マークである)。

【註】稀れには上掲の如き四格を、一格にして使用する人がある: Das Band kostet eine Mark der Meter.

iii) 二格の後續する抽象名詞の前。

die Trägheit des Knaben (男の兒の怠惰)

die Zufriedenheit des Dieners (召使の満足)

die Geduld des Lehrers (教師の忍耐)

iv) 固有名詞については、本項 [A] i) を看よ。

32. 二つ又はそれ以上の名詞が並べられるときには、冠詞は次のやうな規則で、置かれたり省かれたりする。

[A] 性・數の異なるときは、いづれにも冠詞をつける。

der Sohn und (と; and) die Tochter (男單+女單)

der Vater, die Mutter und das Kind (男單+女單+中單)

die Mutter und die Kinder (女單+複)

[B] 性・數が同一でも、別なものをあらはすときには、冠詞を繰り返へす。

a) der Freund und der Better (友人と從兄弟 = 二人)

b) die Erzieherin und die Freundin der Kinder

(子供たちの教育者と友人 = 二人)

従つて、下のやうな場合には、同一人 (又は同一物) を指すのである。

a) der Freund und Better (友人にして且つ從兄弟なるもの = 一人)



b) die Erzieherin und Freundin der Kinder (子供たちの  
教育者にして且つ友人たる婦人 = 一人)

【註】 従つて定動詞 (主語の人稱・數に應ずるもの) がちがつて来るのは勿論である。

Der Freund und der Better	} sind oben. (階上に居る)
Die Erzieherin und die Freundin der Kinder	
Der Freund und Better	} ist oben.
Die Erzieherin und Freundin der Kinder	

[C] 同一人 (又は同一物) を示さなくとも、同性・同数のものを、列舉的に並列するときには、初めのものだけに冠詞をつければよい。

Der Hund, Esel, Ziegenbock und Gase sind Haustiere.  
(犬と驢馬と野羊と兎とは家畜である)。

【註】 此場合、性又は數がちがへば、かゝる省略は出来ないことは、[A] でのべた通りである。

Der Hund und die Katze (猫) sind Haustiere.  
又列舉されたものが、同一物なりや否やの疑問を生じ得る場合には、勿論上掲の規則 [B] に依らなければならぬ。

[D] 複数の名詞が並べられるときには、最初のものだけに冠詞をつける。

die Häuser und Scheune (家[複]と納屋[複])  
die Knaben und Mädchen (男兒たちと女兒たち)

【註】 I) 單數ならば das Haus und die Scheune; der Knabe und das Mädchen と云はなければならぬ。

II) 複數のものいくつかの後に、單數のものがあらはれて来るときには、勿論その前には冠詞をつける。

Die Tische, Stühle, Bänke und der Boden.  
(机・椅子・長掛及床)

## 第二章

### 前置詞

1. 前置詞 (Vorwort [M.], Präposition [F.]) は、或行爲又は状態と他のものとの關係をきめるものであつて、其次の來るものの格を支配する。言ひ換へると、前置詞によつて、其次に來る格がちがふのである。此方面から見て、前置詞を四つに分けることが出来る。

- i) 二格を支配する前置詞。
- ii) 三格を支配する前置詞。
- iii) 四格を支配する前置詞。
- iv) 三格又は四格を支配する前置詞。

2. 前置詞を説く前に、簡單なる文章を解釋し得るやうに、助動詞 werden の現在變化をかゝげることにする。

ich werde	wir werden
du wirst	ihr werdet
er, sie, es wird	sie werden.

但し werden は動詞のときには、成る (to become) の意味を有し、助動詞のときには、動詞を助けて、未來形をつくる一要素となるものである。例へば、Er wird Soldat. (彼は兵士になる) に於ては wird は動詞であるが、Er wird Soldat werden (彼は兵士になるであらう) に於ては、wird は助動詞で、文末の werden と共に、未來形を示してゐる。

【註】 動詞の不定法 (動詞のまだ變化を起さない原の形を、かう名づける) は、上掲の例の如く、普通は文末に來る。又上掲の wird のやうに、主語の人稱・數に對應するものが定動詞である。これ

は助動詞でも動詞でも、かまはないで、等しくさう云はれる。

3. 次に動詞の現在變化を知る必要があるから、下に概説するが、動詞を、其幹母音が、過去又は過去分詞に於て、變ずるか變じないかによつて、強變化と弱變化とに大別する。變へないものを弱變化、變へるものを強變化の動詞と云ふ。

		過去	過去分詞
弱	{	reden (話す)	redete geredet
		töten (殺す)	tötete getötet
強	{	gehen (行く)	ging gegangen
		stoßen (突く)	stieß gestoßen

【註】 其他に混合變化等あれど、それは動詞の章で述べる。

さて強變化動詞と弱變化動詞とでは、其現在變化の形を異にする。強變化の方が面倒であるから、これは後に述べることとし、こゝでは只弱變化だけについて云はう。

【註】 下表の - は動詞の語幹を示す。例へば sagen の語幹は sag, warten のそれは wart である。

		sagen (云ふ)	warten (待つ)
ich	-e	ich sage	ich warte
du	-(e)st	du sagst	du wartest
er	-(e)t	er sagt	er wartet
wir	-en	wir sagen	wir warten
ihr	-(e)t	ihr sagt	ihr wartet
sie	-en	sie sagen	sie warten

【註】 du, er 及 ihr に於て、附せらるべき語尾が、e で切まるか否かは、主として發音の都合による。詳しくは動詞の章で述べる。

## 第一節

### 二格を支配する前置詞

4. 二格を支配する前置詞は、大略下の如きものである。

(an)statt	代りに	halb(en) halber	の爲に	unfern	附近に
außerhalb	外部に	Kraft	依つて	vermöge	爲めに
innerhalb	内部に	laut	據りて	während	間に
oberhalb	上部に	mittels	依りて	*1 troß	にも拘らず
unterhalb	下部に	vermittelt	依りて	*1 längs	沿うて
diesseit	此側に	um...willen	爲に	*2 zufolge	に従つて
jenseit	彼側に	ungeachtet	にも拘らず	*2 entlang	に沿うて
infolge	によつて	unweit	近くに		

【註】 I) \*1 は又三格を支配することもある。\*2 はまた四格をも支配する。

II) 二格支配の前置詞は、多くは他の詞類、例へば名詞・動詞より來れるものであつて、上掲のもの外にもまだ若干はある。一名詞から來たものは、例へば Kraft (力) から來た kraft (よりて)、動詞から來たものは、例へば wahren (つゞく) から來た während の類である。

5. 以下簡短に、各前置詞の用途を例示して見よう。

i) (an)statt (= an Stelle = instead of = 代りに)。

Anstatt (od. Statt) des Vaters kommt (comes) die Mutter. (父の代りに、母が來る。)

【註】 anstatt は an (前置詞; 後に出づ) と Statt (= Stelle, 場所) との結合せるものであるから、今でもなほこれを分けて用ゐることもある: An des Königs Statt ist der Prinz zugegen.

(王の代理に、王子が列席してゐる)。

- ii) *außerhalb* (=outside of=外部に)、*innerhalb* (=inside of 内部に)、*oberhalb* (above, beyond=上部に)、*unterhalb* (=below 下部に)。

*Worms liegt oberhalb, Bingen unterhalb der Festung Mainz.* (ヴォルムスは、マインツ要塞の上(カミ)に、ビンゲンは下(シモ)にある; *liegen*=横はる)。

- iii) *diesseit* (=this side of=此側に); *jenseit* (=that side of =あの側に)。

*Diesseit des Flusses liegt die Kirche, jenseits die Schule.* (川の此側には教會が——あの側には學校がある)。

【註】 \**diesseits*, *jenseits* 等々に終るものは副詞である。

- iv) *infolge* (in consequence with, owing to=によりて)——  
*infolge seiner Nachlässigkeit* 彼の怠慢のために; *infolge Ihres Anerbietens* 貴君の申込によりて。

【註】 これは主として、「或原因よりの結果として」の義を有する字で、後に出る *zufolge* とは意味が別である (*Folge* [結果]=結果)。

- v) *halb(en)*, *halber* (=wegen=on account of=ために)。

*halber* は主として名詞と共に、*halb(en)* は主として代名詞と共に用ゐられる。そして *halb(en)* が代名詞と共に用ゐられる時は、結びついて一字になる習慣である: (a) *halber — meiner Ehre halber* (私の名譽のために); *des Beispiels halber* (例のために) —— (b) *halb(en) — meinethalben* (=on account of me=私のために)、*seinethalben* (=on account of him=彼のために)。

【註】 I) *halber* は代名詞とは結びつかないが、無冠詞の名詞と結びついて副詞となることがある: *Krankheitshalber* 病氣のために:

*Krankheit*=病氣); 但し *halb(en)* は名詞と共に用ひられることもある: *der Ruhe halber* (静肅のために)。

II) *meinethalben* だけは注意を有する。これは「私の爲」の義の外に、「御随意に、御勝手に」「自分は構はぬが」又は「私に云はせると」の義がある。普通の字引にはないのが多いから、特に記述して置くがよろしい; *meinetwegen* も同様である; *Meinethalben* (od. *Meinetwegen*) *kannst (can) du ausgehen.* (君が外出しても私は關はない、出かけるなら出かけ給へ)。

III) *halb(en)* の語尾 *-en* をとつた形なる *halb* は、*deshalb* (夫故に)、*weshalb* (何故に) の形であらはれて來るが、*meinethalben* の代りに、*meinethalb* と云ふ事もある。

- vi) *mittels*, *mittelfst*; *vermittels*, *vermittelfst* (by means of, through the instrumentality=によりて; 或方法に依ることを示す)。

*Der Dieb öffnete (opened) den Kassenschrank mittels eines Brechebels.* (盗人は金挺で金庫をあけた)。

- vii) *kraft* (by the power of, in virtue of=によりて); *laut* (according to, by the wording of=によりて) —— 前者は、或強制力——特に道徳的の力によることをあらはし、後者は、口頭又は文書の述ぶるところに據ることを示すのである。

*kraft des Amtes* 役目の力で、役目によつて;

*kraft des Vertrags* 條約によつて;

*laut seines Briefes* 彼の手紙によれば。

- viii) *um.....willen* (for the sake of, on account of=の爲に) 此場合、二格は *um* と *willen* との中間に來る; *um des Friedens willen* (平和のため)。

- ix) *ungeachtet* (=notwithstanding, in spite of, without re-

garding=にも拘らず)。此詞は關係する二格の前又は後に置かれる:

ungeachtet des Regens (雨が降るにも拘らず)

des Befehls ungeachtet (命令にも拘らず)。

x) unweit, unfern (=not far from, near=近くに)。

Unweit (od. Unfern) der Stadt steht das Schloß. (市の近くに城がある。)

【註】 狂逸の文章法では、定動詞が主語のすぐ次に來るものを、正置法といひ、定動詞が主語に先立つ形を、倒置法といふ。その他に貶置法と稱するものがあるが、これは後に述べる。上掲の文例に於ては、steht なる定動詞が、das Schloß と云ふ主語に先行してゐるから、これ即ち倒置法である。一般に主語・定動詞以外のものが文頭に來ると、定動詞は第二位、主語は第三位を占める。こゝでは unweit der Stadt と云ふ場所を示す副詞的のものが先行してゐるから、steht は第二位、das Schloß が第三位に來たのである。

xi) vermöge (by virtue of, in conformity with, by the power of=によりて)。——自然の性質能力によることを示す前置詞であつて、Vermögen (能力) と云ふ名詞から來たものである。

Vermöge des Verstandes kann (can) ich begreifen.

(知力によつて私は理解することが出来る。)

【註】 これは前掲の kraft と同じやうに使用されることがあるが、kraft は主として道徳上の理由をあらはすに對して、vermöge は自然的の原因を示すのが主である。

xii) wegen (on account of, for the sake, purpose of=爲す)

——これは二格の前又は後に置かる。

Wir tun (do) es wegen seines Bruders.

(われわれはそれを彼の兄弟のためにする。)

Sie reist ihrer Gesundheit wegen.

(彼女はその健康のために旅行する。)

【註】 wegen には又 von.....wegen の形に於て、二格を間に挿む事がある: von Rechts wegen (法律上); von Polizei wegen (警察の命により); von Amts wegen (役目の上で)。—又 meiner wegen 等については、halben の項で述べた。

xiii) während (during the time of=間)

Während des Krieges schweigen die Gesetze.

(戦争中は法律は沈黙する〔無効である〕。)

【註】 während は往々にして三格を支配する: während fünf Jahren (五年の間)。

xiv) längs, entlang (along, length of=沿うて)。

a) längs は二格又は三格を支配する:

Längs des Flusses (od. Längs dem Flusse) sind Wiesen.

(流に沿うて牧場がある。)

b) entlang は前行するときは二格を探り、後置さるとき

は、四格を取る: Entlang des Flusses (od. Den Fluß

entlang) geht er spazieren (川に沿うて彼は散歩する。)

【註】 spazieren gehen の如きは、動詞が二つ集まつて、一つの意味をあらはす。此時は人稱・數・時等の變化に應ずるものは、gehen の方である。

xv) zufolge (in consequence of, in pursuance of, in accordance with=に従ひて; infolge と同じく名詞 Folge より

來れるもの)。——これは前行するときは二格、後置さる

るときは三格を支配する。

Ich arbeite zufolge seines Wunsches.

(私は彼の希望によつて仕事する。)

Seinem Willen zufolge tue ich es.

(彼の意志に従つて私はそれをする。)

xvi) trotz (=in spite of, in defiance of, notwithstanding=拘

らず) 此前置詞は時に三格をも支配する。

trotz seines Wunsches (彼れの希望に拘らず)。

trotz seinem Wunsche (同)。

trotz meines Verbotes (私の禁止にも拘らず)。

trotz meinem Verbote (同)。

【註】 此外二格を支配するものは、angefichts (in view of=面前で)、namens (in the name of, 名義で、代理で)、seitens (on the part of=取りては)、hinsichtlich (=with respect to=關して) などである。【例】 seitens des Vaters (父に取りては)、hinsichtlich seines Fleißes (彼の勉強に關しては)。

## 第 二 節

### 三 格 を 支 配 す る 前 置 詞

6. 三格を支配する前置詞は、下に掲げるものである。

aus (から)	nach (後に、へ、従つて)
außer (外に、除いて)	nächst (次に)
bei (附近に、許に)	nebst (共に)
*binnen (以内に)	*ob (ために)
entgegen (向つて、背いて)	samt (共に、一緒に)
gemäß (に従ひて)	seit (以來)

gegenüber (對して) von (から、依つて)

mit (共に、以て) zu (へ; に; まで)

【註】 \* は時に二格を支配することもある。

7. 上掲の前置詞中、冠詞と結びついて、一つに約められるものがある。

bei dem=beim von dem=vom zu dem=zum  
zu der=zur

かゝる短かき形は、熟語・成句・格言等、定まつた云ひあらはしに使用されるものであるが、冠詞そのものに力をこめて——云ひ換ゆれば、冠詞の指示的意味を強めて——云ふときには、使用してはならぬ。熟語・成句的のものは、例へば zur Not (辛うじて、假りに)、zum Beispiel (for example=例へば)、vom Blatt spielen (準備なしに演奏する)の類であるが、これは zu der Not, zu dem Beispiel, von dem Blatt spielen とは云はない。又 zur Zeit と云ふときは、「目下」の意味であるが、zu der Zeit と云へば、「其時に」の義となつて、der に指定的の意味が加はり、従つて zur Zeit とは別義となるから注意を要する。

【註】 但し zum, zur は zu dem, zu der の約まりである計りでなく、zu einem, zu einer の約まりである場合がある。例へば zum Bürgermeister wählen (市長に選ぶ)に於ける zum は、zu einem の義である。

8. 以下に各前置詞の意味を略述する。

i) aus (out of, from, of=より、から、の中から、で成れる)

Aus der Wolke zuckt der Strahl.  
(雲の中から電が閃めく。)[運動・事件の出所]

Er ist aus der Schweiz (gebürtig).  
(彼は瑞西生れである。)[生國]

Dieser Vers ist aus Schiller.

(此詩句はシルレルのものです。)[系統・由來]

eine Kette aus Gold (金の鎖)。[材料]

Er handelt so aus Geiz.

(彼は吝嗇心からさう振舞ふ。)[動機]

ii) außer (out of, outside of, beyond, except=の外に、の外  
部に、を除きては)。

Wir essen (eat) heute (to-day) außer dem Hause.

(われらは今日はよそで食事する。)[外部]

Wir sind noch nicht (not yet) außer Gefahr.

(われわれは未だ危険を脱してゐない。)[同]

Außer den Möbeln hat er nichts (nothing).

(家具以外には彼は何んにも持たぬ。)[以外]

iii) bei (near, at, at the house of, with, by=の近くに、の時  
際)に、の許に、と一緒に、よりに)。

Bei dem Hause steht ein Baum.

(家の近くに木がある。)[附近]

die Schlacht bei Leipzig (萊府[附近]の戦)。**[同]**

Bei(m) Sonnenaußgang erblicken die Sterne.

(日の出の時には星辰の色が變せる。)[際・時]

beim Essen (食事の折)。**[同]**

Er wohnt (dwells) bei seiner Tante.

(彼は叔母のもとに住んでゐる。)[もとに]

Er ist nicht bei Geld (money).

(彼は金を持つてゐない。)[所有]

bei Kräften sein (強健である; Kraft[力] (力))。**[同]**

bei diesem Stand der Dinge (things)

(かう云ふ事態のために)。**[原因]**

[次に all を採るとき = trotz)

bei allem Fleiß (いくら勉強しても)。**[認容]**

bei aller Anstrengung (いくら努力しても)。**[同]**

Erfasse (erfassen=seize; erfasse はその命令法) die  
Gelegenheit beim Schöpfe!

(機会をその頂上で捕へよ!; 機会の頭の髪をつかまへ  
て逃すな。)[握りどころ]

\*einen bei den Haaren (Ohren) ziehen

(或人の髪(耳)をとつてひつばる)。**[同]**

**[註]** I) 或語法を、不定の式にて云ひあらはすとき、物には etwas  
(something), 人には二格に eines, 三格に einem, 四格に einen  
を使用する。上例で云へば、einen のところには、人の四格を  
使用すべきことを示してゐる。

II) bei は其他 (a) 命令禁止に伴ふ語をあらはし、又は (b) 誓  
ひの際に證人又は立合人となるものを示すことがある—(a) Es  
ist bei Strafe verboten. その禁を犯すものは罰せられる。—  
(b) Ich schwöre bei Gott. (神にかけて私は誓ふ); Bei meiner  
Ehre! (私の名譽にかけて)。その他にも bei の意味はあるが、  
詳細は字引にゆづることとする。

iv) entgegen (towards, against=向つて、背いて)、gegenüber  
(opposite to, face to face = 向つて、對して、面前で)。  
前者は關係する詞の後、或は時に前に置かれる。

entgegen unserm Abkommen (od. unserm Abkommen  
entgegen) (われわれの協約に背いて)。

entgegen der Verabredung (od. der Verabredung entgegen)  
(協定に背いて)。

後者も關係する詞の後、又は前に置かれる:

Ich wohne gegenüber der Schule (od. der Schule ge-  
genüber). (私は學校の向側に住んでゐる。)

die  
der  
oder  
die

Gegenüber dem Richter (od. dem R. gegenüber) wird er es nicht behaupten. (裁判官に向つては、彼はそれを主張しないであらう。)

【註】 gegenüber が、代名詞を支配するときは、後置せられる: Ihm (him) gegenüber wird sie es behaupten. (彼に向つては彼女はそれを主張するであらう。— gegenüber には、其他の意味もあれど略す。

II) entgegen については、なほ動詞の章のうち、複合動詞のところ述べる。

v) mit (=with, in connection with=以つて、携へて、關しては、一緒に)

Der Lehrer geht mit seinen Schülern spazieren.

(先生は生徒たちと散歩する。)[同伴]

Er geht mit einem Stock spazieren.

(彼はステッキを携へて散歩する。)[携帯]

Der Bauer fällt den Baum mit der Art.

(農夫は斧で木をたほした。)[手段・道具]

ein Wagen mit sechs Pferden

(六頭だての馬車。)[具備]

etwas mit Geduld (od. mit Freuden) tun

(或事を忍耐して(喜んで)なす。)[方法]

Mit Tagesanbruch wird er abreisen.

(夜明けと同時に彼は出立するであらう。)[同時]

Mit dem Menschen ist es nicht anders (otherwise).

(人間に關しては、それは同様である、別ではない。)[關係]

Wie (how) geht es mit seiner Krankheit?

(彼の病氣はどうであるか?) [同]

vi) nach (=to, according to, after=へ、まで、従つて、ならつて、後に)

Mein Vater wird nach Tokyo gehen.

(私の父は東京へ行くであらう。)[或場所への運動]

eine Reise nach Amerika

(アメリカへの旅行。)[同]

zehn Minuten nach zehn (Uhr)

(十時十分過。)[時間及空間上の「後」]

Dieses Wort muß (must) nach dem Verb stehen.

(此詞は動詞の後に置かれなければならぬ。)[同]

Nach seiner Meinung (od. Seiner Meinung nach) ist das

Wasser dieser Stadt jetzt ganz gesund.

(彼の意見によれば此町の水は今全く健全だ。)[據り處・憑據・標準]

Ordnen Sie diese Wörter nach dem Alphabet! [同]

(此等の詞をアルファベット順に排列せよ!) [同]

einen nur nach dem Namen (od. dem Namen nach) kennen

(或人の名だけを知つて居る。)[同]

Nach seinem Alter (od. Seinem Alter nach) ist er ziemlich

groß. (彼の年齢から見ると、彼は可なり大きい。)[同]

【註】 I) 第三の意味では、上掲のやうに、nach は關係する名詞の前、又は後に置かれる。

II) 或動詞は、必らず或前置詞の隨伴を要する。今 nach について云へば、streben (努力する) は、努力の向ふ對象を示すために nach etwas を要する: Er strebt nach Reichthum und Ehre. (彼は富と名譽とな得んと努力する)。此方面に就いては、補足語の章で述べることとする。

vii) nächst (=next to, next after=すぐ側に、次に)

Nächst dem Kaiser saß (sat) der Kronprinz.

(皇帝のすぐ側に皇太子が座つてゐた)。

【註】 かかる場所的の意味では、zunächst も使用される：zunächst dem Kaiser (皇帝の次に)；又 zunächst は關係する詞の前にも後にも使用される。

Nächst dem Onkel dankt er dem Bruder seine Befreiung.

(彼は彼の解放を伯父の次に兄弟に負ふ；彼の解放は第一に伯父、第二に兄弟のおかげである)。

【註】 zunächst にはこの義なし。—又 nächst をネクストと讀むのは間違で、ネーヒストと讀まなければならぬ；zunächst も同様。

viii) nebst, samt (=together with=共に、一緒に)。—共に二

個の事物を結びつけるに使用するものであるが、nebst は und の意味で、結合さるべき兩個體の間の關係が、自然的ならぬ時に使用せられ、samt は mit の意味で、結合さるべき兩個體の間の關係が自然的なるときに使はれる。

Der Knabe hat eine Handtasche nebst einem Regenschirm.  
(男の子は手提カバンと雨傘とを持つてゐる)。

Das Schiff sank der Ladung versamt (sank down).

(船は荷物もろともに沈没した)。

【註】 nebst 又は samt に先行する名詞が單數なるときは、定動詞は、從來複數にした例もあるが、今は單數が普通である。〔上例参照〕

ix) seit (=since=以來) seit einem Jahre (一年以來)、seit

seiner Krankheit (彼の病氣以來)。

x) von (from of, by=から、の、によりて)

Der Rauch kommt von der Küche.

(煙は臺所から來る。)〔運動・行爲・時の發點・原動者〕  
von Anfang bis zu Ende

(初めから終りまで)〔同〕

Ich erhielt (got, received) dieses Geschenk von meinem Onkel. (私はこの贈物を私の伯父からもらった)〔同〕

Ich schüttelte (shook) den Staub von meinen Füßen.

(私は私の足から塵を拂つた)〔同〕

Der Tisch ist von Holz (机は木製だ)〔材料又は性質〕  
eine Kette von Gold (金の鎖)〔同〕

ein Mann von Charakter (主義・節操を有する人)。  
〔同〕

der König von Preußen (プロシヤ王)〔二格の代り〕

die Umgebung von Paris (パリの周圍)〔同〕

die Herstellung von Schindeln (こけら板の製作)〔同〕

Blätter von Blumen (花瓣)〔同〕

zehn von den Soldaten (兵士の中の十名)〔部分〕

ein Teil von dem Silber (その銀塊の一部分)〔同〕

von einer Sache od. von einer Person reden, sprechen,  
denken, meinen (或事又は或人について述べる・話す・  
考へる・思ふ)〔對象・題目〕

Ich weiß (know) von dieser Sache nichts.

(私は上の事についてはなんにも知らない)〔同〕

Er ist müde von der Arbeit.

(彼は仕事でつかれてゐる)〔原因〕

Seine Eiche fällt von einem Schlag.

(どんな槌でも一撃ではたはれぬ)〔同〕

Er ist klein von Gestalt. (彼は前が小さい)〔觀察點・

制限；「に關しては」「から見ると」]



Dieser Apfel ist angenehm von Geschmack.

(此林檎の味はよい。) [同]

【註】 1) aus と von とは共に、から (from) と譯すれど、aus は或ものの「内部」からを意味し、von は或ものの「外面」又は「方向」からの意味を有することが相違である: Die Flüsse kommen von den Bergen. (流れは山々から来る [方向]); Die Quellen kommen oft aus den Bergen. (泉は屢山中から来る [内部]) 一故に von は事物の淵源又は起點を示すので、aus よりは漠然としてゐる。

11) 部分をあらはす von から来て、其まゝ動詞と共に用ゐらるゝ形、即ち Er trinkt (drinks) von dem Weine (彼はその酒を飲む); von den Früchten essen (eat) (其果實を食ふ) の如き語法は、其對象物の全部でなく、或部分を飲み、又は食ふことを示してゐる。

xi) zu (=at, to, in addition to, for the purpose of=へ、加へて、ために)

Das Krankenhaus zu Kumamoto

(熊本の病院) [所在\*1 地點]

Die Universität zu Wien (維納大學) [同]

Der König wohnte gewöhnlich zu Berlin.

(國王は通常柏林に住んだ。) [同]

Ich gehe nach Sendai zu meinem Vater.

(私は仙臺の彼の父のところへ行く。) [人へ\*2 の運動]

Die Kinder laufen zu der Mutter.

(子供等は母のところへ走つて行く。) [同]

Asop lebte (lived) zur Zeit Solons. [時點]

(エソップはソロンの時に生きてゐた。)

zu Anfang (od. zu Ende) des Jahres

(年の初め [終り] に)。[同]

zu Mittag, zu Abend speisen (od. essen)

(晝飯・夕飯を食ふ)。[同]

Ich brauche (use) das Messer (knife) zum Schneiden.

(私は切るためにナイフを用ゐる)。[目的・到達せる又は豫期せる結果]。

Der Schmied formt das Glüh Eisen zu einem Gußeisen.

(鍛冶は灼熱せる鐵を鑄鐵にする; formen 形づくる;

Guj [W.] 鑄)。[同]

Du bist Erde und sollst wieder zu Erde werden.

(汝は土なり、そしてまた土にならねばならぬのである; sollen 何々すべきである、せねばならぬ) [同]

【註】 \*I) かける zu は in と同じ。公共的建設物の所在地には、zu の用ゐらるゝことが多い。時の口調によつて、いづれかを選ぶこともある。

\*II) 固定的な語法では、處やものに對しても、zu を使用するのがある: zur Schule gehen (學校へ [稽古に] 行く); zum Brunnen gehen (井戸へ [水くみに] 行く); zu Bette gehen (床につく)、zu Tisch gehen (食卓につく) など。

III) 旅行の方法・手段を示す名詞の前につけられる zu は、熟語と見てよるしい: zu Pferd, zu Wagen, zu Schiffe, zu Fuß reisen (馬で、馬車で、舟で、徒歩で旅行する)。—又 zu Lande reisen (陸路で旅行する)、zu Wasser reisen (水路で旅行する) なども熟語である。—一般に zu を持てる熟語は、少くない。

xii) binnen (with n inside of=以内に、内部に)。

これはまた二格をも支配する。

Binnen einem Monate (od. eines Monats) ist er hier,

(一ヶ月以内に彼はこゝに来る)。

【註】 I) これを場所的の意味に使つて、Mein Onkel wohnt binnen der Stadt. (私の伯父は市内に住む) などとするのは、舊い。

II) binnen が時間的に用ゐられる場合には、「間」の意味の時もある： binnen jetzt und einem Jahre (今日から一年の間に)。

xiii) gemäß (=in conformity with, agreeably to=に應じて、に従つて)。—これは前後いづれにも置かれる。

Gemäß Ihrem Auftrag (od. Ihrem Auftrag gemäß)  
(貴君の依頼に従つて)。

【註】 前行するときには、二格を支配する例もある： gemäß Ihres Auftrags.

xiv) ob (=over, above, on account of=の上に、のために)。

ob dem Wald (森の上に)。

ob seinem Haupt (彼の頭上に)。

ob meinem Unglück (od. ob meines Unglücks).

(私の不幸のために)。

【註】 I) Während の義もある： ob den Unterhandlungen (談判中に)。

II) 三格を支配する前置詞には、上掲のほか、zuliebe (のために)、zuwider (に反して) などがある。此二者は後置される： einem zuliebe etwas tun (或人の爲め〔或人をよるこぼすために〕或事をする)； dem Befehl zuwider (命令に背いて)。—しかし、ob は一般に今ではあまり使用されない。

### 第三節

#### 四格を支配する前置詞

9. 四格を支配する前置詞は、下にかゝげるものである。

bis (迄) ohne (なしに)

durch (よりに、通して) fonder (なしに)

für (爲に、代りに) um (廻りに、就て)

gegen (向つて、(反)對して) wider (反對して)

【註】 durchs = durch das fürs = für das ums = um das

10. これらの前置詞の使用例をあぐる前に、例の通り文章解釋の必要上、動詞の現在完了形の作り方を説く事にする。—現在完了の意味は、動詞の章で説明するが、大體に於て、或行爲又は状態が完結せる事を示すものであつて、これは動詞の過去分詞と助動詞 haben 又は sein の現在變化とによつて作られる、「haben 又は sein」と云つたわけは、或動詞は其現在完了形をつくるに當つて、haben と結合し、他の動詞は sein と結合するからである。しかし haben と結合する方が、sein と結合するものよりも、數に於て遙かに多い。いかなるものが前者に屬し、いかなるものが前者に屬するかについては、別に説くが、其變化の形をかゝげると：

a) haben と結合するもの、

schlagen (打つ；過去分詞 geschlagen)

b) sein と結合するもの、

reisen (旅行する；過去分詞 gereist)

ich habe.	} geschlagen	ich bin	} gereist
du hast		du bist	
er hat		er ist	
wir haben		wir sind	
ihr habt		ihr seid	
sie haben		sie sind	
(打つた)		(旅した)	

【註】四格の補足語を探るものを、他動詞と云ふ。他動詞はすべて haben と結合する。

11. 上記の前置詞について、その用法を述べると：

i) bis (till, until, as far as, to=まで) — 此前置詞の用法に就て注意すべき事は、bis が定冠詞・物主代名詞と直接に連結することなく、いつも其間に他の前置詞を取ることである。そして此際格の支配をなすものは、第二に置かれた前置詞である：

- 【例】 bis zur Verzweiflung (絶望に至るまで) [有冠詞]  
 bis an den Kopf (頭まで) [同]  
 bis an seinen Kopf (彼の頭まで) [物主代名詞]  
 bis London (ロンドンまで) [無冠詞]  
 von Ostern bis Pfingsten  
 (復活祭より踏込節まで) [同]

但し bis auf [四] には兩義がある；(1) 「に到るまで」：

bis auf den Grund abgebrannt sein  
 (土臺まで焼けつくしてゐる)

(2) 「を除いては」：

Alle sind anwesend bis auf deinen Bruder.  
 (君の兄弟の外はすべて出席してゐる。)

【註】 bis はまた副詞と結合する； bis dorthin (そつちへ)、 bis jetzt

(今まで)、 bis kürzlich 先日まで。

ii) durch (=through, by means of, by=通して、よりに)

Durch die Mauer dringt die Kugel.

(彈丸が壁を貫いて行く。) [貫通]

Er ist durch fast ganz Europa gereist.

(彼はほとんど全歐にあたつて旅行した。) [遍滿]

Durch Geld ist er zu seinem Amt gekommen.

(gekommen は kommen の過去分詞) (彼は金によつて

彼の役目にありついた。) [手段・原因]

【註】 時間に関しても「或期間を通して」の義を持つ。但し此際は後置されることもある： durch den Winter (od. den Winter durch) (冬ちう)；然し此際は hindurch として後置する方が普通である： den Winter hindurch.

iii) für (=for, instead of, in favour of=向つて、對して、代りに、爲めに)

Die Eltern arbeiten für die Kinder.

(両親は子供たちのために働く。) [好意の方向・庇護]

eine Arznei für den Magen (胃の[ための]藥)。[用途・目的]

Vorrat für ein Jahr (一年間に對する貯蓄)。[同]

Ich will für dich diese Arbeit tun.

(私は君の代りに此仕事をしやうと思ふ。) [代理]

Ich werde für dieses Geld Kirchen kaufen.

(私は此金で櫻實を買ふであらう。) [代償・交換]

Ich habe es für mein Leben gern (gladly). (私はそれが大好きだ。[それを生命にかへても持ちたい]) [同]

Er ist groß für sein Alter.

(彼の年齢に比べると彼は大きい。) [比較]

**Ich für meine Person** (私自身にとつては)。〔制限〕

**Er lebt nur für sich** (himself).

(彼は世間とかけはなれて一人で生活する)。〔同〕

**Ich halte ihn (him) für einen Ehrenmann.**

(私は彼を〔ihn〕名望家だと考へる。)[同一・一致=als (as)]

**Ich erkläre ihn für einen Betrüger.**

(私は彼を〔ihn〕詐欺師だと公言する)。〔同〕

**Schritt für Schritt** (一歩一歩に)。〔並列・連続〕

**Tag für Tag** (毎日)。〔同〕

**Wort für Wort** (一語一語に)。〔同〕

iv) **gegen** (toward, against=の方へ、に向つて、に反對して)。

**Mein Haus liegt gegen Morgen.**<sup>\*1</sup>

(私の家は東に向いてゐる。)[方向]

**Wir segelten gegen Norden.**

(われらは北方に向つて帆走した。)[同]

**Er schwimmt (swims) gegen den Strom.**

(彼は流れに逆つて泳ぐ。)[反對]

**Ich bin gegen den Krieg.**

(私は戦争には反對である。)[同]

**ein Heilmittel gegen<sup>\*2</sup> Zahnschmerzen** (齒痛治藥)。〔同〕

**Er ist wohlwollend gegen meinen Bruder.**

(彼は私の兄弟に對して好意的である。)[好意的方向]

**etwas gegen eine Person erwähnen**

(或人に對して或事を述べる。)[「對して」gegenüber]

**gegen etwas gleichgültig sein**

(或事に對して冷淡である。)[同]

**Geld gegen einen Schuldschein leihen**

(借金證書と引換へに金を貸す)。〔交換〕

**gegen Bürgschaft** (擔保と引換へに)。〔同〕

**Reichtum ist nichts (nothing) gegen Gesundheit.**

(富は健康に比べると何等の價値もない。)[比較]

**Was ist er gegen meinen Bruder?**

(私の兄弟と比べるとあいつは何だ?) [同]

**gegen elf Uhr** (十一時頃)。〔大約〕

**gegen hundert Schüler** (約百人の生徒)。〔同〕

**gegen Morgen** (明方)。〔同〕

【註】 I) 東西南北を朝晝夕夜に配當するときは、Osten (東)=Morgen (朝)、Westen (西)=Abend (夕)、Süden (南)=Mittag (晝)、Norden=Mitternacht (夜なか)となる。

II) 對立的意味に於ては、für は好意的であり、gegen は反對的である。従つて für は賛成・擁護を意味し、gegen は反對攻撃を意味する。例へば ein Krieg gegen den Wahm und für die Vernunft. (妄想に反對し、理性のためにする戦)。「藥」を意味する言葉 Arznei [F.] (藥)、Heilmittel [M.] (治療藥)、Mittel [M.] (藥) の後につく前置詞は、病氣を征服する義なるときには gegen を用ゐ、病者又は其身體の或部分を擁護する意味か、又はその藥の用途をあらはすときには für を使用する。例へば eine Arznei gegen das Fieber (熱を治療する藥)、ein Mittel für den Magen (胃の〔ための〕藥)、ein Heilmittel für Fieberfranke (熱病患者の用〔ある〕藥) の如きものである。

III) gegen を略したるものに gen がある。これは方向と場所とに關してのみ使用される: gen Osten (東方へ); gen Rom (ローマへ)。

v) ohne (=without=なしに) 前置詞の mit の反對である。

Ohne Arbeit keine Ruhe, ohne Kampf kein Sieg.  
 (労働なくんば安息なく、戦なくんば勝利なし。)  
 Ich bin ohne Geld. (僕は金がない。)

【註】 I) nicht ohne は、理窟上は mit と同じ答なれど、必ずしもさうではなく、語氣を和げるに使はれることが多い: Es war nicht ohne Mühe. (=trouble) (骨が折れないわけでもなかつた); Sie ist nicht ohne (Schönheit). (あの女は美しくないわけでもない、満更わるい女でもない)。

II) ohne は außer (を除きては) の意味に使用する事がある。Es sind (There are) fünfzehn Personen ohne die Kinder. (子供を数に入れないで十五人居る)。然し此用法は古い。

vi) sonder (=ohne) 今は詩的の文章に使用される丈けである; samt の反対。又 sonder は、其次に冠詞を取らない習はしである; sonder Zweifel (疑もなく)、sonder Raft und Ruhe (休息なく)。

vii) um (=around, about=周りに、について)。

Die Gäste sitzen um den Tisch.  
 (客たちは机の周りに座つてゐる)。〔周圍〕  
 Gehen Sie um die Ecke!  
 (角を廻つて行き玉へ!) 〔旋廻〕  
 Er tut (does) es um Geld.  
 (彼は金をもらつてそれをする。) 〔代價・代償〕  
 um jeden Preis (いかなる代價を拂つても、是非共)。  
 〔同〕  
 Auge um Auge (目を以て目にむくゆる)。〔同〕  
 um Mittag (正午頃)。〔大約の時\*1〕  
 um diese Zeit (此頃)。〔同〕

um sechs Uhr (正六時に) 〔正確なる時計の時刻\*1〕  
 Es ist um zehn Jahre älter als ich  
 (彼は私より十歳丈け上だ) 〔程度〕  
 um 100 Mark (百マルク丈) 〔同〕  
 Tag um Tag (毎日)。〔交代・循環〕  
 einen Tag um den andern = (every other day = 一日おきに、隔日に)。〔同〕  
 Es ist schade um ihn. (彼はおしいものだ) 〔事實上の主語を示す=in betreff=「に關して」〕。  
 Wie steht es um die Sache? (事柄はどう云ふ風か?) 〔同〕

【註】 I) 時計の時間が、數詞中の原數(一二三四等)を以て云ひあらはされるときは、um は必ず正確なる時刻を示すもので、序數で示されたときは別である: um sechs (six) Uhr (正六時に); um sechste (sixth) Uhr (六時頃); um sechs Uhr の次に herum を入れるときは、大體を示すことゝなつて、gegen sechs Uhr と同一になることを忘れてはならぬ: um sechs Uhr herum (六時頃) — 此關係をとりちがへて、um sechs Uhr をも「六時頃」と説明してゐる本があるから、特に斷はつて置く。

viii) wider (=against=逆つて、反して)。

Er schwimmt wider (=gegen) den Strom.  
 (彼は流れに逆つて泳ぐ)。〔反對〕  
 Es geschah (happened; geschehen の過去) wider meine Erwartung (それは私の豫期に反して起つた)。〔同〕

【註】 wider (against) と wider (again) とを混同してはならぬ。前者は前置詞で、後者は副詞であるし、意味も別であるから。

### 第 四 節

#### 三格と四格とを支配する前置詞

12. 次に掲ぐる九個の前置詞は、「どこに?」(wo?) と云ふ問に對するとき三格を支配し、「どこへ?」(wohin?) と云ふ問に對するとき四格を支配する。

【註】 故に前者は『靜止』をあらはすとき、後者は『運動』をあらはすときと、概言されてゐる。

an	(に於て、に沿うて)	neben	(の傍に)
auf	(の上に)	über	(の上に、越えて)
hinter	(のうしろに)	unter	(下に、もとに)
in	(の中に)	vor	(前に、爲に)
zwischen	(間に)		

【註】 am = an dem; ans = an das; aufs = auf das; hinterm = hinter dem; im = in dem; ins = in das; überm = über dem; vorm = vor dem

他はこれから類推してわかる。

13. 三格・四格の使ひわけを例示すると:

an	Er steht am Fenster. (彼は窓邊に立つてゐる。)
	(〔三格〕; Wo? の問に對す)
an	Er geht ans Fenster. (彼は窓邊へ歩いて行く。)
	(〔四格〕; Wohin? の問に對す)
in	Er ist in dem Garten. (彼は庭の中に居る。)
	(〔三格〕; Wo? に對す)
in	Er geht in den Garten. (彼は庭へ歩いて行く。)
	(〔四格〕; Wohin? に對す)

über { Der Himmel ist über der Erde. (天は地の上にある。)  
 (〔三格〕; Wo? に對す)  
 Der Hund springt (springs) über den Zaun. (犬は垣を越えて飛ぶ。)(〔四格〕; Wohin? に對す)

他の前置詞も此例に倣つて考へれば、わかるが、たゞ同一範圍内の運動をあらはすときには、前置詞は四格を支配しない事を記憶しておかねばならぬ。これは本來 Wohin? の問に對するのではなくて、Wo? の問に對するものだからである。

Die Fische schwimmen im Wasser. [同一範圍内] (三格)  
(魚が水中で泳ぐ)。

Der Hut fällt ins Wasser. [別範圍へ] (四格)  
(帽子が水中に落ちる)。

【註】 同じ動詞でも、其文章の意味が、Wo? に對するものであるか; Wohin? に對するものであるかによつて、前置詞の支配する格の異なるのは、勿論の事ではあるが、注意を要する: 例へば、Er schreibt in dem Buch. (彼は本の中にかく。)と云ふときは、『彼はどこに (Wo) 書くか?』と云ふ問に對するものであつて、Er schreibt etwas in das Buch. (彼は或事を本の中にかく)と云ふ時は、『彼はどこへ (Wohin) 書くか?』と云ふ問に對するものである。同様に、Der Knecht brachte (brought) das Getreide auf dem Wagen. (下男は穀物を車にのせて持つて來た。)は『何にのせて (Wo?)』の問に對するもので、Der Knecht brachte das Getreide auf den Wagen. (下男は穀物を車にのせた。)は『何へのせる (Wohin?)』の問に對するものである。

14. 以上は空間的關係を示す場合であるが、時間的關係の場合には、『何時?』(Wann?) の問に對するときは、前置詞が三格を支配し、『何時まで?』(bis wann? wie (how) lange (long)?)

の間に對するときは、四格を支配するのが原則である：〔三格〕  
am Sonntag (日曜日に)、im Frühling (春に)；vor zwei Tagen  
(二日前に)；〔四格〕auf fünf Tag (〔將來〕五日間)；über Nacht  
(夜ちう)。

方法又は原因をあらはすときには、auf と über とは四格を  
支配し、他は三格を採る：auf diese Weise (此方法で)；in dieser  
Weise (此方法で)。

15. 次に個々の前置詞について、例をあげやう。

i) an (at, by, to, on=に、よつて、へ、上に)

(A) 三格支配。

Frankfurt liegt am Main.

(フランクフルトはマイン河畔にあり。)〔近接；Wo?  
(どこ?)に對す〕。

Ich stehe am Fenster. (私は窓邊に立つ。)〔同〕

Mein Rock hängt an der Wand.

(私の上衣は壁にかゝつてゐる。)〔側面の接觸〕

Ich erkenne meinen Freund am Gange.

(私は歩き振りで友人を認識する。)〔認識の理由〕

Er ist an der Arbeit. (彼は仕事申である。)〔從事中〕

Er leidet an der Schwindsucht.

(彼は肺病にかゝつてゐる。)〔原因〕

an der Cholera sterben

(コレラで死する=to die of the cholera)。〔同〕

Er dient am Hof. (彼は宮廷に仕へてゐる。)〔勤務先〕

Professor an der Universität zu Tokio (東京大學教授)。

〔同〕

am Morgen (朝に)。〔時；wann?に對す〕

am Sonntag (日曜日に)。〔同〕

am Anfang (初めに)〔同〕

Mangel an Geld (金錢の缺乏=want of money)〔關  
係；『に關して』の義〕

reich an Verstand (智力に富める=rich in wit)〔同〕

schwach an Körper (身體の弱い)〔同〕

(B) 四格の場合。

Ich gehe an das Fenster. (私は窓邊へ行く)〔接近又  
は接觸；Wo hin? どこへ?の間に對す〕

Ich hänge meinen Rock an die Wand.

(私は上衣を壁にかける)〔同〕

Ich gehe an die Arbeit. (私は仕事に取りかゝる)〔思  
考又は動作の方向(比喩的)〕

einen Brief an eine Person schreiben

(或人にあつて一本の手紙をかく)〔同〕

Er glaubt an Gott. (彼は神を信ずる)〔同〕

an etwas denken (或事を考へる)〔同〕

【註】 bis an+Acc. (四格)は限界を示す；Das Wasser reicht bis an  
die Knie. (水は膝に達する)；bis an den Abend arbeiten (夕  
方まで働く)。

iii) auf (on, upon=上に)。

(A) 主格支配の場合。

Er steht auf dem Berg. (彼は山上に立つ)〔上面の接  
觸〕

auf dem Wasser fahren (水上を航す)〔同〕

Seine Ansicht beruht auf einem Irrtum. (彼の見解は或  
誤謬に基づく)〔上記のものの比喩〕

Er ist auf der Jagd. (彼は狩獵申である)〔從事〕

auf der Suche sein. (搜索中である) [同]

Er studiert auf der Universität zu Fukuoka.

(彼は福岡の大學で學ぶ)。[居所]

Er ist auf seinem Zimmer. (彼は彼の室の中にある)。

[同]

Er wohnt auf dem Lande.

(彼は田舎に住んでゐる)。[同]

【註】 居所を示す意味では、in (in) と同義なる場合が多いが、異なるときもあるから、注意を要する：

auf dem Lande (田舎に)； im Lande (國內に)； auf der Straße (街上で)； in der Straße (或街に) wohnen (住む)。但し auf dem Zimmer sein (室の中に居る) の如きは、in dem Zimmer sein と同じ意味である。

【B】 四格支配の場合。

Er legt ein Buch auf den Tisch.

(彼は一冊の本を机の上に置く) [上面・上部への運動]

Er steigt auf den Berg.

(彼は山の上へのぼる) [同]

einen Preis auf etwas (四) legen

(或事に賞を懸ける)。[上のものの比喩的用法]

Er geht auf das Land. (彼は田舎に行く)。[目標處]

auf die Schule gehen (各學校へ行く)。[同]

Auf drei Jahre werden wir dieses Haus vermieten.

(われわれは向三年間此家を借りるでせう)。

auf einen Augenblick

(一寸の間 [の豫定で]) [未來の時]

Auf den Herbst folgt (follows) der Winter.

(秋 [の次] には冬がつづく)。[連續]

Briefe auf Briefe (手紙又手紙)。[同]

Verlust auf Verlust (損又損)。[同]

Auf seinen Befehl habe ich es getan.

(彼の命令で私はそれをした) (getan は tun [do] の過去分詞) [動因]

auf ihr Anstiften (彼女の教唆によつて) [同]

【註】 四格を支配する auf が、bis と結ぶときは、兩義があることは bis のところに述べたとほりである。

iii) hinter (=behind of=の後ろに)。

【A】 三格支配。

Wer steht hinter mir (me)? (誰が私のうしろに立つてゐるか?) [背後； vor の反對]

Er hat es hinter meinem Rücken getan.

(彼はそれを私の背後で [私にかくれて] なした)。[上のものの比喩的用法]

【註】 hinter einer Person (三) her とは「或人の後について」の義である。同じやうに、vor einer Person her は「或人の前に立つて」、neben einer Person her は「或人の側について」である。又 hinter einem Dinge hervor は、或ものの後ろからの義である。かく前置詞を用ゐたる後に、更に副詞をつけることがある。

【B】 四格支配。

Ich habe die Flinte hinter die Tür gestellt. (stellen [立てる] の過去分詞)。(私は銃を戸の後ろに立てた)。  
[背後への運動]

Der Schüler geht hinter die Schule. (「生徒が學校のうしろへ行く」とは學校をなまけること)。  
[上の比喩的用法]



iv) in (=in, into, to=の中に、へ)

[A] 三格支配の場合。

Er ist im Zimmer. (彼は室内に居る)。〔或場所内〕

Er geht im Zimmer hin und her.

(彼は室をあちこちと歩き廻る)。〔同〕

In drei Tagen werde ich meine Arbeit vollenden.

(三日のうちに私は私の仕事を仕上げるでせう)〔或時間内〕

In seinem Bruder finden wir unsern Freund.

(彼れの兄弟はわれわれの友人である)。〔一致・實質〕

Sein Reichthum besteht in Grundstücken.

(彼の富は地所だ)。〔同〕

Er jagte es im Ernst. (彼はそれを眞面目に云つた)。

〔方法〕

Er hat es in Eile getan.

彼はそれをいそいで爲した)。〔同〕

Er unterrichtet meine Schwester im Violinspiel.

(彼は私の姉妹にヴァイオリンの弾奏を教へる)。〔關係; 『に關して』 (Violin の v は w の發音)。

in einer Sache überlegen sein

(或事にすぐれてゐる)。〔同〕

[B] 四格支配の場合。

Er geht in sein Zimmer. (彼は室内へ入る)。〔或場所内へ〕

Ich springe ins Wasser.

(私は水中へとび込む)。〔同〕

Bis in die Nacht arbeitet er oft.

(夜に入るまで彼は仕事をする)。〔時の繼續〕

Er teilt das Geld in vier Teile.

(彼はその金を四つの部分に分ける)。〔行爲の目的又は結果〕

Er übersetzt dieses Drama ins Deutsche.

(彼は此戯曲をドイツ語に翻譯する; das Deutsche = 獨逸語)。〔同〕

v) neben (=beside, near=の傍に、の外に)

[A] 三格支配。

Er sitzt neben meinem Bruder.

(彼は私の兄弟の傍に坐つてゐる)。〔側傍〕

Er hat keine Einkünfte neben seinem Gehalte.

(彼はその俸給の外には何等の收入もない)。〔以外〕

[B] 四格支配。

Er stellt es neben meinen Bruder.

(彼はそれを私の兄弟の側に置く)。〔側傍への運動〕

Er stellt Oßian neben Homer.

(彼はオシアンをホメールと同列に置く)。〔上の比較的用法〕

vi) über (=over, above, about=上に、越えて、親いて)

[A] 三格支配の場合。

Ein Vogel schwebt über\*<sup>1</sup> dem Dache.

(一羽の鳥が屋根の上にかけてゐる)。〔或距離を置いての上方〕

Mein Vetter sitzt über deinem Bruder in der Klasse.

(私の従兄弟は級では君の兄弟の上に居る)〔上位〕

Er wohnt über dem Flusse.

(彼は川向ふに住んでゐる)〔彼方=jenjeit〕

Er erwachte (erwachen = awake の過去) über\*<sup>2</sup> dem Lärm. [M.]. (彼は騒ぎの爲めに目をさました)。〔原因〕

Ich hörte (hören [hear] の過去) nichts über\*<sup>2</sup> dem Geschrei. (私は叫び聲のために、何も聞かなかつた)。[同]  
 Sie sprechen mit einander (each other) über der Mahlzeit. (彼等は食事中互に話し合ふ)。[時間的繼續 = während, unter]

【註】 \*1 auf は或ものの上面に觸れる折に用ゐられ、über は上面に觸れないで、上面との間に或距離があるときに使はれる: Er steht auf der Brücke über dem Flusse. (彼は川の上の橋の上に立つ)。  
 \*2 原因をあらはす über は、往々四格を支配する: Er erwachte über den Lärm.

[B] 四格支配の場合。

Ein Flugzeug fliegt über den Wald.

(飛行機が森を越えて飛ぶ)。[上を越ゆること]

Die Brücke führt über den Fluß.

(橋は流を越えて通ずる)。[同]

Er stellt Schiller über Goethe.

(彼はシラアをゲーテの上位に置く。[偉いとすること]) [上への方向]

Zufriedenheit geht über Reichtum. (満足は富にまさる)。

【優越】

Das geht über meinen Verstand.

(それは私の理解力以上である)。[同]

Ich bin über mein Schicksal erhaben.

(私は自分の運命に超越してゐる)。[超絶]

Sie breitet den Teppich über den Fußboden.

(彼女は絨氈を床の上にひろげた)。[瀟漫・被覆]

Er streut Zucker über den Kuchen.

(彼は菓子に砂糖をふりかける) [同]

Er herrscht über das Land. (彼は國土を統治する)。

【支配】

Macht über etwas (四) haben

(或ものを左右する力を持つ) [同]

Er spricht über\*<sup>1</sup> Goethes Gedichte.

(彼はゲーテの詩について談る)。[對象]

Gedanke über etwas (四)

(或事についての考へ) [同]

Er reist über Hamburg nach London.

(彼は漢堡を通つてロンドンへ旅する)。[經由]

über (=via) Sibirien (西比利亞經由) [同]

heute über einen Monat (一月後の今日)。[時間の經過後]

über ein Jahr wird er kommen.

(一年後には彼は来るだらう) [同]

über\*<sup>2</sup> Nacht (夜ちう、夜の間)。[經過中\*<sup>2</sup>=während]  
 den Sommer über (夏ちう)。

【註】 \*1 über etwas sprechen, schreiben 等は von etwas sprechen, schreiben とほとんど同じであるが、悉く云ふと、überの方は、全體に亘る意味を有し、vonの方は部分についての意味であるけれど、いつも必ずこの通りの意味で使はれて居るとは斷言されない。

\*2 此意味では、über が後置される例が多い; なほ über Nacht = die Nacht über.

\*3 四格を支配する über が、原因をあらはす事については、三格支配の場合に於て既に述べた [70 頁註 \*2]。

vii) unter (=under, below = 下に、もとに)

[A] 三格支配の場合。

Ein Kind steht unter dem Baum. (一人の子供が木の下に立つてゐる)。〔下方; über の反對〕

Er sitzt in der Klasse unter meinem Bruder.

(彼はクラスでは私の兄弟の下席に居る)。〔下位〕

Das ist unter meiner Erwartung.

(それは私の豫期以下である)。〔以下〕

Er hat unter seinem Stande geheiratet (heiraten=marriage). (彼は自分の身分以下のものと結婚した)。〔同〕

ein Kind unter zehn Jahren (十歳以下の小兒) 〔同〕

Unter dem Essen sprechen wir.

(食事中われわれは話しをする)。〔同時 = während〕

Er sitzt unter den Zuschauern.

(彼は観客の間に座つてゐる)。〔混在・介在; among, in〕

ein Zwist unter Eheleuten (夫婦間の喧嘩)。〔同〕

Es ist Wasser unter dem Wein.

(此酒のなかには水がある)。〔同〕

Was verstehen (understand) Sie unter diesem Ausdruck?

(此言葉をどう云ふ意味に解しますか) 〔方法・条件・原因等〕

unter diesen Bedingungen (これらの条件で)。〔同〕

unter falschem Namen (偽名で)。〔同〕

Er starb unter heftigen Schmerzen.

(彼はひどく苦しんで死んだ) 〔同〕

〔B〕 四格支配の場合。

Er stellt es unter den Baum.

(彼はそれを木の下におく)。〔下方への運動〕

Er wird unter die Gewalt des Feindes geraten.

(彼は敵の手中に落ちるであらう)。〔上の比喩的用法〕

Ich zähle seinen Bruder unter meine Freunde.

(私は彼の兄弟を私の友達のなかへ算入する)。〔混入〕

Wasser unter Wein tun

(水を酒に入れる) 〔同〕

das Geld unter die Kinder verteilen

(その金を子供たちの間に分つ)。〔分配〕

viii) vor (=in the front of, before; ago=前に、以前に)。

〔A〕 三格支配の場合。

Ein Baum steht vor dem Hause.

(一本の木が家の前に立つてゐる)。〔前方〕

vor Christi Geburt (基督降誕前)。〔時間的先行〕

Du kommst vor der Zeit. (君は時刻に先立つて来る)。

〔同〕

Recht geht vor Macht. (正義は権力にまさる)。〔優越〕

Sie hat vor ihrer Schwester den Vorrang.

(彼女は姉妹よりも上位にある) 〔同〕

Die Kinder springen vor Freude.

(子供たちは喜びのため小躍する)。〔原因〕

Das Wasser gefriert vor Kälte.

(水が寒気のために凍る)。〔同〕

vor Schmerzen schreien (苦痛のために叫ぶ) 〔同〕

Das Heer flieht vor dem Feinde. (軍隊は敵を見て逃れる)。

Das Kind zittert vor seinem Vater.

(子供は父を見て戦慄する)。〔同〕

〔B〕 四格支配の場合。

Sich gehe vor das Fenster. (私は窓の前へ歩いて行く)。

[或もの前への運動]

etwas vor den Richter bringen

(或事を法官の前に持出す; 訴へる)

ix) zwischen (=between=間に)。

[A] 三格支配の場合。

zwischen drei und vier Uhr

(三時と四時との間) [中間・介在]

Das Denkmal steht \*zwischen dem Schulhaus und der  
Tabakfabrik. (記念碑は校舎と烟草工場との間にある)

[同]

【註】 stehen は「立つ」、liegen は「横はる」にして、大體垂直線の方  
向が主宰せるものには、前者を用ゐ(上例の如く)、水平線の方  
向の勝れるものには、後者を使用するのが本則であるが、周囲の状  
態によつて、同一物に兩者とも使用される。

Das Schulhaus steht auf dem Berge. (校舎は山の上にある)。

Das Schulhaus liegt im Walde. (校舎は森の中にある)。

[B] 四格支配の場合。

Er stellt den Stuhl zwischen den Tisch und das Sofa.

(彼は椅子を机とソファとの間に置く) [中間への運  
動]

## 第三章

### 形容詞

1. 形容詞 (das Eigenschaftswort, das Adjektiv) は、(a) 名詞  
の前に附加されるときと、(b) 單獨に使はれるときとある。

(a) Herr Müller ist ein alter Mann.

(ミューラー氏は老人です)。

(b) Herr Müller ist alt.

(ミューラー氏は年とつてゐる)。

前者を附加語的 (attributiv) に用ゐられたるものと云ひ、後  
者を客語的 (prädikat) に用ゐられたるものといふ。前者は詩歌  
を除く外、名詞の前に置かれるけれど、後者はいつも sein, wer-  
den, bleiben (continue, remain), scheinen (seem 見える) など  
の動詞によつて、主語と結びつくのである。

Er ist (wird, bleibt, scheint) glücklich.

(彼は幸福である、[になる、で居る、に見える])。客語的

【註】 此際、上掲の動詞と形容詞とを綜合して、主語に對して、客語  
(Prädikat [R.]) をなしてあると云ふ。そして上掲の動詞を、連  
辭 (Kopula [C.]) と云ひ、形容詞を客語(的)形容詞と名づける。

2. 形容詞は名詞 (又は代名詞) に關して、其性質状態を云  
ひあらはすものである。

Herr Müller ist alt (old). [客] (状態)

Herr Müller ist ein alter Mann. [附] (,,)

Er ist freundlich (kind). [客] (性質)

Er ist ein freundlicher Mann. [附] (,,)

若しそれが、動詞(形容詞又は副詞)に關係するときは、それは最早形容詞としてではなく、副詞として用ゐられたものである。

Dieser Knabe ist fleißig. (此男の兒は勤勉である。)

[fleißig は dieser Knabe に關係する。(形)]

Dieser Knabe lernt fleißig. (此男の兒は勤勉に學習する。)

[fleißig は動詞 lernt に關係する。(副)]

【註】 I) 其他の例は順序上後に出すことにする。

II) 形容詞のほとんどすべてが、附加語的にも、客語的にも使用される。然し稀には、(A) 單に客語的にしか使はれないものと、(B) 附加語的にしか使用されないものがある。

例へば (A) gram (忌むべき)、not (必要な)、angst (心配な)、feind (敵意ある) 等

Dieser Mann ist mir (ich の三格) gram. (此人は私はいやだ; ein grammer Mann と云ふことなし。)

Es ist mir angst um ihn (er の四格). (彼の事が私は心配だ; ein angster Mann とは云はず。)

Mir ist Hilfe not. (救助が僕には必要だ。)

Er ist meinem Bruder feind. (彼は私の兄弟に敵意はある。)

(B) は dortig (そこの)、hie'g (こゝの)、gestrig (昨日の)、heutig (今日の) 等。

Er ist ein hiesiger Bürger. (彼は此地の市民である。)

[然し Dieser Bürger ist hiesig. とは云はず。]

3. 形容詞が、客語的に使用せらるるときは、變化するとはない。附加語的に用ゐられたときには、名詞の性・數・格に應じて變化する。例へば:

1. Kleine Glocken klingen hell.

(小さい鐘は朗かにひびく。)

2. Der Klang der kleinen Glocken ist hell.

(小さい鐘の響は朗かだ)

3. Der Klang kleiner Glocken ist hell.

(同)

の如く、冠詞の有無・格の如何・數の如何及性の如何によつて、附加語的の形容詞は、語尾を變ずるものであるが、この變化を大別して三種とする。強變化・弱變化及混合變化が、それである。

## 第一節

### 強變化

4. 附加語形容詞が、所謂強變化 (Starke Declination) をなす場合は、二つある。それは

(A) 形容詞が、單獨で名詞の前に置かるる場合と、

(B) 形容詞が、何等の \* 語尾變化なき詞と共に、名詞の前に置かれる場合とである。

【註】 \* 何等の語尾變化なき詞とは、例へば etwas (若干の)、allerlei (各種の)、allerhand (種々の)、vielerlei (様々の)、lauter (純粹の) 其他であるが、all (=all, すべて)、viel (多くの)、manch (あまたの)、welch (何たる)、solch (=such, かゝる)、wenig (少し) 等は、語尾をつけても、つけなくても附加語的に使用される。従つて語尾を取らざる場合には、上掲 allerlei 等と同じ取扱ひを受けるのである。又數詞も大抵これに屬する。

強變化の語尾は、大體定冠詞の語尾と同じである。異なるところは、中性の一格四格に於て、-es となり、男性及中性の

二格に於て、名詞の語尾が、-es に終るときは、形容詞の語尾が -en となることである。然らざるときは、語尾は -es であり、又古くはすべて -es であつた。

	男 (M.)	女 (F.)	中 (N.)	複 (Pl.)
一 (N.)	-er	-e	-es	-e
二 (G.)	-en (od. en)	-er	-es (od. en)	-er
三 (D.)	-em	-er	-ent	-en
四 (A.)	-en	-e	-es	-e

【註】 \* は注意すべき個所を示す。

〔例〕

Singular

Mask.	Fem.	Neut.
N. guter Knabe	(solch) gute Frau	(welch) gutes Kind
G. guten Knaben	(solch) guter Frau	(welch) guten Kindes
D. gutem Knaben	(solch) guter Frau	(welch) gutem Kinde
A. guten Knaben	(solch) gute Frau	(welch) gutes Kind

Plural

N. (manch) gute Knaben, Frauen, Kinder
G. (manch) guter " " "
D. (manch) guten " " Kinder
A. (manch) gute " " Kinder

5. 今實例によつて示すと:

etwas: Haben Sie etwas frisches (=fresh) Brot (=bread)?  
(貴君は若干の新鮮なパンをお持ちですか?)

welch: Welch schönes Wetter (weather) ist es!

(何たるよいお天気だらう!)

manch: Ich habe manch schöne Blume in meinem Garten.

(私の庭にはあまたの美しい草花 [木の花=die Blüte] がある。)

drei (three): Drei arme (poor) Fischer arbeiteten die Nacht über vergeblich (in vain).

(三人の氣の毒な漁夫が終夜むだに働いた。)

又 einige (若干の)、wenige (僅少の)、etlich (若干の)、mehrere (數個の)、verschieden (種々の)、viel (澤山の)、ander (ほかの) などが、複數名詞に伴ふとき、これらのものの直後に來る形容詞は、強變化されるのがよろしい [一格] viele wichtige Dienste (多くの重要な役務; Dienst [M.] [II•A]; [二格] vieler wichtiger Dienste; [三格] vielen wichtigen Diensten; [四格] viele wichtige Dienste. (但 81 頁註参照)。

〔例〕 Ich habe einige süße (sweet) Äpfel (apples).

(私はいくつかのおいしい林檎を持つてゐます。)

【註】 一定の條件の下では、男性及中性の單數二格に於て、-es の代りに、-en を取ること、及び古くはかゝる細工を施さなかつたことは、既に述べたが、或固定せる云ひ表はしては、以前の形が保たれて居る。

Er ist gutes Mutes.

(彼は上機嫌である; [一格] guter Mut)

Gehen Sie gerades Weges nach Hause!

(真直に家へ歸り玉へ; [一格] gerader Weg)

Er wurde alles Ernstes böse.

(彼は眞剣に立腹した; [一格] aller Ernst; böse werden 立腹する)

第二節

弱變化

*dieser* 型 弱變化 定冠詞

6. 附加語形容詞が、弱變化 (Schwache Declination) をなす場合は、同じく二つある。

- (A) 形容詞が、定冠詞と共に、名詞の前に置かるる場合と、
- (B) 形容詞が、定冠詞と同様\*の語尾變化をなす詞と共に、名詞の前に置かるる場合とである。

【註】 \* 定冠詞と同様の語尾變化をなすものは、

(男)	(女)	(中)	(複)
dies-er (この)	dies-e	dies-es	dies-e
jen-er (あの)	jen-e	jen-es	jen-e
welch-er (いかなる)	welch-e	welch-es	welch-e
solch-er (かやうな)	solch-e	solch-es	solch-e
manch-er (あまたの)	manch-e	manch-es	manch-e
jed-er (各の; every)	jed-e	jed-es	欠
jeglich-er ( " )	jeglich-e	jeglich-es	欠
all-er (凡て; all) 其他	all-e	all-es	alle

弱變化の語尾は、男性一格・女性中性の一格四格に於て *-e* を採り、他はすべて *-en* を採るのであるから、記憶しやすい。かく變化の形に乏しいから、これを弱變化と名づけたのである。

	男 (M.)	女 (F.)	中 (N.)	複 (Pl.)
一 (N.)	-e	-e	-e	-en
二 (G.)	-en	-en	-en	-en
三 (D.)	-en	-en	-en	-en
四 (A.)	-en	-e	-e	-en

【例】

Singular.

Mask. <i>der</i>	Fem. <i>die</i>	Neut. <i>das</i>
N. der <u>gute</u> Knabe	jene <u>gute</u> Frau	solches <u>gute</u> Kind
G. des guten Knaben	jener guten Frau	solches <u>guten</u> Kindes
D. dem guten Knaben	jener guten Frau	solchem guten Kinde
A. den guten Knaben	jene <u>gute</u> Frau	solches <u>gute</u> Kind.

Plural.

N. manche guten Knaben, Frauen, Kinder
G. mancher guten " " "
D. manchen guten " " Kinder
A. manche guten " " Kinder

【註】 前節第五項に於ける *einige* [複]、*wenige* [複]、*mehrere* [複] 等の後の形容詞を、すべて強變化せしむ代りに、第一格・四格においてのみ強變化し、他は弱變化に依らせる人もある。例へば [一格] viele wichtige Dienste; [二格] vieler wichtigen Dienste; [三格] vielen wichtigen Diensten; [四格] viele wichtige Dienste の如きである。

7. 今實例について示すと。

*dies-* und *jen-*: Wem gehören (belong) diese Gebäude und jene Gärten? (誰れに [wemは wer (who)] の三格] 此建物(複)とあの庭(複)は屬してゐるか?)

Die wahre Freiheit (freedom) ist die Mutter des öffentlichen (public) Wohls. (眞の自由は公けの幸福の母である。)

In jedem guten Hause ist Reinlichkeit die erste Tugend. (各のよい家では、清潔が第一の徳である。)

Nicht alle lehrreichen Bücher sind interessant.

(すべての教への多い本が、みんな面白いわけではない。)

### 第三節

#### 混合變化

8. 附加語形容詞が、混合變化 (gemischte Declination) をなす場合は、同じく二つある。

- (A) 形容詞が、不定冠詞と共に名詞の前に置かるる場合。
- (B) 形容詞が、不定冠詞と同様\*の變化をなす詞と共に、名詞の前に置かるる場合とである。

【註】 \* 不定冠詞と同様の語尾變化をなすのは、次の如きものであるが、不定冠詞には複數なきを以て、これらの詞の複數における語尾變化は、定冠詞のそれに倣ふのである。

[男]	[女]	[中]	[複]
mein (私の)	meine	mein	meine
dein (お前の)	deine	dein	deine
sein (彼れの)	seine	sein	seine
sein (no)	seine	sein	seine
unser (われらの)	un(s)re	unser	un(s)re
euer (汝等の)	eu(e)re	euer	eu(e)re
ihr (彼女の: 彼等の)	ihre	ihr	ihre
Ihr (貴君の)	Ihre	Ihr	Ihre

其他

混合變化の語尾は、男性一格・女性・中性の一格・四格に於て、強變化する外は、すべて弱變化をす。混合變化と云はれる理由は、ここにある。

	男 (M.)	女 (F.)	中 (N.)	複 (P.)
一 (N.)	e	e	e	-en
二 (G.)	-en	-en	-en	-en
三 (D.)	-en	-en	-en	-en
四 (A.)	-en	e	e	-en

【例】

Singular.

	Masf.	Fem.	Neut.
N.	ein* guter Knabe	seine gute* Tochter	dein gutes* Kind
G.	eines guten Knaben	seiner guten Tochter	deines guten Kindes
D.	einem guten Knaben	seiner guten Tochter	deinem guten Kind
A.	einen guten Knaben	seine gute* Tochter	dein gutes* Kind

Plural.

N.	Ihre guten Knaben, Töchter, Kinder
G.	Ihrer guten " " "
D.	Ihren guten " Töchtern, Kindern
A.	Ihre guten " Töchter, Kinder

【註】 不定冠詞には複數なきを以て、これを複數にするときは、無冠詞となるを以て、形容詞は強變化する(即ち強變化の [A] の場合となる)のである。例へば ein guter Knabe を複數となすときは、gute Knaben となることを記憶して置く。

9. 混合變化の實例を示すと:

Das kleine Veilchen (violet) ist ein liebliches Blümchen des Frühlings. (小さい堇は春の愛らしい花である)。  
 Wilhelm ist ein fleißiger Knabe; seine kleine Schwester Anna ist ein sehr aufmerksames Mädchen. (ウィルヘルムは勤勉)



な男の子だ、その小さい妹の父は大層注意深い女の子である。)

Saben Sie ein ganzes\*1 Haus? Nein, ich habe drei ganz\*2 (entirely) schöne Zimmer im Hause meines alten Onkels. (貴方は家を丸一軒お持ちですか? いえ、私は私の年とつた叔父のうちに、うんと美しい部屋を三つ持っています。)

【註】 かくの如く、ganz は形容詞としても (\*1)、副詞としても (\*2) 使用される (後の ganz は形容詞 schöne を限定するだけである)。

Wie viele\* Zimmer hat Ihr neues Haus? Mein neues Haus hat fünf große Zimmer und eine kleine Studierstube. (貴方の新しい家は、幾間ありますか? 私の新しい家は、五つの大きな部屋と、一つの小さい書齋とがあります。)

【註】 wieviel と連記せる場合には、語尾を附けない; wie viel の場合には附けると、附けないときとある; Wieviel Brüder (od. Wie viele Brüder) hast du? (何人君は兄弟があるから)?

### 第四節

#### 変化についての注意事項

10. 二個又は二個以上の形容詞が、一個の名詞の前に置かるるときは これらの形容詞は、すべて同一の語尾変化をする。

(古い貴重な葡萄酒)

弱 { der alte köstliche Wein  
des alten köstlichen Wein(e)s  
dem alten köstlichen Wein(e)  
den alten köstlichen Wein

(新しいあつい本)

混 { ein neues, dickes Buch  
eines neuen, dicken Buches  
einem neuen, dicken Buche  
ein neues, dickes Buch

【註】 I) 形容詞相互の間に、und 又は oder があつても、変化は同様である: der alte und köstliche Wein, des alten und köstlichen Weines.

II) 形容詞相互の間に und 又は oder が入るときは、Komma を挿入しない (上例を見よ)。ein guter, treuer und anhänglicher (なついてある) Mann. 但し初めから Komma のないものについては、次項に述べる。

11. 一個の名詞に關係して、二個又は二個以上の形容詞が並列的に置かれ、其らを接續する詞 (und 又は oder 等) なきときは、Komma [R.] を挿入するものであるが、[前項註 (II) 参照] 名詞の直前に来るものと、名詞そのものとが、特に結合して、まづ一概念をつくり、自餘の形容詞は、此一概念に關係するものであるときは、此もの [直前形容詞] とその前行形容詞との間には、Komma を置かない。但し此場合でも、語尾変化を同一にするのが、今の規則である。

[有] { die gute, nachahmenswerte Sitte  
(良き・模倣する値ある風習)  
mit teurem, unverbälfähtem Rotwein  
(たかい・純粹の赤葡萄酒で)  
nach einem langen, heißen Sommer  
(長い・あつい夏の後に)

(無)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{die gute deutsche Sitte} \\ \text{(良いドイツ風習)} \\ \text{mit echtem bairischem Bier} \\ \text{(本もののバイエルンビールで)} \\ \text{in einem schadhafteisenen Kessel} \\ \text{(破損せる鐵釜のなかで)} \end{array} \right.$

【註】 I) かく名詞とまづ合して、一概念を構成するものは、多くは材料(上例の eisen)又は國籍(bairisch, deutsch)に關する形容詞である。

II) いくつかの形容詞が、強變化する場合に於て、名詞直前にある形容詞が、名詞と共に一概念をつくるとき、男性中性の二格三格に於て、これのみ(直前のもののみ)が弱變化することもあるが、敢えてさうしなければならぬ事はない。上例で云へば、mit echtem bairischem Bier の類である、複數では die Bestellung moderner karierten Tuche (今風の縞のある布の注文)。

12. 次の如き形容詞が、冠詞なくして用ゐらるる場合には、其語尾は強變化するのは勿論であるが、此語尾變化は、次に來る形容詞に、定冠詞と同じやうな影響を及ぼすもので、即ち次に來る形容詞は弱變化するのである。

befagt	(上述の)	erwähnt	(同)
obig	(上記の)	vorig	(前述の)
vorstehend	(前記の)	nachstehend	(後述の)
bewußt	(既に知られたる)	gedacht	(既知の)
folgend	(次の)		

【例】 infolge voriger, (nachstehender, folgender) durchgreifenden Regel (上述の、(後述の、次の) 嚴重なる規則によつて)。

13. 附加語的に使用されたる形容詞で、語尾變化を採らないものは、大體下の通りである。

a) 親愛なる呼びかけ: Lieb Brüderchen! Lieb Kind!  
 b) 詩的な言ひ方に於て: Jung Siegfried war ein stolzer Knab (若いジークフリートは氣負つた男の兒であつた (Uhländ)); Bin ein arm unwissend Kind (私はあはれな無智な小兒です) (Gauft).

c) 附加語として使はれてはゐるが、名詞の後に置かれたる場合: Er küßte (kissed) sie auf den Mund so bleich. (彼は彼女のひどく青ざめた唇に接吻した。); Röslein rot (= rotes Röslein 赤いばら)。

d) 他國より來れる色彩の形容詞: ein lila Band (淡紫色のリボン)、ein karmisin Kleid (深紅の衣服); 其他 indigo (藍色)、orange (橙色) (〔發音〕 オランジュ)、rosa (薔薇色) 等。

e) 或成句又は格言等に於て: ein gefährlich Spiel spielen (危険な遊をする〔賭博等にて]); auf gut Glück etwas tun (運を天にまかせて或事をする); Unrecht (=unrechtes) Gut gedeiht nicht. (不正な富は昌えない)。

14. 一個の名詞の前に置かれたる多くの形容詞と、形容詞を修飾限定する爲に置かれたる副詞とを混合せざるを要する。【例】 eine gut vernarbte Wund (うまく癒着した傷); ein prächtig gekleideter Mann (立派に服装せる人); die leicht erlernbare italienische Sprache (容易く學習され得る伊太利語)。

【註】 此項のものと、前項のものとを混淆してはならない。例へば、ein arm unwissend Kind は ein armes, unwissendes Kind の義で、ein arm unwissendes Kind の義ではない。

15. -el, -er, -en に終はる形容詞は、語尾變化を採る際には、その „e“ を失ふものである。

edel (氣高い=noble);  
 edler Mann, edlen Mannes, edlem Mann, edlen Mann.

heiter (快活な);

der heitere Knaben, des heitren Knaben, dem heitren Knaben,  
den heitren Knaben.

eigen (自分の=own);

sein eigenes Kind, seines eignen Kindes, seinem eignen  
Kind, sein eigenes Kind.

但し -er, -en を有するものは、往々この „e“ を保つてゐること  
がある; bitteres Bier (苦いビール), bitteren Biers, bitterem  
Bier, bitteres Bier. — 又 -el, -er が二・三又は四格に於て、其れ  
を保ち、却つて語尾の e の方が失はれることがある: die dunkle  
Nacht (暗夜) の二・三格が、der dunkeln Nacht となり、heit(er)er  
Himmel の二格が、heitern Himmels, 三格が heiterem Himmel,  
四格が heitern Himmel となる類である。

16. 形容詞 hoch (高い、high) は、語尾變化の時、其 „c“ を  
失ふものである: der hohe Berg (高山); des hohen Bergs, dem  
hohen Berg, den hohen Berg.

### 第五節

#### 比較

17. 形容詞はその原形 [これを原級 (Positiv [M.]) と稱す]  
に、-er をつけて、比較級 (Comparativ [M.]) を、-est をつけ  
て、最高級 (Superlativ [M.]) をつくり出すことが出来る。これを  
形容詞の比較 (Comparation [S.], Steigerung [S.]) と名づける。  
此場合に單綴の形容詞は、その幹母音を變母音とするのが普通  
である。従つて多綴形容詞は母音を變へない。又 au を幹母音

とするものは、單綴でも au とはならない。

(I) 變母音となるべき幹母音なきもの。

reich (rich) (富める)	reicher	reichst
schön (beautiful) (美しい)	schöner	schönst
tief (deep) (深い)	tiefer	tiefst
schwer (heavy) (重い)	schwerer	schwerst

(II) 變母音となるべき幹母音を有し、且つこれを變ずるもの。

arm (poor) (貧しい)	ärmer	ärmst
jung (young) (若い)	jünger	jüngst
klug (clever) (利口な)	klüger	klügst

(III) 變母音となるべき幹母音ありて、しかもこれを變ぜ  
ざるもの。

blank (bright) (輝ける)	blanker	blankst
wahr (true) (眞實の)	wahrer	wahrst
voll (full) (充分な)	voller	vollst

(IV) 變母音となり、又はならざるもの。

1. bang (anxious) fanger (od. bänger) bangst (od. bängst)
2. dumm (stupid) dummer (od. dümmer) dummtst (od. dümmst)
3. schmal (narrow) schmaler (od. schmäl(er)) schmalst (od. schmälist)

1. 心配な。— 2. 愚かな。— 3. 狭い。

【註】 かく母音を變じても、變じなくてもよいものは、變じない方を使  
ふのが、より無難である。

(V) „au“ の例 (母音を變ぜず)。

faul (lazy) (怠惰な)	fauler	faulst
-------------------	--------	--------

(IV) 多綴形容詞の例 (音を變ぜず)。

blutig (bloody) (血みどろの) blutiger blutigst  
 fruchtbar (fruitfull) (豊かな) fruchtbarer fruchtbarst  
 aufmerksam (attentive) (注意深い) aufmerksamer aufmerksamst

18. 最高級で -st を採るものは、s, ß, f, h, m, ß に終る形容詞、及び d, t に終る單綴形容詞のすべて、並びにそれに終る多綴形容詞中、最後の綴に高音のあるもの等である。

原 (Pos.)	比 (Komp.)	最 (Sup.)
1. s: mutlos (discouraged)	mutloser	mutlosest
2. f, h: frisch (fresh)	frischer	frischest
3. ß: heiß (hot)	heißer	heißest
4. g: kurz (short)	kürzer	kürzest
5. d: wild (wild)	wilder	wildest
6. t: alt (old)	älter	ältest
7. d (多綴): gesund (healthy)	gesünder	gesundest

1. 元氣喪せる。—2. 新鮮な。—3. 熱い。—4. 短い。—5. 荒々しい。—6. 年とつた。—7. 健全な。

【註】 bedeutend (significant; 顯著な)、glänzend (splendid; 燦爛たる) の如きは、最後の綴に高音がないだから、最高級は bedeutendst, glänzendst となる。しかし elend (misery; 憫れな) のやうに、其最高級を elendst 又は elendest とするものもある。—dt に終るものも、d 又は t に終るものと同様に取扱はれる; 即ち gewandt (skilled; 熟練な) の最高級は gewandtest である。

19. なほ比較變化に関する細則は、下の如くである。

(A) 母音に終るもの (無聲の h はこれなきものと認める) は、最高級に於て -st 又は -st を取る:

frei (free; 自由な)	freier	frei(e)st
fröh (merry; 愉快な)	fröhler	fröh(e)st

(B) 原級が、-el, -er, -en に終るものは、比較級に於て、その „e“ を失ふが、最高級では再び保有される:

-el: edel (氣高い)	edler	edelst
-er: heiter (快活な)	heiterer	heiterst
-en: eben (平らな)	ebener	ebenst

【註】 然れども -er, -el に終るものにして、往々その „e“ を失はない事がある: heiter, heiterer; tapfer (勇敢な), tapferer.

(C) 原級が -e に終るものは、比較の際、その „e“ を失ふ。

weise (wise, 賢明な)	weis-er	weis-est
träge (なまけな)	träg-er	träg-st

【註】 かゝるものは、附加語として用ゐらるるときも、同じ取扱ひをうける; ein weis-er Mann; der träg-e Rabe 等。

(D) 複合形容詞 (とは、一つの形容詞と他のものとの複合したものである) は、その第二部 (即ち基礎詞) のみ、比較變化を受ける。例へば engherzig (狭量なる) は eng (狭い) と herzig との複合であるが、此比較級は engherziger, 最高級は engherzigst である。従つて scharfsinnig (鋭敏な) は, scharfsinniger, scharfsinnigst となり、scharf は比較變化をうけない。

【註】 但し hoch を規定詞とするものは、hoch の方を比較變化させる。hochgeehrt (尊敬されたる); höhergeehrt, höchstgeehrt. これに倣ふものが、他に若干ある。

20. 不規則變化をなすものは、下の通りである。

Pos.	Komp.	Sup.
gut (good) (良い)	besser	best
hoch (high) (高い)	höher	höchst*
groß (great) (大きい)	größer	größt
nah(e) (near) (近い)	näher	nächst*

viel	(many) (多く)	mehr	meist
wenig	(little) (少し)	weniger	wenigst
		minder	mindest

【註】 höchst, nächst の ~~st~~ と読むのは、間違であることは、前にも述べたが、必ず ヒスト と讀まなければならぬ。

21. 副詞又は前置詞を基として作られた形容詞で、形の上では、比較級・最高級しかなく、意味の上では、原級と最高級としかないものは、次の通りである。

aus	(前置詞)から:	äußer	(外部の)	äußerst	(極端の)
hinten	(副詞)から:	hinter	(うしろの)	hinterst	(最後の)
in	(前置詞)から:	inner	(内部の)	innerst	(最深の)
mitten	(副詞)から:	mittler	(中央の)	mittelft	(最も中の)
oben	(副詞)から:	ober	(上の)	oberst	(最も上の)
unten	(副詞)から:	unter	(下の)	unterst	(最も下の)
vor	(前置詞)から:	vorder	(前部の)	vorderst	(最も前の)

22. 比較を許さざる形容詞は、次の如き種類のものである。

(A) 色彩をあらはすもの (但し schwarz (black), weiß (white)を除く)。従つて色の程度を區別するためには、いろいろなものを複合して使用する。hell-bian (青の淡いもの)、dunkel-bian (青の濃いもの)、ei-gelb (卵黄色)、zitronen-gelb (オレンジ色)、schwefel-gelb (硫黄色)、等。

【註】 但し比喩的の意味では、色彩形容詞の比較が使用されて居る。

Ein Demokrat ist roter als ein anderer.

(或民主論者は或他の民主論者よりも激烈だ。)

Ein junger Mensch ist grüner als ein anderer.

(或青は或他の青年よりも未熟である。)

(B) 絶對的性質を有するもの。一例へば tot (dead, 死した

る)、blind (blind, 盲目の)、taub (deaf, 聾の) ganz (whole, 全き) leer (empty, 空の) jährlich (筆頭の)、mündlich (口頭の) の如きものは、意味上比較され得ない。

(C) 物質名詞から來たものも、同様である。一例へば hölgern (wooden, 木造の; Holz より)、eisern (iron, 鐵製の; Eisen より)、kupfern (of-cooper; 銅造の; Kupfer より)、steinern (of stone 石造の; Stein より)、golden (of gold; 黄金の; Gold より)。

【註】 獨逸の Gold の o は短音にして、英國の gold の o は長音であることに注意せよ。

23. 比較の方法は次のとおりである。

(A) 比較されたる二物の性質の程度が、同一なることを示すには、原級の前に so (so; それ程に、それ位に)、或はこれを強めて、ebenso (just so, 丁度その位に) gerade so (just so, 同)、genau (exactly, きちんと) so を置き、後に wie (as, 位)、又は als を置く。

Karl ist so groß (tall) wie Adolf.

(カールはアドルフと同じ身長である)。

【註】 此 so は往々失はれる: Er ist größer als du.

Herr A. ist ebenso (od. gerade so) reich wie (od. als)

Herr B. (A さんは B さんと、丁度同程度に富んでゐる)。

(B) 比較されたる二物の性質中、一方のものが他方のものよりまされる事をあらはすには、比較級と als (than, よりも) とを使用する。比較級の意味を強めるために、viel (多く)、noch (なほ)、bedeutend (著しく)、v. weitem (すつと) 等を附けることがある。

Carl ist größer als August.

(カールはアウグストより背がたかい)。

Herr A. ist viel (od. bei weitem) reicher als Herr B.

(AさんはBさんより、ずつと金持である)。

【註】 als (than) の代りに、denn (than) を使用することがあるが、今では「として (as)」の意味の als と、「よりも」の意味の als とが重なる時、後者の代りに denn をつかふのである。

Ich werde lieber (rather) sterben, denn als Feigling leben.

(私は臆病者として生きるよりも、むしろ死のであらう)。

(Lieber は gern (gladly, 喜んで) の比較級である)。

(C) 一方のものの性質が他のもののそれより劣れることを示すには〔即ち (B) の反対の場合には〕、原級の前に weniger 又は minder (より少なく) を附し、後に als を置く。

Anna ist weniger (od. minder) schön als Julie.

(アナはユーリエよりは美しくない)。

或は簡単に nicht so とするのもよろしい。

Anna ist nicht so schön als Julie.

【註】 後の場合で lange を nicht の前につけて、否定の意味を強める事がある。

Anna ist lange nicht so schön als Julie.

(アナはなかなか以て、ユーリエの美には及ばない)。

(D) 以上の三つの場合は、二個の個體の有する一性質の比較であるが、之に反して同一事物の有する二個の性質を比較して、兩方が同一なるときには原級の前に so、後に wie 又は als を用ひ；一方がまされるときには、原級の前に mehr (又は eher (rather))、後に als (than) を附し、劣れる場合には、前に weniger (又は minder)。

後に als をつける。

Er ist so klug wie (od. als) edel.

(彼は氣高いと同程度に賢明である)。

Er ist mehr klug als weise.

(彼は賢明であるよりもむしろ利口の方である)。

Er ist weniger klug als weise.

(彼は利口であるよりもむしろ賢明の方である)。

Dieses Zimmer ist mehr lang als breit.

(此部屋は幅よりもむしろ堅が長い)。

【註】 \* mehr klug 又は mehr lang の代りに、普通の比較級の形、klüger, länger が時々使用される：Er ist klüger als weise. Dieses Zimmer ist länger als breit.

24. 比較される二つのものの性質又は状態が、一方の變化につれて、他方もまた變化することをあらはすには、二個の比較級を用ひ、一方の前には je、他方の前には desto (又は um so) をつける。そして desto 又は umso を以て初める方は倒置法により、je を以て初める方は、正置法(定動詞は文末)による(これは desto を以て初める方が主文だからである)。

Je früher du kommst, desto (od. um so) angenehmer ist es mir. (君の來るのが早ければ早いだけ、私には愉快である)。

Je länger ich es sehe, desto (od. um so) schöner wird es. (私がながくそれを見ておればおるほど、それは美しくなる)。

25. 一物の或性質が、漸次に高まり行くことをあらはすには、比較級の前に immer を附す。而して「日々に」の意味なるときは、immer の代りに、täglich 又は mit jedem Tage を、「時間毎に」の意味なるときは stündlich 又は mit jeder Stunde

をつける。

Die Orangen\* werden gelber und gelber (od. immer gelber). (香橙はだんだんと黄色になる。)

【註】 Orange はオレンジと發音しないで、オランジエ ora'ndge と發音する、佛語だからである。

Seine Tochter wird täglich (od. mit jedem Tage) schöner. (彼の娘は日益に美しくなる。)

Die Gefahr wurde stündlich (od. mit jeder Stunde) größer. (危険は時間毎に大きくなつた。)

【註】 比較級の前に immer を附したる形で、後に比較するものを伴ふことがあるが、これは本項の意味ではない。此場合 immer の代りに、immerhin を使つてもよい。

Dieses Bier ist nicht gut, aber immer(hin) besser als Wasser. (此麥酒は良くないが然し水よりはました。)

26. 比較級が附加語として用ゐらるるときは、原級と全く同一の取扱を受ける。最高級も同様である。

【強】 (一格) alter Mann [原]、älterer Mann [比]、ältester Mann [最];

【弱】 (同) der alte Mann [原]、der ältere Mann [比]、der älteste Mann [最];

【混】 (同) ein alter Mann [原]、ein älterer Mann [比]、ein ältester Mann [最]。

比較級が客語的に使用される場合も、原級と全く同一の取扱を受ける。

Der Apfel ist süß, die Traube ist süßer.

Wilhelm ist fleißig, Anna ist noch fleißiger.

27. 直接に比較するものなくして、用ゐられたる比較級を、

絶對的比較級 (der absolute Komparativ) と名づける。この意味は、比較的によく或性質を有することを示すが、或は其性質を少しく有することを示すが故に、實は原級よりも程度の低いことがある。

ein älterer Herr (やゝ老いた紳士、中老の紳士)

seit längerer Zeit (しばらく前から)

die neuere europäische Literatur (近代歐洲文學)

28. 最高級が附加語的に使用されるときには、二つの方法による。其一つは、(a) 主語の性・數に應ずる定冠詞を有する一格の形を採るものであり、他の一つは、(b) am (=an dem) を戴く三格の形を採るものである。

Dieser Wettläufer ist (a) der schnellste od. (b) am schnellsten. (此競走者は一番早い。)

Diese Schülerin ist (a) die fleißigste od. (b) am fleißigsten. (此女生徒は一番勤勉である。)

Dieses Schwein ist (a) das fetteste (b) od. am fettesten. (此豚は一番肥えてゐる。)

Sene Schlachten waren (a) die blutigsten (b) od. am blutigsten. (あの戦[複]は最凄惨であつた。)

【註】 形の上からすぐにわかるやうに、(a) は其次に来る名詞を略したものと考へてよい: <sup>1</sup>der schnellste Wettläufer; <sup>2</sup>die fleißigste Schülerin; <sup>3</sup>das fetteste Schwein; <sup>4</sup>die blutigsten Schlachten.

客語としての最上級の後に、これを限定する成分、即ち二格の名詞とか、von, unter, in などをも有する三格の名詞(又は代名詞)が來るときには、定冠詞のある方の形〔即ち (a)〕を使用する。若し或一つの事物の、いろいろの條件、いろいろの境地の下における状態を比べて云ふときには、am を戴く形〔即ち (b)〕を使用する。

- (a) Dieser Garten ist der schönste in der Stadt.  
(此庭は市中で一番美しい。)
- (b) Dieser Garten ist im September am schönsten.  
(此庭は九月に一番美しい。)
- (a) Cäsar war der größte von allen Feldherren.  
(シーザーはすべての將軍中一番偉かつた)
- (b) Cäsar war am größten, wenn\* (when) Gefahr und Unglück drohten. (シーザーは危険や不幸が脅威したときに一番偉大であつた)
- (a+b) Die roten Rosen sind die schönsten, und zwar sind sie am schönsten, wenn\* (when) sie eben ausblühen.  
(赤いバラは一番美しい(バラである)、但しそれが丁度咲き出すときが、一番美しい)

【註】 \* wenn (when, if 時に、若しも) は従属用接続詞で、これを以て初まる文を、副文章 (Nebenatz [副.]) と云ひ、之に對する本文を、主文章 (Hauptatz [主.]) と云ふ。こゝで云へば wenn Gefahr und Unglück drohten, 又は wenn sie eben ausblühen は、副文で、之に對する Cäsar war am größten, 又は und zwar sind sie am schönsten は主文である。こゝで半記すべきものは、副文章に於ては、定動詞が文末に来ること、これは**貶置法**と名づけられるものである。これで觀語法に**正置法**・**倒置法**・**貶置法**の三つあることが、わかつたのである。そして此別ち方は定動詞の位置を準據とすることを忘れてはならぬ。

- 正置法 [1. 主、2. 定] Er kommt heute.
- 倒置法 [1. 定、2. 主] Kommt er heute?
- 貶置法 [.....(終) 定] .....wenn er heute kommt.

前掲 a+b の兩方いづれを用ひても可なる場合は、勿論存在し得(本項最初の例を見よ)。但し (a) を用ひて見て、形容詞

の後に來る適當の名詞が、無い場合には、必らず (b) を採らねばならぬ。例へば:

- Der Apfel ist süß. (林檎はおいしい。)
- Der Birne ist süßer. (梨はもつとおいしい。)

につゞいて、「葡萄 (Traube [名.]) は最もおいしい。」と云はうとするとき、(a) の形を用ひやうとしても、補充すべき名詞(従つて冠詞)に窮する。故に此場合は、(b) の形によつて:

Die Traube ist am süßesten.

としなければならぬ。

29. 最高級の意味を強めるためには、色々な方法がある。  
(a) 最高級のすぐ前に aller- を結びつけること: 例へば reichst in dieser Stadt. (彼は此市で一番富める商人である。)- (b) denkbar (出來得る限り)、weit(aus) (すぐれて) 等を、最高級の直前につける: in der denkbar sorgfältigsten Weise (出來得るだけ念を入れて; sorgfältig=慎重な); der weit(aus) klügste Knabe (最も利口な男の兒)。-(c) bei weitem (著しく・非常に) を、最高級の直前、又は定冠詞或は代名詞の前につける: der bei weitem größte Teil seines Werkes (彼の著作の最大部分); Das ist bei weitem sein bestes Drama. (これは彼の最もすぐれた戯曲である); Diese Rose ist bei weitem die schönste. (このばらは一等美しい)。

【註】 此 bei weitem は比較級のときにも、意味をつよめる爲めに用ゐられる: Das ist bei weitem besser. それは遙かによりよくある。一別の話であるが、これが否定の副詞 nicht に伴ふときは、nicht をつよめるものとなる; bei weitem nicht so schön 中々以てそんなに悪くはない。

30. 直接他のものと比較しないで、只或性質が高い程度に於



て存在することを表はす最高級を、絶對的 highest (der absolute Superlativ) と稱する; Waren höchsten Ranges (上等の商品); aufs schönste (大變上手に); im besten Essen (食事のまつさい中); nach meinem besten Wissen (私の知る限りでは) 等。

Wir haben unser Haus mit den schönsten Blumen geschmückt.  
(われらは我等の家を大層うつくしい花で飾つた。)

Wir gingen beim schönsten Wetter spazieren.\*

(われわれは大層よいお天氣の折に散歩した。)

【註】 \*1) spazieren gehen の如きは、二つの動詞で一つの意味をあらはすものである。此時變化するのは、gehen だけで、spazieren はいつも其儘である; kennen lernen (知る)、Tischen bleiben (座つたまゝで居る) など、みな其儘で、lernen, bleiben のみが變化する。

II) 或性質の多量に存在することをあらはすには、また原級の前に ungemain (非常に)、übermäßig (過度に)、außerordentlich (拔群に)、äußerst (極度に)、höchst (極めて) などを附してもよろしい: außerordentlich freigebig (べら坊に氣前よく); äußerst sparsam (非常に儉約な); höchst liebenswürdig (非常に愛らしい)。

III) 發音の具合により、-st を附するときは、聞きにくい場合には、原級の前に、am meisten (viel の最高級なる meist に am を戴かしめ、語尾を附したるもの) をおく: 例へば kindisch (愚かな [childish]) の最高級 kindisch(e)st の代りに am meisten kindisch と云ふが如きものである。—am meisten の反對 am wenigsten は原級を最も弱めるために、屢使用される: Sie ist am wenigsten klug in der Klasse. (彼女はクラスで一番愚かだ)。

### 第六節

#### 名詞的用法

31. 附加語的に使用された形容詞は、後續する名詞を除き、その頭字を大書して、名詞的に使用することが出来る。男性は名詞 Mann を、女性は名詞 Frau を略したので、單數・複數兩形を有し、語尾の變化は、名詞のある時と全然同一である。中性は抽象的の意味を有し、又はかゝる抽象的の性質を有する事物そのものを指し示す。これには複數形はない。

	單	複	單	複
男 [弱]		[弱]	[混]	[強]
der Alt-e (老いたる男)	die Alt-en	ein Alt-er	Alt-e	Alt-en
des Alt-en	der Alt-en	eines Alt-en	Alt-er	Alt-en
dem Alt-en	den Alt-en	einem Alt-en	Alt-en	Alt-en
den Alt-en	die Alt-en	einen Alt-en	Alt-e	Alt-en
女 [弱]		[弱]	[混]	[強]
die Alt-e (老女)	die Alt-en	eine Alt-e	Alt-e	Alt-en
der Alt-en	der Alt-en	einer Alt-en	Alt-er	Alt-en
der Alt-en	den Alt-en	einer Alt-en	Alt-en	Alt-en
die Alt-e	die Alt-en	eine Alt-e	Alt-e	Alt-e
中 [弱]		中 [混]	中 [強・單]	
das *Gut-e (善・よきもの)	ein Gut-es	Gut-es*		
des Gut-en 複・缺	eines Gut-en	欠		
dem Gut-en	einem Gut-en	Gut-em		
das Gut-e	ein Gut-es	Gut-es		

【註】 \* das Gute の如く定冠詞を有するものは、抽象的性質又は其性質を有するものを示すに對し、單獨に用ゐられるものは、其性質を有する事物のみを指すのである。

[例] Wer ist die Alte mit dem kleinen Kind auf dem rechten Arm? Sie ist die Frau eines Blinden und ist selbst blind. (右の腕に小さい子供をかゝへてゐる老女は誰れですか? あれは或盲人の妻で、自分もめくらです; Blind=盲目なる。)

In Amerika leben Weiße und Schwarze; die Schwarzen waren früher (formerly) Sklaven. (アメリカには白人と黒人とが住んでゐる; 黒人は以前は奴隷であつた; Weiße, Schwarze の後に Menschen (人間) を入れ考へる、die Schwarzen の後も同様)

Das Gute, das Wahre und das Schöne sind die Ideale jedes echten Dichters. (善・眞・美は各の本當の詩人の理想である; wahr=true=眞)

Er lenkte durch seine Rede die Herzen des Volkes zu allem Guten und Edeln. (彼は彼の演説によつて、民衆の心を、すべての良いもの、高尚なものへと向けた。)

Die Gewalt des Wahren ist groß. (「眞」の威力は偉大である。)

Ich werde ein Gleiches für Ihren Bruder tun. (私は同じ事を貴君の兄弟の爲に致しませう; gleich=等しき・同じき。)

Er wird Gleiches mit Gleichem vergelten. (彼は同じ返報をするであらう。)

又 etwas (something), nichts (nothing), viel, wenig, genug (enough) の後に、名詞的に使用される形容詞は、頭字を大書して、強變化をする。これには勿論複数はない。

etwas Neues (something new)	nichts Gutes (nothing good)
etwas Neuen	nichts Guten
etwas Neuem	nichts Gutem
etwas Neues	nichts Gutes

[例] Es war von etwas Neuem die Rede. (或新しいことについて話された; Rede=談話)

Ich weiß etwas Neues, aber es ist nichts Angenehmes. (私は或新しいことを知つてゐるが、それは何等愉快なことではない。)

Der Gedanke an ein künftiges Leben ist etwas ganz Natürliches. (死後の生存についての考へは、全く自然的な事だ; ganz は Natürliches だけに關係する。)

Der Alte hat den Armen viel Gutes getan. (其老人は貧者たちに澤山の良いことをしてやつた; getan は tun の過去分詞。)

Nebst wenig Angenehmem hat er viel Trauriges gesagt. (僅かの愉快なことの外に、彼は澤山の悲しい事を云つた。)

32. 比較級・最高級も、原級と同じ取扱ひで、名詞的に使用することが出来る。

der Ältere (より老ひたる男)、der Älteste (最も老ひたる人)、etwas Höheres (或より高いもの)、nichts Besseres (nothing better)、das Beste (最善)、sein Beste (彼の最善)、das Innere (内部)、das Innerste (最奥)、das Äußere (外面)、sein Äußeres (彼の外貌)、das Äußerste (極端) 等。

[例] Sein Streben war auf etwas Höheres und Edleres gerichtet. (彼の努力は或より高い氣高いものに向けられてゐた; gerichtet は richten の過去分詞。)

Zu etwas Besseren sind wir geboren. (或もつとよい事をなすやうに、われらは生れてゐる; geboren は gebären [生む] の過去分詞。)

Sein Äußeres (od. Das Äußere meines Vaters) ist sehr angenehm. (彼の外貌は(彼の従兄弟の外貌は)大層人すきがする。)

Er hat sein Bestes getan. (彼は彼の最善をなした; getan は tun (=do) の過去分詞。)

Seine Politik geht immer aus dem Innersten seines Gemütes hervor. (彼の政策はいつも彼の情意の最深いところから出る; aus etwas hervor=或ものから。)

Gott sieht (s:es) nur auf das Innere des Menschen. (神は只人間の内心だけを見る。)

33. 名詞的に使用されたる形容詞の前に、更に形容詞を置く事が出来る。此時は兩者の語尾變化が、同一であることは勿論である。

例へば形容詞 krank (sick) から [弱] der Kranke, die Kranke; [混] ein Kranker, eine Kranke; [強] Kranker, Kranke 等が出るが、これに、形容詞 arm (poor) をつけると、次のやうに變化する。

	男 [弱]	女 [混]	
單	der arm-e Krank-e	eine arm-e Krank-e	
	des arm-en Krank-en	einer arm-en Krank-en	
	dem arm-en Krank-en	einer arm-en Krank-en	
	den arm-en Krank-en	eine arm-e Krank-e	
複	die arm-en Krank-en	arm-e Krank-e	} 強
	der arm-en Krank-en	arm-en Krank-er(od.en)	
	den arm-en Krank-en	arm-en Krank-en	
	die arm-en Krank-en	arm-e Krank-e	

【註】 強變化複數二格に於ては、名詞的に用ゐられたる形容詞の語尾が、-er となる代りに、-en となることがある: armer Kranken.

中 [弱]

中 [混]

das angenehm-e Äußer-e	sein angenehm-es Äußer-e(s)
des angenehm-en Äußer-n	seines angenehm-en Äußer-n
dem angenehm-en Äußer-n	seinem angenehm-en Äußer-n
das angenehm-e Äußer-e	sein angenehm-es Äußer-e(s)

【註】 混合變化の第一格及四格に於て、語尾は -es を採るべきものが、-e を採ることもある: sein angenehmes Äußere (彼の人すきのする外貌)。

34. 人代名詞の直後に、同格で用ゐられる名詞的形容詞は、變化をする。但し二格は缺ける。

【註】 一人稱單數の三格四格は、mir, mich; 一人稱複數のそれは、uns, uns である。其他は後章で述べやう。

男	女	複
ich Arm-er	ich Arm-e	wir Arm-e (od. -en)
(私憫れなもの)		(われわれ憫れなものども)
mir Arm-em (od. en)	mir Arm-er	uns Arm-en
mich Arm-en	mich Arm-e	uns Arm-e

【註】 男性の三格及び複數の一格で、語尾を弱變化させる人もある。

【例】 Wir Unglückliche(n) bedürfen (need) jetzt Ihres Beistandes. (われわれ不幸なものは、今や貴君の援助を要する; bedürfen と云ふ動詞は二格の補足語を採る。)

Du nimmst mir Armen (od. Armen) die Hoffnung. (君は私といふ憫れるものから希望を奪ふのだ; nimmst は nehmen の二人稱單數。)

Der Schlaf flieht mich Aufgeregten. (眠は私といふ興奮せる人を避ける; aufgeregte 興奮せる。)

35. 國名より來りて中性に用ゐられたる形容詞は、國語の意味で、頭字を大書し、語尾變化をする。定冠詞のない時には、語尾をつけない。

- deutsch: das Deutsche = die deutsche Sprache (獨逸語)。
- japanisch: das Japanische = die japanische Sprache (日本語)。
- chinesisch: das Chinesische = die chinesische Sprache (支那語)。
- Deutsch ist eine schöne Sprache (ドイツ語は美しい言葉だ)。

但し或國語中の特殊のものをあらはすとき、云ひ換へると、これに或る限定語がつくときには、冠詞を伴ひつゝ、語尾を採らない。

- das heutige Deutsch (今日の獨逸語)
- das Deutsch Bismarcks (ビスマークの獨逸語)
- das richtige Englisch (正則の英語)
- das Englisch Chaucers (チャーサーの英語)

【註】 I) 色彩の形容詞を名詞化するにも、同様の現象がある。das Blaue (blau = blue より), das Blau; das Weiße (weiß = white より), das Weiß 等であるが、或特定のものを示すときには、後者の形を用ゐること、本文と同じである。即ち ein schönes Blau (美しい青); das Blau des Himmels 空の青; das Ei-weiß (蛋白) 等。これらは、前者即ち =e を有する形が、形容詞の變化をなすに對して、名詞の變化をする。但し第二格の es は時々ない事がある: 1) das Blau-e, des Blau-en, dem Blau-en, das Blaue; 2) das Blau, des Blaus, dem Blau, das Blau.

II) auf deutsch (獨逸語で)、auf japanisch (日本語で)、auf russisch (露語で) 等は、習慣的用法で、頭字を小書する。

36. 定冠詞を有する名詞的形容詞が、人名一特に帝王名の後に附せられることがある。これを後稱と云ふ。後稱は勿論形容詞の規則に従つて變化する。但し、此際人名の前に於ける、稱號の有無は、後稱の變化に關しない。

(A) 前に稱號なき例

Karl der Groß-e (カール大帝)	Rathan der Weis-e (賢者ナアタン)
Karl des Groß-en	Rathan des Weis-en
Karl dem Groß-en	Rathan dem Weis-en
Karl den Groß-en	Rathan den Weis-en

(B) 前に稱號ある例

- a) 定冠詞なきもの
- b) 定冠詞あるもの

Kaiser Karl der Groß-e	der Kaiser Karl der Groß-e
Kaiser Karls des Groß-en	des Kaisers Karl des Groß-en
Kaiser Karl dem Groß-en	dem Kaiser Karl dem Groß-en
Kaiser Karl den Groß-en	den Kaiser Karl den Groß-en

【註】 後稱として、眞の名詞の來るときは、それが名詞の變化に依る事は勿論である。これと本文の後稱とを混合してはならぬ。

der König Eduard der Bekenner (エドゥアルト改宗王〔名詞〕)
des Königs Eduard des Bekenners
dem König Eduard dem Bekenner
den König Eduard den Bekenner

37. 形容詞の名詞的用法について、更に注意すべき細則は下の如くである。

i) 形容詞は、冠詞もなく、語尾もなく、頭字も大書しないで、其儘名詞的に使はれることもある。

alt und jung	老若	bornehm und gering	貴賤
arm und reich	貧富	hoch und nieder	高下

gleich und gleich 同類 von klein auf 小さいときから

【例】 Der Star ist bei groß und klein sehr beliebt. (椋鳥は大人にも小供にも非常によろこばれる。)

Bewundert lief alt und jung zusammen (together). (驚いて年寄も若いものも走り集まつた; lief は laufen (走る) の過去。)

Gut ist gut, besser ist besser. (良いものはよい、よりよいものはなほよろしい。)

Ehrlich währt am längsten. (正直は最長くもつ; ehrlich の名詞は Ehrlichkeit である)。

ii) 名詞的に使用された形容詞と、本當の名詞とは區別しなければならぬ。両者は、形が類似してゐるから、混同しやすいので、特に注意を要する。

名 詞	形容 詞
das Gut (—es, * 2er) 財貨・土地	das Gute 善
die Güte (無複) 親切	die Gute 善き女
die Fremde („) 異國	die Fremde 異國の女
der Tod („) 死	der Tote 死したる人
das Recht (—es, —e) 法律	die Rechte 右手
der Junge*2 (—n, —n) 男の兒	der Junge 若い男

【註】 \*I) 括弧中に示せるのは、單數二格と複數一格とである。普通の字書は、この二つを名詞の後に附記してある。

\*II) 名詞の der Junge と、形容詞を名詞的に用ゐた der Junge とは、同一のやうに見えるけれど、不定冠詞をつける時、又は冠詞なきときに、其差異は明白にわかる。

ein Junge (名), Junge (名); ein Junger (形), Junger (形)。

【例】 Das ist das Gute an der Geschichte. それはその話でよいところ(面白いところ)だ。[das Gute=形]

Er hat das Gut meines Onkels gekauft. 彼は私の叔父の地所を買つた。[das Gut=名詞]

Wie groß ist des Allmächtigen\* Güte! 全能の神の親切は、なんと偉大であることよ! [die Güte=名詞]

【註】 \*des Allmächtigen は der Allmächtige の二格; der Allmächtige は allmächtig (全能なる) の名詞的用法; 神の事; des Allmächtigen Güte=die Güte des Allmächtigen. かゝる先行二格はザクセン二格と云はれてゐる。

Er legte seine Linke auf meine Rechte. 彼は彼の左の手を私の右の手の上に置いた。[die Linke (Rechte)=形容詞]

Hat er das Recht, das zu tun? 彼はそれをする権利があるか? [das Recht=名]

Die Eisenbahn hat Fremde und Verwandte aus der fernen Stadt gebracht. (汽車が他人をも、親戚をも遠い町からつれて來た)。[Fremde, Verwandte=形・強]

Er zog als ein wackerer Handwerker in die Fremde. 彼は勇ましい職人として異郷へ出て行つた。[die Fremde=名; zog は ziehen の過去]。

# 第 四 章

## 代 名 詞

1. 代名詞 (Pronomen [N.], Fürwort [N.]) は、事物の名に代えて用ゐられるものである事は、云ふまでもないが、意味によつて、これを大別して六つとする。

- 1) 人代名詞
- 2) 物主代名詞
- 3) 指示代名詞
- 4) 関係代名詞
- 5) 疑問代名詞
- 6) 不定代名詞

### 第 一 節

#### 人 代 名 詞

2. 人代名詞 (Person-pronomen, persönliche Fürwörter) とは、人をあらはし、又は物の名稱を繰返へす際に、その代りに用ゐられるものである。これには三つの人稱、二つの數がある。

● 第一人稱 (Die erste Person) とは、話者が自分の名に代えて用ゐるもので、ich (私)、wir (われわれ)。〔自稱〕

● 第二人稱 (Die zweite Person) とは、話者が相手の名に代えて用ゐるもので、du (君)、ihr (君達)。〔對稱〕

● 第三人稱 (Die dritte Person) とは、話者が自己及び相手方

以外のものの名に代えて用ゐるもので、第一人稱・第二人稱が、性の區別をなさざるに反し、こゝでは男性・女性・中性の三つの分れる: er (彼)、sie (彼女)、es (それ); sie (彼等)〔他稱〕—但し「彼等」の意味なる sie の頭字を大書して、相手方の敬稱に使用する事にきめられて居る。

#### Singular (單 數)

Erste Person (第一人稱)		Zweite Person (第二人稱)	
N.	ich (I)	du	(thou)
G.	meiner (of me)	deiner	(of thee)
D.	mir (to or for me)	dir	(to thee)
A.	mich (me)	dich	(thee)

#### Dritte Person (第三人稱)

	M. (男)	F. (女)	N. (中)
N.	er (he)	sie (she)	es (it)
G.	*seiner (of him)	ihrer (of her)	*seiner (of it)
D.	ihm (to or for him)	ihr (to or for her)	ihm (to or for it)
A.	ihn (him)	sie (her)	es (it)

#### Plural (複 數)

Erste Person (第一人稱)		Zweite Person (第二人稱)	
N.	wir (we)	ihr	(you)
G.	unser (of us)	euer	(of you)
D.	uns (to or for us)	euch	(to or for you)
A.	uns (us)	euch	(you)

#### Dritte Person (第三人稱)

N.	sie (they)	[Sie (you)]
G.	ihrer (of them)	[Ihrer (of you)]
D.	ihnen (to or for them)	[Ihnen (to or for you)]
A.	sie (them)	[Sie (you)]

【註】 \*meiner, deiner, seiner の代りに、mein, dein, sein が使用せられる事がある。

3. 第二人称單數の du は、親愛の意味をあらはすを主とする場合に用ゐられるものであるから、夫婦・兄弟・親友などが、互に話し合ふときに使用される外、神や基督に對し、小兒や部下のものに對しても使用される。書簡のなかでは、du 以下其四格に至るまで、各 D を大書する（相手が複數なら勿論 Ihr）が、普通の文では小書する。通常の交友關係や目上のものには Sie を使用する。親愛ならぬ關係で、むやみに du を使用すると、目下あつかひで、無禮となる事がある。

【註】 但し兒童に對しては、du でよい； Sie は滑稽である。相手方の身分などを考へて、其家の兒童まで Sie と呼ぶのは、留學生のやり易い誤謬である。注意しなければならぬ。

4. 三人稱複數の sie の頭字を大書して、『貴君』『貴君たち』の意味に使用する。此場合には、二三四格いづれも頭字が大きい。古くは（即ち九世紀頃には）、今 Sie と使用される場合に、du の複數を用ゐ、その頭字を大書したものである。—[例] Wollt Ihr mit mir zum Feste kommen? (私と一緒に宴會へ行きませんか?)—今でも地方的には用ゐられて居るが、目下ものに向つて使はれることもあるから、普通われわれは使はないのがよい。それよりやゝ新らしく、（即ち十七世紀の頃には）、三人稱單數の形を用ゐ、男子には Er (頭字大)、女子には Sie (頭字大) を使用した。[例] Herr Wachmeister, braucht Er keine Frau Wachmeisterin? (Beijing) 騎兵曹長殿、貴君は曹長夫人が要りませんか?—然し目下は、これを使つてはいらない。

5. 一人稱複數の wir は〔自分たち〕〔われら〕の義である

ことは勿論だが、これはまた帝王・侯伯等が、自らを稱するに用ゐられ、此際は頭字を大書する。但し ich も、この意味で使はれると、頭字は大きい、普通の時は小書される。

6. 人代名詞の二格を、物主代名詞 mein (my), dein (thy), sein (his, its) などと混同してはいけない。二格なる meiner (略、mein), deiner (略、dein), seiner (略、sein) 等は、物主的の意味ではなく、動詞などの補足語として用ゐられる。

【註】 補足語 (Ergänzung [S.], Objekt [R.]) とは、動詞などの意味の不完全なのを補つて、完全にするもので、例へば ich schreibe (私は書く) だけでは、「何を」書くやら不明である。故に例へば einen Brief 「手紙を」と入れると、schreiben の意味が完備する。此際 einen Brief は schreiben の Objekt であると稱する。又 Der Schüler gehorcht (生徒は聽從する) だけでは、誰れの云ひつけに従ふのやらわからない。そこで例へば Dem Lehrer (先生に) を入れて、gehorden の意味を完全ならしめる。前の einen Brief が四格なるに對し、dem Lehrer は三格である。そこで schreiben は四格の Objekt を、gehorden は三格の Objekt を要求すると云ふのである。なほその他に二格の Objekt を要するもの、前置詞を有する補足語を要するものがある譯である。

二格の補足語を要する動詞は、例へば gedenken (偲ぶ) であるが、それは「私は彼を偲ぶ」と云ふときには、Ich gedenke seiner. と云ふ。代名詞補足語たる seiner は、er の二格であることは言ふまでもない。一格が sie (she) のときは、ihrer, 一格が du の時は deiner である。其他の例。

spotten; Er spottet deiner, Ihrer.  
彼はお前を、貴君を嘲る。

harren; Er harret deiner, Ihrer.  
彼はお前を、貴君を待つてゐる。

bedürfen; Wir bedürfen seiner, euer.

われらは彼を、汝等を要する。

【註】 I. 但しこれら人代名詞の二格は、人に關してのみ使用し、物を代表するときには、皆指示代名詞 der (男), das (中) の二格 dessen; die (女) の二格 deren を使用することになつてゐる。

Die Amme ging mit dem Kind: denn es bedurfte ihrer. (乳母が小供と一緒に行つた、と云ふのは小供は乳母を要したから)。(ging は gehen の過去; bedurfte は bedürfen (need) の過去)。

Ich gebe dir diese Uhr; denn ich bedarf deren (ihrer にあらず) nicht mehr.

(私は此時計を君にやる; と云ふのは私はそれがもう要らないから) (bedarf は bedürfen の一人稱單數; deren は die [指示代名詞その條を見よ] の二格である)。

II. 二格の人代名詞が、前置詞 wegen, halben, um.....willen と結合するときには、語尾なき形 mein, dein, sein, ihr に -et を附し、unser は *st* を附して、これらのものを結びつける: meinetwegen; seinetwegen, ihrethalben (彼女のために)、unserthwillen, euerthalben.

7. 三格は、動詞等の補足語として使用される: 例へば helfen と云ふ動詞は、三格の補足語を要するから、「私は彼を助ける」と云ふときには、Ich helfe ihm. と云ふ; 一格が sie なら ihr; du ならば dir である。——三格は其外、定冠詞を有する四格の名詞、または前置詞を有する定冠詞づきの名詞と共に用ゐられて、これに對する所有者であることを示す場合がある。これは英語にはない事だから、注意を要する。

Er schüttelte mir die Hand (=meine Hand).

(彼は私の手を握つた; He shook my hand.)

Ich wasche mir das Gesicht (=mein Gesicht).

(私は私の顔を洗ふ。)

Mir scheint die Sonne in das Gesicht (=in mein Gesicht).

(太陽は私の顔を照らす。)

かゝる三格を、所有の三格 (Possessiver Dativ) と稱する。

【註】 これは名詞の三格にも、勿論あてはまる: Er schüttelte meiner Tante die Hand (=die Hand meiner Tante). 彼は私の叔母の手を握つた。——これと前行二格と混同してはならぬ。前行二格の次に、定冠詞のある事はないと云ふ事情に想ひ到るを要する。

8. 人代名詞の三格四格が、前置詞と共に用ゐらるる場合に、代名詞の指示してゐるものが、事物であるときには、その前置詞と da- とを結合したものを使ふのが普通である。若し前置詞が母音で初まるときには、da- は dar- となる。此際高音は前置詞にある。但し ohne が da- と結合することはない。

Ich esse gern Obst und kaufe im Herbst viel davon (von ihm の代り). (私は果物がすきだ、そして秋にはそれを澤山買ふ; gern=喜んで; essen 食べる。)

Du hast junge Pferde gekauft; was haben Sie dafür (für sie の代り) bezahlt? (君は若い馬[複]を買つた、それにいくら出したかね?; bezahlen=拂ふ=pay。)

Er kaufte einen Acker, umzäunte ihn und errichtete ein kleines Haus, darauf (auf ihm の代り). (彼は畑を買ひ、垣根をめぐらして、その上に小さい家を建てた。)

Er kam aus dem Konzert (concert) und sprach mit mir darüber (über es の代り). (彼は音楽會からやつて来て、私とそれについて話した。)



Saben Sie etwas gegen die Ansichten des Herrn B.? Nein, ich habe nichts dagegen (gegen sie の代り). (貴君は B 君の意見に何か反対するところでもあるかね: いゝえ、少しも反対はない。)

【註】 I. 此用法は人間を代表する代名詞には適用されない。此故に上の問が、Saben Sie etwas gegen Herrn B.? (君は何か B 君に反対か?) とあるなら、Ich habe nichts gegen ihn. (私は何も彼に反対はない。)と云はなければならぬ。此際 dagegen とは云へない。Kennen Sie etwas von Goethe? (貴君はゲーテについて何か知つてますか?)。Ich kenne nur einige Dramen von ihm. (彼は只彼のドラマを二つ三つ知つてゐるだけだ)。此際 davon は不可である。

II. 事物は關しても、古くは da+前置詞でなくて、前置詞と代名詞とが使用されたし、今でもその方を好む人もある。

III. n を以て初まる前置詞の前には、da- 又は dar- が結合される; danach od. darnach.

IV. darin と darein との區別。前者は in の次ぎに来るものが三格であるときに、後者はそれが四格であるべき時に使用される。Ein Beutel und kein Geld darin (=in dem Beutel). (財布あれど空つぽだ)。Er geht darein (例へば=in die Stube). (彼はその中[例へば室の中へ]入つて行く。)

V. da- の代りに hier- が使用されることがある; hiermit, hieran, hierin, hierdurch 等; 又その後に来るものが、子音を以て初まるときは、r がなくなることもある: hiemit, hiedurch; 然し hierin, hieran.

Das Theater war niedergebrannt und jedermann (everyman) sprach hierüber (od. hiervon). (劇場は焼け落ちた、そしてみんなが此事について話した; niedergebrannt は niederbrennen: [やけ落ちる] の過去分詞)。

9. 三人稱單數の er は男性名詞を、sie は女性名詞を、es は中性名詞を代表することは、言ふを待たない。

Der Baum ist dick=er ist dick. 此木は太い。

Die Blume blüht=sie blüht. 草花が咲く。

Das Haus ist groß=es ist groß. 此家は大きい。

然し文法上の性と自然性とを異にするものに於ては、今では自然性で受ける方が、一般である。

Wer ist das Fräulein? Sie ist die Tochter meines Lehrers. (あの令嬢は誰れです? あれは私の先生の娘です。)

Ich sah das Mädchen, aber ich sprach sie nicht.

(私は少女を見たが、私は彼女と話しはしなかつた。)

即ち das Weib (婦人)、das Mädchen (少女)、das Fräulein (令嬢)に於ては、古くは中性の代名詞でうけたが、今では自然性によつて、女性代名詞でうける方が、普通である。但し男性名詞の縮小形、例へば das Söhnchen (der Sohn 息子から)、das Studentlein (der Student から)の如きものは、中性の代名詞でうける事になつてゐる。

10. 前項に述べたやうに、es は中性の名詞を受けるのは勿論であるが、其外にいろいろの用法がある。

i) 文法上の主語 (grammatisches Subjekt) として、文頭に置かれる。但しこの時の定動詞の数は、眞の主語 (logisches Subjekt) に依る。

Ritter und Damen tanzten.=Es tanzten Ritter und Damen.

(騎士たちと淑女たちが舞踏した; 定動詞は共に複數。)

Der Rhein fließt.=Es fließt der Rhein.

(ライン河は流れる; 定動詞は共に單數。)

ii) 次に來る不定法文章又は副文章を代表することがある。

Es macht mir großes Vergnügen, Sie wieder zu sehen.  
 (こゝで貴君にまたお目にかゝるのは、私にとつては大に  
 うれしいのです; zu sehen の先驅を es がしてゐる; Ver-  
 gnügen 満足、よろこび。)  
 Es ist das erste Mal, daß (that) ich ihn um Rat frage.  
 (私が彼に相談するのは、これが初めだ; es は daß 以下の  
 先驅である; einen um Rat fragen=或人に相談する。)  
 Wir versuchten es, mit ihnen zu tanzen.  
 (われわれは彼等と一緒に踊らうと試みた; es は zu tanzen  
 を導くもので四格である。)

【註】 Sie hier wieder zu sehen とか、 mit ihnen zu tanzen とか云  
 ふ形を、不定法文章と云ふ; zu sehen も zu tanzen も不定法だ  
 からである。

iii) 前に云はれたる一語・一句・一文章を代表する事がある。

Der Vater ist Schneider. (父は裁縫師である。)  
 Der Sohn wird es (=Schneider) auch werden.  
 (息子も亦それになるだらう。)  
 Er war reich. (彼は金持ちであつた。)  
 Ich war es (=reich) nicht. (僕はさうではなかつた。)  
 Sind Sie die Mutter dieser Kinder? /  
 (貴君は此お子さんたちのお母さんですか?)  
 Nein, ich bin es (=die Mutter dieser Kinder) nicht.  
 (いえ、さうぢやありません。)  
 Wissen Sie, daß er ziemlich jung ist?  
 (貴君はあの方が可成り若いことを知つてゐますか?)  
 Ich weiß (know) es (=daß er.....) nicht.  
 (僕はそれを知りません。)

iv) 客語名詞の性・數に關係なく、主語として用ゐられる。

Wer ist diese Dame? (此御婦人はどなたですか?)  
 Es ist meine Tante. (私の叔母です。)  
 Wer sind diese Leute? (此人たちは誰れですか?)  
 Es sind meine Schüler. (私の生徒たちです。)

此場合客語となるべきものが、代名詞であるときには、  
 主語客語が顛倒する。

Ich bin es. Du bist es. Sie sind es.

【註】 I. 此際英語の如く、It is I. It is you. It is they. などと云  
 ふ事はない。又 Ich bin es. の如き形を倒置して Es bin ich と  
 云ふ事を得ない。もし客語の方に力が入れたければ、指示代名  
 詞 das を用ゐて、Das bin ich. Das sind sie. とする。これは  
 補足語としての es にも同様に起り得る現象である。即ち Ich  
 weiß es nicht. の補足語を強調するために、之を文頭に置くとき  
 には、Das weiß ich nicht. とする。Es weiß ich nicht. とし  
 てはならない。此場合 das の代りに dies も使用される: Ich  
 habe es getan. Dies habe ich getan.  
 II. 主語に使用される es も、客語に使用されるそれも、往々  
 にして省略されてゐるとなる: Ich bin's. Ich habe's gemußt.  
 's ist einerlei. (それは同一だ。)

v) 生起又は存在の意味を示すところの geben の主語とし  
 て使はれる。

Es gibt nur wenige schiffbare Flüsse in Spanien.  
 (西班牙には舟航し得べき河流はほんの少ししかない。)  
 Es gibt in allen Völkern gute und böse Menschen.  
 (いづれの國民にも善人と悪人とは居る。)  
 Es gibt heute einen Wildbraten zu Mittag.

(今日のおひるには [zu Mittag] 焼き肉がある。)

Es wird heute abend Regen geben.

(今夕は雨が降るだらう。)

Es ist....., Es sind..... の形も存在をあらはすものではあるが、これは元來 es gibt などと異つて、本節 i) にあげた文法上の主語と見做すべきものであるから、定動詞の数は、存在する物(即ち眞の主語)に依り、es 以外のものが文頭に來れば、それは消失する。これに反して、es gibt の es はいつも儼存し、存在する事物は、geben の補足語たる形であるために、いつも四格であり、geben はいつも三人稱單數の形を保つてゐる。意味上から云ふと、es gibt が一般的存在、又は廣範なる場所における存在を示すのに對して、これは或限られたる。比較的狭い場所に於ける存在を示すのである。

Es ist eine Uhr in meiner Tasche.

(私のポケットに時計がある。)

Es sind drei Damen in diesem Zimmer.

(此部屋には三人の淑女が居る。)

In diesem Zimmer sind drei Damen.

Drei Damen sind in diesem Zimmer.

(同; 文頭に他のものがある故、es はなし。)

Sind drei Damen in diesem Zimmer?

(同上疑問; 同じく es なし。)

Gibt es heute abend Regen?

(今夕雨が降るだらうか?; es は失はれない。)

(Abend [夕] が時の副詞と連記される時は、小さい; Morgen [朝] も同様; 但 morgen (tomorrow) は副詞。)

vi) 天候・氣候または精神的・肉體的の感じ等をあらはす非人稱主語として使はれることがある。これは詳しく後章に述べるが、大別すると:

A) Es ist warm. (It is warm.=暖かい。)—Es donnert. (It thunders.=雷鳴がする) の類。

B) Es hungert mich. (I am hungry=私は空腹だ。)—Es wundert mich. (I wonder=私は驚く。) の類。

vii) 不明なるもの、名状しがたきもの、言はずとも明瞭なるものが主語たる時に、これをあらはす非人稱のものとして使はれることがある。

Es klopft. (There is a knock.=戸を叩く音がする。)—Es

raucht. (There is smoke.=烟つてゐる。)—Es puft. (おば

けが出る。)—Es treibt mich in die Ferne. (Something [It]

impels me to go far away.=何となく遠いところに心ひかれる。)

viii) 不定の補足語又は單なる填充辭 (Füllwort [R.]) として使はれることがある。

Er hat es gut. (彼は仕合せだ; He is well off.)

Er wird es weit bringen. (彼は出世するだらう。)

Damit hat er es eilig. (彼はそれを [damit] 急ぐ。)

Er treibt es zu bunt. (彼はあまりひどい事をする。)

Er meint es gut. (彼は好意をもつてゐる。)

【註】 es は其他、(a) wir, sie (they) 等を不定に云ふときに、折々使はれる: Von da ging es (=gingen sie) in die Ebene herab. そこから彼等は平地へおりて行つた: 前後の關係で、これが gingen wir の意味であることもあり得る。—(b) 折々 es=deffen (これは指示代名詞 das の二格) 又は=da+三格支配の前置詞

〔共に補足語となる場合〕の事がある： Ich bin es (=dessen) müde, satt. (僕はそれにつかれてゐる、あきてゐる： müde, satt と一緒に二格が使はれる習慣である；例へば、Ich bin des Lebens müde. [僕は生にあいてゐる])； Ich bin es (=damit) zufrieden. (私はそれに満足してゐる； zufrieden sein (満足してゐる) はいつも mit を有する補足語を必要とする。)

11. 主語の働きが自分に歸ることをあらはす場合、形から云ふと動詞の補足語となるものが、主語と同一のものである場合には、この主語と同一物をあらはすに用ゐらるる代名詞を、再歸代名詞 (das reflexive [od. rückbezügliche] Fürwort, das Reflexivpronomen) と稱し、かゝる動詞を再歸動詞 (das reflexive Zeitwort) と云ふ。再歸代名詞の格は、四格が一番多く、次は三格で、二格は極めて稀れである。そして三人稱の單數複數が sich と云ふ特別の形を持つてゐる外、他の人稱には特定の形がないから、人代名詞の四・三・二格を充用してゐる。

(A) 四格の再歸代名詞を取る例。

sich freuen (喜ぶ)

ich freue mich	wir freuen uns
du freu(e)st dich	ihr freut euch
er, sie, es freut sich	sie freuen sich

(B) 三格の再歸代名詞を取る例。

sich getrauen (敢えてする)

ich getraue mir	wir getrauen uns
du getraust dir	ihr getraut euch
er, sie, es getraut sich	sie getrauen sich

(C) 二格の再歸代名詞を取る例。

seiner selbst spotten (自嘲する)

ich spotte meiner	wir spotten unser
du spottest deiner	ihr spottet euer
er, spottet seiner selbst	sie spotten ihrer selbst

【註】 I. 三人稱單數の sie が主語たるときは、sie spottet ihrer selbst と云ふ。こゝに使はれたる meiner, deiner, seiner 其他はすべて人稱代名詞の二格である。即ち ich の二格の meiner, wir の二格の unser; du の二格の deiner; ihr の二格の euer である。——

II. 三人稱で selbst (od. selber) を附加するわけは、er spottet seiner, sie spottet ihrer とだけ云ひ放つと、seiner と云はれた人が、er と別人であり、ihrer と指された人が sie とは別人であるかのやうに解せられるのを避ける爲めである。——又不定法として云ふときには、三格四格の再歸動詞には sich を添え、二格の再歸動詞には seiner selbst を添えて云ひ、以て普通の他動詞や自動詞と區別する。

今三四の用例を示すと：

- 1) sich (四格) bemühen (骨を折る)  
Bitte, bemühen Sie sich nicht!  
(どうぞおかまひ下さるな!)
- 2) sich (四格) setzen (座る)  
Ich setze mich auf diesen Stuhl.  
(私は此椅子に座ります。)
- 3) sich (三格) getrauen (敢えてする)  
Ich getraue mir diesen Versuch.  
(私は此試みを敢えてする。)
- 4) seiner selbst spotten (自嘲する)

Spotten Sie ihrer selber nicht!  
(自ら嘲り玉ふな!)

【註】 三人稱を主語とする文章に於ては、補足語としての代名詞と再  
版代名詞は、注意して區別しなければならぬ。

Sie spricht von ihr. (彼女は自分以外の婦人について話す。)

Sie spricht von sich. (彼女は自分の事について話す。)

即ち代名詞のときは、別人を指すものと理解してよろしいので  
ある。

12. 或動作が、多數の人の間に交互的に行はるゝことをあら  
はす代名詞を、相互代名詞 (Das reziproke Pronomen) と云ふ。  
相互代名詞は、三格・四格共に einander である。

Sie loben einander. (彼等は互にほめ合ふ。)

[loben は四格を採る。]

Sie gleichen einander. (彼等は互に似てゐる。)

[gleichen は三格を採る。]

また文意に誤解を起さざる限り、sich を相互代名詞として使  
用することもある。

Die Eheleute sind sich (=einander [三格]) treu und lieben  
sich (=einander [四格]).

(夫婦は互に誠實で、互を愛し合つてゐる。)

但し、Sie loben sich. の如き形では、「彼等が自分達をほめる」  
とも、「彼等は互にほめ合ふ」とも、兩方に取り得るから、か  
ゝる曖昧な形は、之を避けて、前の意味の時には、Sie loben sich  
selbst. とし、後の意味のときには、Sie loben (sich) einander. と  
するが良い。

【註】 einander はまた前置詞と結合することが出来る。即ち anein-  
ander, zueinander, nebeneinander, voneinander の如きもので

る: Sie gehen nebeneinander. (彼等は並んで行く)。——相互  
的の意味では、前置詞 unter, über の外は sich と結合すること  
が出来ないから、他のもの場合には是非 einander と結合さ  
せねばならぬ。例へば、Sie gehen neben sich. とは云ひ得ない  
のである、即ち nebeneinander となるのである。

13. Selbst と selber とは、名詞又は代名詞を強調する時は、  
其後に用ゐられる。但し前に置かれるときには、「すらも」の  
義を有する。

Ich selbst habe ihn gesehen. } (私自身が彼を見た。)

Ich habe selbst ihn gesehen. }

Ich werde es selbst tun. } (私自身がそれをするであらう。)

Ich selbst werde es tun. }

Er ist Ehrlichkeit selbst. (彼は正直そのものである。)

Selbst die Weisesten haben Fehler.

(最も賢明な人でも過失をする。)

## 第 二 節

### 物 主 代 名 詞

14. 物主代名詞 (Das besitzanzeigende Fürwort, das Possessiv-  
pronomen) は、所持者を示すものであるが、これには形容詞的  
のもの——即ち名詞の前に置かれるものと、名詞的のもの——  
即ち單獨に使用されるものと二つある。

(形容詞的) Das ist mein, dein, sein, unser Hund. これは私  
の、お前の、彼れの、われわれの犬である。

(名詞的) Der Hund ist mein, dein, sein, unser. 此犬は私  
の、お前の、彼れの、われらのである。

15. 形容詞的に用ゐらるゝ物主代名詞の變化は、次の如きものである。

	1. Person.		2. Person.	
Sing.	mein (my, 私の)	dein (thy, your, お前の)		
Plur.	unser (our, われらの)	euer (your, お前達の)		
	3. Person.			
	M.	F.	N.	
Sing.	sein (his, 彼れの)	ihr (her, 彼女の)	sein (its, それの)	
Plur.	ihr (their, 彼等の)			

これは單數においては、不定冠詞の如く、複數に於ては定冠詞のやうに變化することは、前に述べたが、今茲に略示して見ると：

	M.	F.	N.	Pl.
	mein	deine	sein	unf(e)re
	meines	deiner	seines	unf(e)rer
≡	meinem	deiner	seinem	unf(e)ren
	meinen	deine	sein	unf(e)re

【註】 I. 『貴君の』の意味に於ては、頭字が大きい： Ihr Vater, Ihre Mutter, Ihr Kind; Ihre Eltern 等。—又書簡中に於ては、dein は、—従つて相手が複數ならば、euer (お前たちの) は、—その頭字を大書する； Dein Vater, Eu(e)re Mutter.

II. 物主代名詞の次に eigen (=own=自身の)を入れて意味を明確ならしめることがある。

Das ist mein eig(e)ner Hund. (それは私自分の犬である。)

Das ist unf(e)re eigene Sache.

(それはわれわれ自身の事である。)

III. 物主代名詞を不用せずとも、所持者が自明なときは、之を用ゐずして、單に定冠詞を使用する。此點英語の用法と混同することがあつてはならぬ。

Er hat ein Buch in der Hand (致えて in seiner Hand とせず=〔英〕 He has a book ~~in~~ his hand.)

Was hat er in der Tasche (=〔英〕 in his pocket)?

IV. 又物主代名詞が使用されるならば、主語と同一のものをあらはすべき場合に、主語に對應する人代名詞の三格と、定冠詞を有する名詞とを使用する事がある。これは本章七項後半に説いたものとも關係がある。

Ich habe mir den Arm gebrochen. (私は私の腕を折つた。)

Er hat sich〔三格〕 das Bein verrenkt. (彼は足を脱臼させた； verrenkt は verrenken の過去分詞である。)

16. 帝王貴紳に用ゐる尊稱『陛下』(Majestät〔F.〕)、『殿下』(Hoheit〔F.〕)、『閣下』(Exzellenz〔F.〕)等の前には、對稱の時には Euer (=your) を使用し、他稱のときには、男性には Seine (=his), 女性には Ihre (=her) を附ける。後二者は正則に變化するけれど、前者は何等の語尾をつけないで使はれる事もあり、正則に語尾をつけて使用されることもある。

Euer (od. Eu(e)re) Majestät Seine (Ihre) Majestät

Euer (od. Eu(e)rer) Majestät Seiner (Ihrer) Majestät

Euer (od. Eu(e)rer) Majestät Seiner (Ihrer) Majestät

Euer (od. Eu(e)re) Majestät Seine (Ihre) Majestät

又 Euer を略して Ev. (古の Euer から)、Seine を略して E(e).; Ihre を略して F. とする。そして Majestät 自身も M. と略せられる。またかゝる名詞を主語とするときは、敬意を表して、定動詞を複數にする習慣がある。

Seine Majestät der Kaiser haben (hat の代り) befohlen.

(皇帝陛下は命令し玉ふた。)

Ihre Majestät die Königin sind (ist の代り) verreist.

(女王陛下は旅に出られた。)

17. 上に述べた mein, dein, sein, unser 等の形は、主語が男性

又は女性名詞を指示する es, dies, das 等でなくして、他の代名詞であるときは、客語としても使用される。

Dieses Buch ist mein, dein, sein, unser.

(此本は私の、おんみの、彼の、われらのものである。)

Diese Bücher sind mein, dein, sein, unser. (これらの本は私の、おんみの、彼れの、われらのものである。)

Ich bin sein, dein, euer.

(僕は彼れの、おんみの、おんみたちのものだ。)

18. 名詞的物主代名詞に三つある。

	M.	F.	N.	Pl.
i)	mein-er (mine)	mein-e	mein-es;	mein-e
ii)	der mein-e	die mein-e	das mein-e;	die mein-en
iii)	der meinig-e	die meinig-e	das meinig-e;	die meinig-en

これらはいつも名詞的に使はれて、その次ぎに名詞を取ることはない。

【註】 然るに本邦の學生は、形容詞的の物主代名詞と、これとを混同して、meiner Vater, meines Buch などと云ふから、兩者の區別を牢記して置かねばならぬ。勿論 mein Vater, mein Buch である。

今これらのものの變化について云ふと：

- i) mein-er の變化は dieser と同じ。
- ii) der mein-e 及 der meinig-e は、der が定冠詞の變化をなし、mein-e 及 meinig-e が、形容詞の弱變化をする。

	M.	F.	N.	Pl.
meiner	die meine	das meinige	die mein(ig)en	
meines	der meinen	des meinigen	der mein(ig)en	
in meinem	der meinen	dem meinigen	den mein(ig)en	
meinen	die meine	das meinige	die mein(ig)en	

【例】 Dort kommt Ihr Bruder, der meine wird auch bald kommen.

(あそこへ貴君の兄弟が来る、わたしのも亦ちきに来るだらう。)

Meine Aufgabe war leicht, aber die seinige war schwer.

(私の問題はやさしかつたが、彼れのはむづかしかつた。)

Wo ist Ihr Buch? Meines (od. Das mein(ig)e) liegt auf dem Tische. (どこに貴君の帽子はありますか? 私のは机の上にあります。)

Ihr Messer ist stumpf; bitte, schneiden Sie mit dem meinen. (貴君のナイフは鈍い; どうぞわたしのでお切りなさい。)

主語が es, dies, das で、それが男性又は女性の名詞を代表するときには、本項の物主代名詞を使用する。

Ein Hut liegt auf dem Stuhl. (帽子が椅子の上にある。)

Es ist meiner (od. der meine). (それは僕のだ。)

Wem gehört diese Feder? (此ペンは誰れのですか?)

Es ist seine (od. die seinige). (それは彼れのです。)

19. 中性の定冠詞を有し、頭字を大書したる das Meine 又は das Meinige は、前文中にこれと關係するものなくして使はれ、財産・義務を意味し; 複數に於て同様に使用されたる die Meinen, die Meinigen 等は、家族・一門・部下・友人などの意味を持つてゐる。

Ich habe das Meinige getan; tun Sie jetzt das Ihre!

(私は私のやること(義務)をしてしまった; 今度は貴君の分をおやりなさい!; getan は tun (なす) の過去分詞。)

Das Meine (=Mein Anteil) beträgt nicht viel.

(私の[持分]は多くの額ではない; beträgt は betragen 「の額となる」の三人稱單數である。)

Eind die Ihrigen immer recht wohl, Herr Kunz?  
 (あなたの御家庭はいつも御元氣ですか、クンツェさん?  
 recht=眞に、wohl=健康で。)

20. 二個以上の名詞が、同一の人又は物をあらはすときには、物主代名詞は初めのもの前にのみ附せらるゝけれど、異なるものをあらはすときには、一々之を繰り返へすべきである(定冠詞も同様である)。

Mein Freund und Nachbar (私の友人にして隣人たるもの)。

Mein Freund und mein Nachbar (私の友人及私の隣人)。

【註】 I. 定冠詞も同一で、der Freund und Nachbar meines Onkels と der Freund und der Nachbar meines Onkels とはちがつた意味を示し、前者は一人であるのに対して、後者は二人である。

II. 性・数のおなじものが、單に列擧されてゐて、しかも誤解の恐れのないときには、初めのものだけに物主代名詞をつける。

Sein Vater, Bruder und Vetter sind verreist.

(彼の父、兄弟は及び従兄弟は旅に立つた。)

これは定冠詞でも同様である。

Die Mutter und Tochter sind verreist.

III. 性・数が異なるときは、物主代名詞は繰返へされる。

• Mein Vater und meine Schwester (私の父と私の姉妹)。

Sein Onkel und seine Nichten (彼の叔父と彼の姪たち)。

冠詞の場合も同様である: der Onkel und die Töchter meines Nachbarn.

21. 物主代名詞の使用についての細則は、なほ次のとおりである。

i) 形容詞的に使用された物主代名詞の前に、不定數詞 aller (男)、alle (女)、alles (中); alle (複) が來るときは、各独自の變化する。

M.		F.
aller mein Reichthum		alle meine Liebe
alles meines Reichthums		aller meiner Liebe
allem meinem Reichthum		aller meiner Liebe
allen meinen Reichthum		alle meine Liebe

M.		F.
alles mein Geld		alle meine Bücher
alles meines Geldes		aller meiner Bücher
allem meinem Geld		allen meinen Büchern
alles mein Geld		alle meine Bücher

【註】 上掲の變化は文法的には正確なれど、現今はほとんど用ゐられないで、all- の語尾なき形; all mein Reichthum, all meines Reichthums, all meinem Reichthum..... の如き形が愛用されてゐる。

ii) 「あなたの御令嬢」「あなたの御令閨」などと敬意を拂つて云ふときには、物主代名詞との間に、Herr (男)、Frau (女)、Fräulein (嬢) 等を入れる。然しこれは、單に挿入されたもので、物主代名詞の支配を受けない。

御 令 閨	御 令 嬢
Ihre Frau Gemahlin	Ihre Fräulein Tochter
御 尊 父 様	御 令 息
Ihr Herr Vater	Ihr Herr Sohn
御 母 堂 様	御 主 人 様
Ihre Frau Mutter	Ihr Herr Gemahl

【註】 夫を Gemahl [M.] と云ひ、妻を Gemahlin [F.] と云ふ。最後の御主人とは、或婦人に向つて其夫を云つたものである。又此物主代名詞が、次に來る名詞に影響すると考へて、Ihr Fräulein Tochter とする人が多いが、これは間違で、Ihre Frau Mutter



などを見ても、意味上 Ihre なる物主代名詞が Mutter に直接的の關係を有することがわかる。[變化] Ihr Herr Gemahl, Ihres Herrn Gemahls, Ihrem, Ihren Herrn Gemahl.

### 第三節

#### 指示代名詞

22. 指示代名詞 (das hinweisende Föhrwort, das Demonstrativpronomen) は次の通りである。

M.	F.	N.	P.
1. der'	die'	das'	; die'
2. dieser	diese	dieses	; diese
3. jener	jene	jenes	; jene
4. solcher	solche	solches	; solche
5. derje'nige	dieje'nige	dasje'nige	; dieje'nigen
6. derse'lbe	diese'lbe	dasje'lbe	; diese'lben

[A] der, die, das; die

23. これらが名詞の前におかるゝときは、發音を強くして定冠詞と區別するのであるが、印刷の場合には、文字と文字との間を少しあける事が多い。

Der Mann ist zuverlässig; dem gehört mein Vertrauen.  
(此人は信用がおける; 私の信任は此人に屬してゐる。)

24. その變化は單數複數の二格及び複數の三格に於て、定冠詞と異なるだけである。

	S.		P.
der,	die,	das,	; die
dessen,	deren,	deffien,	; derer od. deren
dem,	der,	dem	; denen
den,	die,	das	; die

【註】二格の dessen の略 des; deren の略 der は古く用ゐられ、今でも詩などに用ゐられる。deswegen や deshalb の des は此 deffen の縮形である。又 *Wes (=wessen=whose) Brot ich eß, des (=deffen) Lied ich sing!* (私に食はせて呉れる人の歌を私はうたふ) の如き薩などにも、あらはれてゐる。然し普通には長い形 dessen, deren を使用することになつてゐる。

25. 指示代名詞の一格は上に掲げたやうに、形容詞的に使用することも出来るし、名詞的に使ふことも出来る。

*Der ist der Schuldige.* (それが責任(有罪)者である。)

指示代名詞 der 及 dieser は文意の曖昧を避くる必要ある時は、人代名詞の代りに使用せらる。此際人代名詞が前文の主語を受けるのに對して、指示代名詞は、主語以外のものを受ける事になる。

*Paul traf seinen Onkel.* (パウルがその叔父に會つた。)

{ *Er (=Paul) fragte ihn.* (彼[=パウル]は叔父に訊れた。)  
*Der (od. Dieser) (=sein Onkel) fragte ihn.*  
(このもの[=叔父]は彼[パウル]に訊れた。)

*Mein Bruder ist zu seinem Freunde gegangen.*

(私の兄弟は彼の友人のところへ行つた。)

{ *Er wird ohne ihn den Kauf nicht abschließen.*

(彼[=兄弟]は友人なしに、賣買の契約はしないであらう。)

{ *Der (od. Dieser) (=sein Freund) wird ohne ihn den Kauf nicht abschließen.* (彼の友人は私の兄弟なしには、賣買の契約をしないであらう。)

【註】 der, die, das が und によつて重ねて用ゐらるるときは、『これこれ』『しかじか』の義をあらはす。

Der und der Mann wird Ihnen das und das sagen.  
(これこれの男があなたにしかじかの事を云ふでせう。)

26. 指示代名詞の二格は、人代名詞の二格の代りに使はれることがある。この際、人代名詞が前文の人を受けるのに對して、指示代名詞は物をうけるのである。

Erinnerst du dich dieses Malers? Ja, ich erinnere mich seiner. (君は此畫家を記憶してゐるか? うん、僕は覚えてるよ。)(再歸動詞 sich erinnern は、二格の補足語を取る。)  
Hier hast du dein Geld; ich bedarf dessen nicht. (ここに君の金があるよ[これをやるよ];僕はそれを要しない。)(bedarf は bedürfen の一人稱單數で、二格の補足語を要する。)

27. 形容詞的に用ゐらるる指示代名詞が、物主代名詞の代りに用ゐられる事があるが、これは文意の曖昧を防ぐ必要のある時だけであつて、文意明瞭の場合には、この用法をなさない方がよろしい。

Dein Freund kam mit seinem Vater und dessen Bruder (= dem Bruder seines Vaters) zu mir. (君の友人は彼の父と父の兄弟と共に僕のところへ來た。)

Dein Freund kam mit seinem Vater und seinem Bruder (= dem Bruder deines Freundes) zu mir. (君の友人は彼の父及彼れの兄弟と共に、僕のところへ來た。)

Er ging zu Dr. Zimmermann. (彼は Dr. Zimmermann の所へ行つた。)

{ Denn sein Sohn war krank. (自分の息子が病氣だつたから。)  
{ Denn dessen Sohn war krank. (ドクトルの息子が病氣だつたから。)

【註】 denn (と云ふわけは) は接續詞であるが、これは次の文章の語次に影響しない。尤も副詞にも denn (一體) と云ふ字があるから注意を要する。

28. 複數の二格には、二つ形があるが、derer は後に關係文章 (Relativsatz [Rr.]) が續く時に於てのみ使用される。

【註】 關係代名詞 (例へば welcher [which], der [which] 等) を以て前文につゞく文章を、關係文章と云ふ。これは副詞的文章 Neben-satz [Rr.] の一つで、定動詞は文末に來る。關係代名詞については、後章に述べる。

Das ist die Art und Weise derer, die keine Rücksicht nehmen. (それは遠慮しない人たちのやり方である; Art und Weise = 方法。)(die から nehmen までが關係文章である。)  
Groß war die Freude derer, die ihn liebten.

(彼を愛したる人々の喜びは大きかつた。)

Wir gedenken derer gern, welche uns Gutes getan haben. (われわれは、われわれに親切をつくして呉れた人々を喜んで思ひ出す; gedenken は二格の補足語を要求する。)

Deren は前に云はれたるものみに關係する。

Er hat fünf Schwestern, ich habe deren drei.

(あの人は五人姉妹を持つてゐる、私はそれを三人持つてゐる。)

Brauchen Sie Briefluberts? Ich habe deren noch viele.

(貴君は封筒が要りますか? 僕はそれをまだ澤山持つてゐます。)(Lubert [Rr.] は Luver と讀む、フランス語から來たもので、複數にては die Luberts となり、又は Luberte となる。)

【註】 指示代名詞はすべて關係文章の前行詞たることが出来る。看す

換へると、自らに従属する關係文章を後續せしむる事が出来る。

Wir verachten den, der seine Freunde im Stich läßt.

(われらは友人を見すてる (=im Stich lassen) 人を輕蔑する。)

29. 指示代名詞 *das* は、性と數とに關係なく、或ものを指示することを得。この際定動詞の數は、客語名詞によるのである。

Das ist ein Stuhl (eine Bank (ベンチ), ein Buch).

Das sind meine Kinder.

【註】 *Es* 及 *dies* にも同様に取扱はれる。

[B]  $\left\{ \begin{array}{l} \text{dieser diese dieses; diese} \\ \text{jener jene jenes; jene} \end{array} \right.$

30. 二つとも名詞的にも形容詞的にも使用される。變化は定冠詞のやうであることは、前に述べた。前者は近稱で、後者は遠稱である。

*Dieser* (形容詞的) *Gasthof* ist nicht besser als *jener* (名詞的).

(此旅館はあの旅館より上等ではない。)

*Fritz* und *Wilhelm* sind Freunde; *dieser* (近稱) ist zehn und

*jener* (遠稱) elf Jahre alt. (フリッツとヴィルヘルムは友人だ、後者は十歳で、前者は十一歳である。)

31. 中性單數の形 *dieses*, *jenes* 及 *dies* は、性・數・格に關係なく、客語名詞の主語として用ゐられることは、29 項に述べたる *das* と同じである。但しこれは客語名詞が後續するときのみ限る事を記憶して置かねばならない。

*Dies* ist mein Sohn; *dies* ist meine Tochter.

*Das* ist mein Vetter (従兄弟) *Wilhelm*; *jenes* ist mein Neffe (甥) *Paul*.

*Ich* habe viele Blumen; *dies* sind Veilchen, *jenes* sind Schne-

*glöckchen*. (私は澤山花を持つてゐる; これは蓮で、あれは松雪草です。)

然し: *Ich* habe viele Blumen; *diese* riechen sehr schön, *jene* sind ohne Duft. (私は澤山花を持つてゐます; これらは大層よくにほひますが、あれの方は、匂がありません。)

32. 指示代名詞 *das*, *dieses*, *jenes* が三格又は四格を支配する前置詞と結合すべき場合には、それらの前置詞と *da* 又は *hier* が結合するのが、通常である。

*Daran* (an *das* の代り) habe ich nicht gedacht.

(それは僕は考へてなかつた。)

*Darüber* (über *das* の代り) habe ich nichts gesagt.

(それについて僕は一語も云はなかつた。)

【註】 *Dieser* が人代名詞として使用されることについては、25 項に既に述べた。

[C]  $\left\{ \begin{array}{l} \text{solcher, solche, solches; solche} \end{array} \right.$

33. 他と比較して或一定の種類を示すものであるが、これはいろいろに使用される。

i) 名詞の前にそれのみが使用されるときには、定冠詞のやうに變化する:

*solcher* Mann, *solche* Frau, *solches* Kind; *solche* Leute

*solches* Mannes, *solcher* Frau, *solches* Kindes; *solcher* Leute

*so* dem Manne, *solcher* Frau, *solchem* Kind; *solchen* Leuten

*solchen* Mann, *solche* Frau, *solches* Kind; *solche* Leute

ii) 不定冠詞がその前に來るときには、形容詞の混合變化に準じて取扱はれる。

ein solcher Mann eine solche Frau ein solches Kind  
 eines solchen Mannes einer solchen Frau eines solchen Kindes  
 einem solchen Manne einer solchen Frau einem solchen Kinde  
 einen solchen Mann eine solche Frau ein solches Kind

【註】 ein の複数はないから、上記のもの複数形は、i) の場合の複数形と同一になる語である。

iii) 不定冠詞が *solch* の後に來るときは、*solch* には語尾をつけない。従つて不定冠詞は、自分自身の規則に従つて變化する：*solch ein Mann, solch eine Frau, solch ein Kind.*

【註】 此場合 *solch* の代りに、*so* が使用されることがある：*so ein Mann, so eine Frau, so ein Kind.*

iv) 上掲の場合の名詞を略して、*solch einer, solch eine, solch eins* として用ゐられることもある。

【註】 こゝにも iii) の註と對應した用法がある：*so einer, so eine, so eins* がそれである。

v) 上掲 iii) の不定冠詞は、形容詞が名詞の前に來るとき、消失することがある。

*solch starker Mann solch gute Frau*  
*solch artiges (おとなしい) Kind*  
*solch faule (なまけな) Menschen*

[D] *derjenige, diejenige, dasjenige; diejenigen*

34. これは指示代名詞 *der, die, das; die* に重味をつけた意味で、指示の意が強いのであるが、形の重々しいだけに、今ではあまり用ゐられないで、その代りに *der, die, das* の方が使はれる。——これは主として關係文章を後續せしめる時に使ふもの

であるが、此場合名詞的にも、形容詞的にも使用される。變化は前章、即ち *der, die, das; die* は定冠詞の變化により、後部即ち *jenig* は、形容詞の弱變化に依る。

(男)	(女)	(中)	(複)
<i>derjenige</i>	<i>diejenige</i>	<i>dasjenige</i>	<i>diejenigen</i>
<i>desjenigen</i>	<i>derjenigen</i>	<i>desjenigen</i>	<i>derjenigen</i>
<i>demjenigen</i>	<i>derjenigen</i>	<i>demjenigen</i>	<i>denjenigen</i>
<i>denjenigen</i>	<i>diejenige</i>	<i>dasjenige</i>	<i>diejenigen</i>

*Diejenigen, welche Geld haben, sind mächtig.*

(金錢を有するものは有力也；名詞的用法で、*welche..... haben* は關係文章である。)

*Derjenige Schüler, welcher fleißig ist, wird ein Buch bekommen.* (勤勉な生徒は本をもらうであらう；形容詞的用法で、*welcher* 以下は關係文章である。)

*Ich verkaufe meine Bücher und diejenigen meines Bruders.* (私は私の本と私の兄弟のものを賣ります；名詞的用法；關係文章はない。)

【註】 *derjenige* 等の代りに、指示代名詞 *der* 等を使用すれば、例の一は *der, welcher.....* となり、二は *der Schüler, welcher.....* となり、三は *die* となる。それだけでも充分である。

[E] *derselbe, dieselbe, dasselbe; dieselben.*

35. これは定冠詞に、*selb-* が結びついた形で、『同一のもの』『そのもの』の義を有し、前部は定冠詞通りに、後部は形容詞の弱變化の規則に従つて取扱はれる。そして形容詞的にも名詞的にも使はれる。

*Er ist derselbe (Herr), den ich gestern hier traf.*  
 (彼は私が昨日こゝで會つたのと同じ紳士だ。)

Er las dasſelbe Buch wie ich. (彼は私と同じ本をよんだ。)

36. 此指示代名詞は、人代名詞の代りに使用されることがある。此際はずねに獨立して(即ち名詞的に)使用せられ、強く發音されることはない。これは意味をはつきりさせるため、又は口調のよくなるために使用されるのだと云はれてゐるが、それらの目的のためには、dieser を使用した方が正しい。又何等の必要もないときには、人代名詞 er, sie, es の方を使用するのが正當である。

Ich habe ein Buch gekauft und dasſelbe (=das Buch) meinem Bruder geſchenkt. (私は一冊の本を買ひ、それを私の兄弟に贈つた; 此 dasſelbe は es にする方が正しい、dasſelbe にする必要又は理由はない。)

【註】 但し Ich habe dasſelbe Buch auch meinem Bruder geſchenkt. は別義で、「私は同一の本を私の兄弟に贈つた」の義、本當の意味の指示代名詞である。

Ich habe dem Knaben einen elektriſchen Wagen gegeben; lehren Sie ihn (=den Knaben) denſelben (=den elektriſchen Wagen) zu gebrauchen. (私は男の兒に電車を呉れました; あなたはそれを使用すべく彼に教へて下さい; lehren は二個の四格を要求するから、共に人代名詞を使用すれば、lehren Sie ihn ihn zu gebrauchen となる; これでは口調の上からも面白くないから、denſelben としたのであらうが、これは敢えて denſelben としなくとも、dieser で充分であり、又その方が本來の性質上正當である; lehren Sie ihn [=den Knaben] dieſen zu gebrauchen.)

【註】 I. derſelbe の前に前置詞が來るときは、der- の部分が ſelb- の部分とわかれて、まづ前置詞と結合してしまふ事もある;

am ſelben Morgen=an demſelben Morgen.

zur ſelben Zeit=zu derſelben Zeit.

II. 指示の意味をつよめるがため、これらの代名詞の前に eben (just 丁度) をつけることがあり、そしてこれは折々連記される: eben derſelbe od. ebenderſelbe.—又變化なき ein と und とを前に添へることもある: ein und derſelbe Weg (同じ道); einundderſelbe Weg; ein und deſſelben Weges; einunddeſſelben Weges.

III. ſelb に後綴 ig が附けられて、ſelbig- の形となつて使はれることもある: derſelbige, dieſelbige, dasſelbige; die ſelbigen. 中性を daſſelbige と書いてはならぬ。

### 〔F〕 其他の指示代名詞

37. その他 derſelbe の意味にて、やゝ力強く云ひあらはすものに、der nämliche がある。これは定冠詞と、形容詞 nämlich から成るもので、普通の規則によつて變化する。

Das iſt der nämliche Herr, den ich geſtern hier traf.

又「その一方」「他方」を云ひあらはすものに、der eine (die eine, das eine; die einen).....der andere (die andere, das andere; die anderen) がある。これは der nämliche などと同じく、der は定冠詞通りに、ein- 及 ander- は形容詞通りに使用される。そして形容詞的にも名詞的にも用ゐられる。

Der eine Mann iſt Schneider und der andere Zimmermann.

(其一方は裁縫師で、他は大工である。)

Sie einen denken dieſ, die anderen daſ.

(一方の人々はかく考へ、他はかう考へる。)

【註】 der eine.....der andere は考へ方によつて、不定代名詞の部にに入れられる。

### 第 四 節

#### 關 係 代 名 詞

38. 關係代名詞 (das bezügliche Fürwort, das Relativpronomen) については、既に二三の例を上げたが、これには三種がある。

	M.	F.	N.	
i)	der,	die,	das	} who, that, which
ii)	welcher,	welche,	welches	
iii)	{wer was			he, who, who that, which, what

これらに導かるゝ文章は、みな關係文章 (Relativsatz [2R.]) と云はれ、定動詞は最後に來る [貶置法]。

Der Schüler, der fleißig ist, wird ein Buch bekommen.

(勤勉なる生徒は、一冊の本をもらふであらう。)

Dies ist die Feder, welche ich zum Schreiben benutze.

(これは私が書くために用ゐるペンです。)

Wer zuletzt lacht, lacht am besten.

(最後に笑ふ人は、最もよく笑ふ; am besten はこゝでは、副詞の働きをしてゐる)。

[A] { der, die, das; die  
welcher, welche, welches; welche

39. 關係代名詞としての der, die, das; die は、單數・複數の二格及複數の三格に於て、定冠詞の變化と異なるだけである。

M.	F.	N.	F.
der	die	das	; die
dessen (des)	deren (der)	dessen (des)	; deren (der)
dem	der	dem	; denen
den	die	das	; die

【註】二格に於ては、括弧外に立つてゐる方が正則であるけれど、時に括弧内の形も使はれる。

41. 又 welcher, welche, welches; welche は、普通の場合その二格の形 welches, welche, welches; welche を用ゐないで、der の二格形を充用する。

welcher	welche	welches		welche
dessen	deren	dessen	;	deren
welchem	welcher	welchem	;	welchen
welchen	welche	welches	;	welche

42. 關係代名詞は前行文中における關係する詞(これを前行詞と名づけておく)と、性及數に於て一致することを要するけれど、格は關係文章の内部に於ける關係できまる。それから關係代名詞に先んじ得るものは、前置詞だけであつて、この點英語とちがふから、特に注意するを要する。——又 der と welcher とは、そのあらはす意味が全く同一だから、長たらしい welcher などは、なるべく避けるがよいとなすのが、今の流行である。

[一格] Das Kind, das (od. welches) nicht gehorcht, betrübt seine Eltern.

(云ふ事をきかない小供は、両親をかなしませる)。

[二格] Der Vater, dessen\* Kinder krank sind, ist unglücklich.

(その人の子供たちが病氣であるところの父は、不仕合である)。

【三格】 Das Kind, dem (od. welchem) ich ein Buch gab, war fleißig.  
(私が一冊の本をくれてやつた子供は勉強であつた。)

【四格】 Das Kind, das (od. welches) wir eben gesehen haben, ist  
der Sohn des Grafen.  
(われらが丁度今見た子供は、伯爵の子息である。)

【註】 上掲二格の関係代名詞は、名詞の前に附けられてゐるが、單獨に  
用ゐられ得ることも勿論である。

Die Violine, deren (女・二) er sich bedient hat, stammt aus  
Italien. (彼が使用したヴァイオリンは伊多利出来である; sich  
bedienen と云ふ再歸動詞は、二格の補足語を取ることになつ  
てゐる。)

Der Maler, dessen (男・二) Sie erwähnten, ist gestorben.  
(貴君が語した畫家は死にました; erwähnen は二格の補足語  
を探る。)

【前置詞を探るもの】 Wie heißt der Berg, auf dessen Spitze  
(=.....the mountain on the summit of which.....) das  
Schloß steht? (その頂に館が立つてゐるあの山は何と云ひ  
ますか?)

Das Geld ist der einzige Gott, an den (od. an welchem) er  
immer geglaubt hat. (彼が常にそれを信仰してゐたところ  
の唯一の神は金銭である。)

43. Der と welcher とは、上述の如く、全く同義であるから、  
互に置き換え得べき筈であるが、その行はれがたい場合が二  
つある。

a) Der でなければならないのは、関係代名詞の関係するもの  
(前行詞)が、人代名詞なる場合で、此際その人代名詞を関係  
代名詞の後に於て繰り返すかどうかは、話者の自由である  
が、たゞ注意すべきのは、人代名詞を繰り返へしたときは、

定動詞はこのもの人稱數により、繰り返へさざるときは、  
関係代名詞のそれに依ることである。

Ich, der ich dein wahrer Freund bin,.....

Ich, der dein wahrer Freund ist,.....

(君のまことの友人たる僕が、.....)。

Wir, die wir im Februar und März in Italien waren,.....

(二月と三月に、伊太利に居た我々は、.....)。

Sie, der Sie mir früher geholfen haben,.....

(以前に私を助けて下さつたあなたが、.....)。

Du, der du einst König sein wirst,.....

Du, der einst König sein wird,.....

(いつかは王者であるであらうところのおんみが、.....)。

【註】 此方法は三人稱の單數及其の純然たる複數 (Sie=You は別であ  
る) に於ては、適用されないことになつてゐる。

b) 関係代名詞が、同格の名詞に關係すべき場合に、此名詞を  
關係文章中に入れ、welcher (der にあらず) を形容詞的に該  
名詞の前に置くことがある。この時は welcher, welche, welches  
の二格、welches, welcher, welches が使用される。例へば Goe-  
the, der Dichter, dessen Werke Sie mir oft empfohlen haben, (貴  
君がたびたびその著作を私に 推奨した大詩人ゲーテ、) に於  
て、der Dichter は Goethe の同格名詞であることは勿論であ  
るが、此名詞を關係文章中に入れ、その前に關係代名詞をつ  
けると、Goethe, welches Dichters Werke Sie mir oft empfohlen  
haben となり、同格はなくなるのである。この場合 Goethe,  
dessen Dichters Werke..... とは云はない。他の二三の例をあ  
げると、

Luther raub in Eisleben, in welcher Stadt (=in Eisleben, der

Stadt, in welcher) er auch geboren war. (ルテルはそこで彼がまた生れたところの町なるアイスレーベンで死去した。)  
 Er besuchte mich an meinem Geburtstag, bei welcher Gelegenheit (=an meinem Geburtstag, einer Gelegenheit, bei welcher) er sich verabschied. (彼は私の誕生日に私をおとづれた、その機会に彼は暇乞をしたのであつた。)

【註】 I. 定冠詞の *der* と関係代名詞の *welcher* が重複するときは、口調の関係上、関係代名詞を *welcher* にする事がある。

Das ist der Tag, (*der* の代りに) *welcher* der Erinnerung an Goethe gewidmet. (それはゲエテに對する記念に捧げられてある(記念すべき)日である; widmen 捧げる。)

II. いくつかの関係代名詞を使用するとき、意味を明瞭ならしむるために、同一の前行詞に關する関係代名詞は、同一形を用ひ、異なる前行詞に關する関係代名詞は、それとは別なものとすることがある。例へば *da* なる前行詞に屬するものは、徹頭徹尾 *der* で行き、*wo* なる前行詞に屬するものは、*welcher* で行くが如き事である。

1. Ein Bedienter, *der* lange einem Herrn gedient hat, (und) *der* sich keiner Arbeit scheut, sucht anderweit ein Unterkommen. (永く或紳士に仕へてゐて仕事をいやがらなかつたところの一人の召使が、ほかで口をさがしてゐる。)
2. Ein Bedienter, *der* lange einem Herrn gedient hat, *welcher* aber gestorben ist, sucht anderweit ein Unterkommen. (永く或紳士に仕へてゐたが、然しその紳士に死なれたところの一人の召使が、ほかで口をさがしてゐる。)
3. Ein Bedienter, *der* lange einer Herrschaft gedient hat, *die* (od. *welche*) aber nach Amerika ausgewandert ist, sucht anderweit ein Unterkommen.

(永く或主人に仕へたが、その主人は亞米利加に移住したところの一人の召使は、ほかで口をさがしてゐる; Herrschaft は主人たるべき男女の人々を總稱である。)

第一例に於ては、二つの *der* が共に ein Bedienter に關し、第二例に於ては、*der* は ein Bedienter に、*welcher* は einem Herr に關してゐる。然し第三例では、名詞の性がちがふから、Herrschaft は *die* でうけても、*welche* でうけてもよろしい。

44. いくつかの関係代名詞が、同一の名詞に關係するときでも、格を異にする場合には、必らず関係代名詞を繰り返へさなければならぬ。

Die unglücklichen Leute, denen ich nicht helfen, *die* ich nicht erquiden konnte (could), ..... (私がそれを助けることもそれを慰安することも出来なかつたところの不幸な人々; helfen は三格、erquiden は四格を要求する)。

【註】 但し二格は必らずこれを反覆する。

Ein Buch, dessen Verfasser mein Bekannter ist, dessen Inhalt sehr lehrreich sein soll, ..... (その著者は私の友人であり、その内容は大層教訓に富んでゐるといふ噂の本; soll は sollen の三人稱單數; こゝでは『と云ふ話だ』『である由』の義。)

45. 関係代名詞が無生物に關係し、且つ三格又は四格の前置詞によりて支配されるときは、*wo-* と其前置詞とを結合したる形を、代用する。但し前置詞が母音を以て初まる時、*wo-* は *wor-* となる。

Das Buch, in welchem (=worin) ich lese, gehört meinem Freunde.

(それを私が讀んでゐる本は、彼の友人のものです。)

Mein Freund hat viele Bücher, unter denen (=worunter)



auch gute englische sind. (私の友人は多くの本を持つてゐる、そのなかにはまた良い英書もある。)

Du redest von den Dingen, nach denen (=wonach) ich nicht gefragt habe. (君は僕が訊ねなかつた事について話す。)

Das Haus, in welches (=worein) der Blitz geschlagen hat, gehört meiner Tante.

(雷がおちた家は、私の叔母のものである。)

【註】 I. worin と worein との區別は、上例 1. と 4. とを見れば、明瞭であらう。(worin=in which; worein=into which).

II. 人については、此用法は勿論不可である。

Herr Professor D., von dem (wovon にあらず) ich Ihnen erzählte, ist gestern gestorben. (私が貴君に其人のお話しをした D. 教授は昨日死去しました。)

III. 關係文章の初めに置かれる von wo と、wovon とは別語である。前者は「そのところ・その場所から」の義で、後者は「それについて」「そのうちの」「それで以て」等の意味である。前者は、das Dorf, von wo ich gekommen bin,…… (そこから私がやつて来た村) などの如く、純粹に場所的の意味に使用せられ、後者は die Dinge, wovon ich Ihnen gesagt habe,…… (それについて私が貴君に云つたことのある事柄) とか、der Reis, wovon wir leben,…… (それを食べてわれらが生活するところの米) とか云ふ時に使用されるのである。

46. 時と處とに關係する關係代名詞の代りに、wo だけが使用される事がある。

Kennt du das Land, wo (=in dem) die Zitronen blühen?  
(レモンの花さく國をおんみは知れりや?)

Schreiben Sie hier das Jahr, wo (in welchem) Napoleon starb! (ナポレオンが死んだ年をここへお書きなさい!)

【註】 wo の代りに da を用ゐたり、jo を使つたりすることがあるが、これは古い。

Das geschah (happend) zur Zeit, da (=wo) ich noch ein Schüler war. (それは僕がまだ生徒であつたときに起つた。)

Hilf denen, jo (=die, welche) in Not und Elend leben.  
(困難や、幸のうちに生活せる人たちを助けよ; hilf は helfen の命令法。)

[B] wer, was

47. Wer (who, whoever), was (that which, what) の變化は下の通りである。

wer	was
wessen (wess)	wessen (wess)
wem	—
wen	was

48. Wer は人にも關係して使用され、いつも文頭に立ち、前行詞を取ることがない。之に對して主文章の初めに、der を置いて受ける。此 der は wer が一格で、der も一格の時に限り、der を略することが出来るけれど、其他の場合では、かゝる省略は不可能である。

Wer nicht hören will, (der) muß fühlen.

Who is not willing to hear, (he) must feel.

(云ふことを聞かうと思はぬものは、感じなければならぬ; 云ふことを聞かうとしない奴は、いたい目に合はねばならない; will は wollen (欲する) の三人稱單數; muß は müssen (ねばならぬ) の三人稱單數。)

Wessen Brot ich esse, dessen Lied sing' ich.

(その人のパンを食べれば、その人の歌を私はうたふ。)

Wer glücklich ist, dem ist alles schön.

(幸福な人には、すべてが美しい。)

Den der Gute liebt, den haßt der Böse.

(善人が愛する人を、悪人は憎む。)

【註】 wer は上の英語が示すとおり、「云々するところの人」の義で、  
義きにあげた〔男〕derjenige, der (od. welcher),〔女〕diejenige,  
die (od. welche) の代りなすものである。即ち、

Wer unrecht hat, soll sich entschuldigen=Derjenige, welcher  
unrecht hat, soll sich entschuldigen. (間違つてゐる人は、謝  
罪しなければならぬ; soll は sollen (shall, ought to) の三人  
稱單數; unrecht haben=to be wrong).

此故に wer に、前行詞のつくわけがない。然るに我邦の學生  
は極めて屢此禁を犯すのである。例へば der Mann, wer reich  
ist (「富める人」のつもり)とか、die Frau, wen ich sah (「私  
の見た婦人」のつもり)などと平氣でかいて居るが、これは絶対に  
やめなければならぬ。即ち der Mann, der reich ist; die  
Frau, die (od. welche) ich sah. とすべきである。これは特に注  
意して置く。

49. Was は事物に關係して使用され、名詞を前行詞として  
採ることはない。was を有する文章が前行するとき、主文の  
初めに指示代名詞 was をおいて之をうける。此 was は、was  
と das との格が異ならざる限り、省略され得る。

Was ich habe, (das) gebe ich gern.

(Whatever I have, (that) I gladly give.)

(私の持つてゐるものはなんでもよろこんで與へる。)

Was mir unangenehm ist, dessen erinnere ich mich nicht lange.

(私は不愉快なものは、ながく覚えては居ない。)

Was mir unrecht scheint, dem versage ich meine Beistimmung.

2. 2. 2. 2. 2.

(私に不正に見えるものには、私は賛成しない。)

50. 其他 was には、次のやうな用法がある。

A) 中性の代名詞 das, dasjenige; 不定代名詞 etwas, nichts;  
不定數詞 alles, manches 等を前行詞として採ることがある。

Der Dieb hat alles gestohlen, was er gefunden hat.

(盜賊は自分が見つけ出したすべてのものを盗んだ。)

Er sah nichts, was um ihn vorging.

(彼は自分の周りに起つたことは、何にも見なかつた。)

Es handelt sich nicht um das, wessen du bedarfst.

(それは君の要するものに關係はない; bedürfen は二格の

補足語を採る; bedarf は bedürfen の二人稱單數である;

es handelt sich um.....=the question is.....; 問題は.....に關

する、云々が問題である。

B) 名詞的に用ゐた中性の形容詞も、was の前行詞たる事  
が出来る。

Das ist das Beste, was ich habe.

(それは私の持つてゐるなかで、一番上等のものだ。)

Er verlor das Liebste, was er besaß.

(彼は所有したものの中で最も愛するものを失つた。)

C) 前行文章の意味を受けることがある。

Er bat mich zu schreiben, was ich auch tat.

(彼は書いて呉れるやうに私にたのんだ、それを私は實際  
またしてやつた。)

Der Lehrer hat die Arbeit des Schülers gelobt, was den-

selben zu noch größerem Fleiß anspornte. (先生は生徒の作

品をほめた、この事は一層大なる勉強するやうに生徒を鼓

舞した。)

111

【註】我邦の學生によく見る過誤は、*der Mann, wer.....* と同じく、*das Haus, was.....* と云ふやうな用法である。これは心して避けるがよい。必ず *das Haus, das* 又は *welches.....* としななければならない。

51. *Was* が三格・四格の前置詞を探るべき場合には、*wo-* と其前置詞とを結合したる形を使用する。前置詞が母音を以て初まるときは、*wo-* は *wor-* となる。

*Er sagte mir etwas, worüber (über was の義) ich sehr erstaunt war.* (彼は僕に或事を云つた、私はそれについて大層おどろいた。)

*Er sagte mir etwas, wovon ich keine Ahnung hatte.*  
(彼は私が少しも豫知しなかつた或事柄を私に話した。)

*Er schrieb einen interessanten Roman, wodurch er viel Geld verdiente.* (彼は或面白い小説をかいた、この事で彼は澤山の金銭を儲けた; *wodurch* は *durch was* の義で、此 *was* は前文章の意味をうける。)

52. *Wer, was* で初まる文章に *auch, immer* 又は *auch immer* を入れて、意味をずつと一般化することがある。

*Sie ist jedenfalls hübsch, wer sie auch sein mag.*  
(She is pretty at any rate, whoever she may be.)

(彼女はどんな人間であらうと、兎に角美しい。)

*Was er auch (immer) sagen mag,.....*

(Whatever he may say,.....)

(彼が何を云はうとも、.....。)

53. 関係文章は、主文章の前にも、後ろにも、中間にも位置することが出来る。

*Wer Fleisch kauft, muß (must) die Knochen auch bezahlen*  
(肉を買ふものは、骨の代も拂はねばならぬ。)[前]

*Die Sonne, die den König bescheint, wärmt auch den Bettler.*

(王者をてらす太陽は、また乞食をもあたためる。)[中]

*Glaube nicht alles, was du hörst.*

(おんみの耳にする事をすつかりは信するな; *glaube* は *glauben* の命令法。)[後]

一般の原則としては、関係文章は、その関係する前行詞に出来得るだけ、近く置くことである。これは誤解を避けるのに、最もよい方法である。

*Der Admiral ist von der Elbmündung, wo die amerikanische Kriegsschiffe Anker geworfen haben, in Berlin eingetroffen.* (提督は、アメリカの軍艦が投錨したエルベ河口から、伯林へやつて来た。)

此場合 *wo* を *in Berlin eingetroffen* の後に置くときは、文法的には *Berlin* にもかゝり得るから、上文の如く、自らの附屬するものに近づけられなければならない。

54. 主語 *es* に関係する関係文章には、客語の人稱・數に應ずる関係文章を使用し、客語 *es* に関係する関係文章には、主語の人稱數に應ずる関係代名詞を使用する。これは邦人のよくつまづくところだから、注意を要する。

*Es ist mein Kind, das jetzt im nächsten Zimmer schläft.*

(今次の部屋に眠つてゐるのは、私の子供です。)

*Ich war es nicht, der gestern im nächsten Zimmer schlief.*

(昨日次の部屋で眠つたのは、僕ではなかつた。)

### 第五節

#### 疑問代名詞

55. 疑問代名詞 (das fragende Fürwort, das Interrogativpronomen) に三つある。

- i) wer (who); was (what).
- ii) welcher, welche, welches; welche (which).
- iii) was für ein (eine, ein) what kind of.

[A] wer; was

56. Wer は人や動物に就いて用ゐられ、was は物に關係して使用される。Wer や was の變化は、關係代名詞のそれと同じである。

[一格] Wer ist gestern im Theater gewesen?  
(誰れが昨日劇場に居たか?)

[二格] Wessen Kinder spielen dort?  
(だれの子供たちがそこで遊んでゐるか?)

[三格] Wem gehört das Buch?  
(だれに此本は屬するか?)

[四格] Wen habt ihr getadelt?  
(だれをおんみらは非難したか?)

[一格] Was ist das? (これは何ですか?)

[二格] Wessen Buch liegt dort? (誰れの本がそこにあるか?)

[四格] Was habt ihr verloren? (君たちはそこで何をなくしたか?)

【註】 I. was の三格の形はない。例へば、von was と云ふことはない。この時は wovon と云ふ。

II. wessen の二格は、was と略されることは、關係代名詞と同様である。

57. was が三格又は四格支配の前置詞と共に用ゐられるときは、wo- と當該前置詞とを結合したる形を用ゐる。前置詞が母音を以て初まるときは、wo- は wor- となる。かゝるものを疑問副詞といふ。

Woran (an was の義) denken Sie? (何を貴君は考へるか?)  
(an etwas denken = to think of something.)

Wozu dient das? (それは何の役に立つか?) (zu etwas dienen = 或事に役立つ.)

Wobon sprechen Sie? (何について貴君は話してゐますか?)

【註】 I. ohne はかゝる結合をしないで、ohne was といふ。

II. warum は weshalb 「何故に」の義で、worum は「何について」「何の廻りに」の義である。後者はまた um was と云はれる。

Warum (=Weshalb) kommt er nicht?  
(何故彼は來ないのか?)

Worum hat er dich gebeten?  
(何について彼は君にたのんだか?)

(bitten は人の四格と、um を有する補足語とを取る。)

Worum hat er das Tau geschlagen?  
(何の廻りに彼は綱を巻いたか?)

III) worin と worin との區別。前者は in が四格を支配する場合に用ゐられ、後者は in が三格を支配する時に使用される。

Worin hat er den Wein gegossen?  
(何のなかへ彼は葡萄酒を入れたか?)

(gegossen は gießen [注ぐ] の過去分詞。)

Worin lebt der Fisch? (どこに魚は生活するか?)

IV. was はまた warum? の意味にも使れる。

Was lachen Sie? (何故貴君は笑ふか?)

(何を笑ふか? ではない; 其意味では、Worüber lachen Sie? といふ。)

[B] welcher, welche, welches; welche

58. これは名詞的にも形容詞的にも使用される。變化は dieser と同じである。人にも物にも、用ゐることが出来る。

Welche Uhr hat keine Räder? — Die Sonnenuhr.

(どの時計に齒車がないかね? — 日時計だ。)

Welches Schrfach liebst du am meisten?

(どの學課を君は最も好むか?; am meisten は meist の副詞的最上級。)

In welchem Hause wohnst du?

(どの家に君は住んでるか?)

[以上形容詞的用法]

Welches von diesen Büchern haben Sie gelesen?

(此本のうちのどれを貴方は讀みましたか?)

Welchen von diesen Knaben haben Sie gestern im Park gesehen? (この男の子どもたちのうちのどれを、貴君は昨日公園で見ましたか?)

Von welcher deiner Schwestern ist der Brief?

(君の姉妹のどれから、この手紙は來たのだね?)

[以上名詞的]

【註】 連辭 [ein を以て結合せる主語又は客語が名詞なるときは、その性にも數にも關係なく、主語又は客語として welches を使用する。これは疑問文の場合に起る現象である。

Welches ist die Farbe des Fisches?

(机のいろはどうか?; welche とする必要なし。)

Welches ist dein Buch? (どれが君の本 [單] か?)

Welches sind deine Bücher? (どれが君の本 [複] か?)

59. 感嘆文では、語尾のない, welche があらはれる。その次に不定冠詞があつたり、なかつたりする。前の場合に後續する形容詞は混合變化で、後の場合には強變化である。

Welch ein herrliches Gebäude ist das!

(これは何たる立派な建物ぞや!)

Welch kostbares Gut ist die Gesundheit!

(健康は何たる貴重な寶ぞや!)

Welch Unglück! (何たる不幸ぞや!)

Welch Elend! (何たる不運ぞや!)

【註】 感嘆文は、通常上掲のやうに、倒置法によるけれど、往々貶置法 [定動詞が最後] によるものもある。

Wie schön sie ist! (何と彼女は羨しきことよ!)

[C] was für ein (eine, ein); was für

60. was für ein (いかなる種類の) (what kind of) の變化は下の如くである。

M.	F.	N.
was für ein	was für eine	was für ein
was für eines	was für einer	was für eines
was für einem	was für einer	was für einem
was für einen	was für eine	was für ein

複數は當然 was für+名詞となる。但し二格は缺けてゐる。又物に名詞も ein をつけないから、「was für+名詞」の形となる。

Was für ein Baum ist das? (これはどう云ふ種類の木か?)

Was für Milch trinken Sie?

(どう云ふミルクを貴君は飲みますか?)

Was für Soldaten führte der General zuerst ins Treffen?

(どう云ふ兵士を、將軍はまづ第一に、戦へつれて行きましたか?)

Von was für Häusern sprechen Sie?

(どんな種類の家々について、貴君は話すのか?)

61. Was für ein の ein が名詞的に使はれるときは、Was für einer, eine, ein(e)s となり、又は was für welcher, welche, welches の形を採る。兩者の複数は、was für welche となる。

Wer ist hier gewesen? Ein Student. Was für einer?

Einer aus der ersten Klasse. (誰れがここに居ましたか? 一人の學生が。どういふ學生ですか? 一年級のです。)

Da haben Sie viele Bücher. Was für welche?

(そこにあなたの本が澤山ある。どう云ふ種類のですか?)

Was essen Sie da? Käse! Was für welchen? Schweizerkäse!

(そこで貴君は何を食べておますか? チーズを! どのチーズを? 瑞西のチーズを!)

Was für ein(er) は was と für との間を分ち、その場所へ他の文章成分を入れることが出来る。

Was ist das für ein Baum? (=Was für ein Baum ist das?)

Was ist's für einer? (=Was für einer ist es?)

これは welcher と同じやうに、感嘆文にも使はれる。

Was für ein schönes Wetter! (なんていゝお天気だらう!)

## 第六節

### 不定代名詞

62. 不定代名詞 (das unbestimmte Fürwort, das Indefinitpronomen) とは、一個以上の人又は物を、不定に指すもので、いろいろあるが、その主なるものは、次の如くである。

- 1) man 人が、one, they, people.
- 2) jedermann 各人が、every one, everybody.
- 3) jemand 或人が、some one, somebody.
- 4) niemand 何人も云々せぬ、no one, nobody.
- 5) etwas 或物が、something.
- 6) nichts 何物も……せぬ、nothing, not anything.
- 7) (ein) jeder, (eine) jede, (ein) jedes every one.
- 8) der eine……der andere……一方は、他方は; the one...the other.

#### [A] man (及 einer)

63. man は一格の形で、二格以下は einer の二格以下を用ゐて、eines, einem, einen となる。此 einer それ自身も不定代名詞で、共に「人は」と譯される。或特定の人物でなく、漠然と「人は」「世人は」の義であつて、文頭に來ない限り、頭字は小さい。又 man をうける一格の代名詞は、いつも man であるが、einer は er を以て受けてよい。それをうける物主代名詞は、勿論 sein であるが、sein は man をうけるときにも用ゐられる。

Man sieht nicht immer, was einem nützlich ist.

(人は自分に有利なものを、必ずしもいつも見るものではない。)(One does not always see what is useful for one.)

Man spräche gern mit ihm; aber er kann einen nicht verstehen, weil er Japanisch nicht gelernt hat.

(人は彼と話したがつてゐる; 然し彼は人の云ふことを理解することが出来ない、彼は日本語を習はなかつたので; man は einen で受け、er は er でうけてある; spräche は sprechen の可能法 (Konjunktiv [Ⅱ]; 英の subjunctive) の過去で、可能法の過去と gern (喜んで; gladly) とが併用されると、「云々したい」事を示す; weil (because) は接續詞であるが、これで初まるものは、副文で、定動詞は文末に来る [貶置法]。)

Man ist froh, wenn man seine Arbeit getan hat.

(人は自分の仕事をなし終つたときには、うれしい)。

【註】 すぐ上の文で、文頭の man の代りに einer を使用すれば、wenn の次ぎの man を er とすることが出来る。然し man で初めて置いて、er でうけることは出来ない。然るに本邦の學生はほとんど常にこの過失をするから、注意を要する。

Man は主として「世人は」「人は」の義で、ほとんど邦譯する必要のないことがある。

Im Dunkeln kann man nicht gut sehen.

(闇のなかではよく見えない。)

Man sagt (=they say), daß der König gestorben ist.

(王が崩じたと云ふ話だ。)

Man muß (must) seine Feinde lieben.

(敵を愛さなくてはならぬ。)

然れども往々、ich, du, Sie の意味を有することもあるから、解釋のときには、注意が必要である。

Man (=ich) kann (can) wohl sagen, daß er unrecht hat. (彼が間違つてると云ふことを、私は云つてもよろしからう。)

Man wolle schweigen! (君[貴君]黙つてくれ給へ!)

(wolle は wollen [欲する] の現在の可能法; 命令・希望をあらはす; 可能法については、後章に詳述する。)

【註】 従つて man のあらはす意味は、i) 「誰れかが」 (=einer, jemand) —ii) 「世人が」「世間が」 (=die Leute, die Welt) —iii) 「僕が」「僕らが」 (ich, wir) —iv) 「君が」「貴君が」 (=du, Sie) 等である。

[B] jedermann, jemand, niemand.

64. この三つは、いつでも單數である。jedermann は、二格で、-s をつけ、jemand と niemand とは二格で、-es をつけるが、三格で -em, 四格で -en をつけることもある。これらを受ける代名詞は、三人稱の男性である。即ち (人代名詞は er, 物主代名詞は sein, 關係代名詞は der である)。— 又 Jemand の代りに einer, niemand の代りに keiner (einer の打ち消し)、jedermann の代りに alle (複數) が使用されることが出来る。

Ist jemand hier gewesen? Nein, niemand.

(ここに誰れか居たかね? いゝえ、だれも居なかつた。)

Jedermanns Freund ist niemand's Freund. (萬人の友は何人の友でもない。八方美人には眞の友なしの義。)

Ich habe niemand(en) gesehen. (僕は誰れをも見なかつた。)

Niemand (=Keiner) ist so (so) gelehrt, daß (that) er alles weiß (knows). (何人と雖も、一切を知悉してゐるほどに博

學なものはない。)

Ist jemand unter euch, der es beweisen kann?

(それを証明し得る何人かが、君たちのうちにあるかね?)

Wenn einer (=jemand) helfen kann, so ist es der Arzt.

(誰れかが助け得るなら、それ[助ける人]は醫者である。)

Jedermann weiß (knows) es (=Alle wissen es).

(だれでも[みんなが]それを知つてゐる。)

【註】 I. jemand や einer の前に irgend (或る) をつけて、不定の意味を強める事がある。

Irgend jemand hat es uns gesagt.

(或人がわれわれにそう云つた。)

II. wer が jemand の代りに使はれることがある。これは中部獨逸及南部獨逸に多い。

Ist wer (=jemand=einer=some one) hier gewesen?

(だれかここに居たか?)

[C] etwas, nichts.

65. 此二語は變化しない。

Haben Sie mir etwas (od. was) zu sagen? Nein, nichts.

(あなたは何か私に云ふことがありますか? いいえ、何んにも。)

【註】 Etwas の前に irgend がつけられることがある。また nichts の前に gar (entirely) 又は durchaus (absolutely) をつけて意味をつよめることがある。

Haben Sie mir irgend etwas (od. irgend was) zu sagen? Nein, gar (od. durchaus) nichts.

66. その他不定代名詞として使用せらるゝものについて、概説すれば:

a) (ein) jeder, (eine) jede, (ein) jedes.

ein jeder とつゞけられるときには、ein はそれ自身の變化をなし、jeder は形容詞の混合變化と同様の變化をする。ein はたゞ不定の意味を強めるだけの用をする。

M.	F.	N.
ein jeder	eine jede	ein jedes
eines jeden	einer jeden	eines jeden
einem jeden	einer jeden	einem jeden
einen jeden	eine jede	ein jedes

Jeder 丈けのときは、勿論 dieser と同じ變化をする。

[Ein] jeder ist seines Glückes Schmied (Sprichwort).

(各人は自己の幸福の鍛工なり。)[諺]

Es gilt für einen jeden, sein Recht, seine Freiheit und Ehre zu schützen. (自分の權利、自分の自由と名譽とを保護することが、各人にとつて大切であつた; es gilt=es ist nötig; gilt は gelten の三人稱單數。)

Jeder dieser Männer hat sein Verdienst.

(此人たちの各が、自分の功績を持つてゐる。)

【註】 jeglicher, jedweder 等の尾變化と意味とは、jeder と同じである。これらは古體で、今はあまり使はれない。

b) der eine — der andere の變化は、指示代名詞のときに述べた。

Die Arbeit des einen ist ebenso gut wie die des andern.

(一方の人の仕事は、もう一方の人のそれと同じやうに上等だ。)

Die einen lobten das neue Drama, die anderen tadelten es.

(或人々は新らしい戯曲を褒め、他の人々はそれをくさした。)



# 第五章

## 動詞

1. 動詞 (das Zeitwort, das Verbum) は、主語の動作又は状態をあらはすと共に、その変化によつて、主語の人稱・數及び事件の「時」をあらはすものである。然し動詞自身が働いて—他の力を借りないで—あらはし得る時稱 (Zeitform [§.]) は、動詞の六時稱中、僅かに現在と過去とに過ぎない。動詞の六時稱とは、現在・過去・未來、及び現在完了・過去完了・未來完了であるが、現在・過去以外の四時稱をあらはすには、他の援助を必要とするのである。

	gehen	schlagen
現在	ich gehe	ich schlage
過去	ich ging	ich schlug
未來	ich werde gehen	ich werde schlagen
現・完	ich bin gegangen	ich habe geschlagen
過・完	ich war gegangen	ich hatte geschlagen
未・完	ich werde gegangen <u>sein</u>	ich werde geschlagen <u>haben</u>

動詞を助けて、時を示すものを、時の助動詞 (die temporalen Hilfsverben) と云ふ。これには上掲のやうに、haben, sein, werden の三つある。そしてこの三つの現在變化は、既に述べたのであるが、念のため今一度繰返へすと：

haben: ich habe; du hast; er, sie, es hat; wir haben, ihr habt, sie haben.  
 sein: ich bin, du bist, er, sie, es ist; wir sind, ihr seid, sie sind.

werden: ich werde, du wirst, er, sie, es wird; wir werden, ihr werdet, sie werden.

【註】 haben は「所持・所有」の意味に於て、sein は「存在」の意味に於て、werden は「成る」の意味に於て、共に本來の動詞となる。

Ich habe ein Buch (動). Ich habe gelesen (動).  
 Er ist in der Schule (動). Ich bin gegangen (動).  
 Er wird ein Soldat (動).  
 Er wird ein Soldat werden (動).

2. 次に haben, sein, werden の過去變化をかゝげる。

haben	sein	werden
ich hatte	ich war	ich wurde (od. ward)
du hättest	du warst	du würdest (od. wärdst)
er, sie, es hatte	er, sie, es war	er, sie, es wurde (od. ward)
wir hatten	wir waren	wir wurden
ihr hättet	ihr wart	ihr würdet
sie hatten	sie waren	sie wurden

【註】 werden の過去の ich ward, du wärdst, er ward は普通には使  
用しないで、詩歌又は莊重なる文章に於てのみ使はれる。

3. 動詞が過去及過去分詞をつくるに當つて、その幹母音 (Stammvokal [§.]) を變ずるや否やによつて、動詞は、二種に大別される。前者を強變化の動詞といひ、後者を弱變化の動詞といふ。

【註】 I. 幹母音とは、語幹の母音の義で、例へば schlagen の a; werfen の e; stoß-en の o の如きものである。

II. 不定法 (未だ變化せざる形、即ち stoßen, werfen, schlagen 等を云ふ; Infinitiv [§.]), 過去 (Imperfekt [§.]), 過去分詞 (Partizip Perfekt [§.]) の三つを、動詞の三主要部といふ。

*Handwritten notes:*  
 sein  
 -st  
 -st  
 -en  
 -en  
 -en  
 -en  
 ↓  
 werden

	不定法	過去	過去分詞
弱	lernen (學ぶ)	lernte	gelernt
	reden (話す)	redete	geredet
	reisen (旅行する)	reiste	gereist
強	schlagen (打つ)	schlug	geschlagen
	kommen (来る)	kam	gekommen
	werfen (投げる)	warf	geworfen

【註】 三主要部中、過去として掲げらるるのは、一人稱單數の形である。

動詞は強變化に屬するか、弱變化に屬するかによつて、現在變化や過去變化の形を異にするから、下に別々に説明する。

### 第一節

#### 弱變化動詞の現在變化

4. 弱變化 (Schwache Konjugation) 動詞の現在變化の語尾は既に擧げたが、こゝに繰返へすと、次の如くである。

ich	-e	wir	-en
du	-(est)	ihr	-(et)
er, sie, es	-(et)	sie	-en

而して、上表 du, er, ihr に於て、語尾が e を以て初まるものは：

- i) 語幹が t 又は d に終るもの: warten, reden.
- ii) 語幹が一個の m 又は n で終り、其前に l, r, h 以外の子音が來るもの: öffnen, atmen.

【例】

	warten (待つ)	reden (演説する)	ordnen (整頓する)	atmen (呼吸する)
ich	wart-e	red-e	ordn-e	atm-e
du	wart-est	red-est	ordn-est	atm-est
er, sie, es	wart-et	red-et	ordn-et	atm-et
wir	wart-en	red-en	ordn-en	atm-en
ihr	wart-et	red-et	ordn-et	atm-et
sie	wart-en	red-en	ordn-en	atm-en

【註】 語幹が一個の m 又は n に終り、その前に l, r, h が來るものとは: qualmen (咽る)、turnen (體操する)、ahnen (感づく): ich ahne, du ahnst, er ahnt.

次に、上記の人稱に於て、e に初まらざるものの例は、次のとおりである。

loben (ほめる)	sagen (云ふ)	lernen (學ぶ)
ich lob-e	sag-e	lern-e
du lob- <u>st</u>	sag- <u>st</u>	lern- <u>st</u>
er, sie, es lob- <u>t</u>	sag- <u>t</u>	lern- <u>t</u>
wir lob-en	sag-en	lern-en
ihr lob- <u>t</u>	sag- <u>t</u>	lern- <u>t</u>
sie lob-en	sag-en	lern-en

5. 語幹が齒音 (s, ff, ß, m, n) に終るものは、du に於て、略して t だけをつける。然し -est としてもよろしい。—又 eln, -ern に終る動詞は、ich に於て、この e をなくする習慣である。

reisen (旅する)	grüßen (會禮する)	handeln (行動する)
ich reise	ich grüße	ich handle
du reist (od. reise <b>st</b> )	du grüßt (od. grüße <b>st</b> )	du handel <b>st</b>
er reist	er grüßt	er handel <b>t</b>

*drei Künge sind hier  
sein sind gre*

【註】本節 4 項 (A) に關するものは、例へば antworten (答へる、to answer)、retten (救ふ)、töten (殺す)、achten (尊敬する)、widmen (献する、to dedicate) などで、(B) に關するものは、lieben (愛する、to love)、leben (生活する、to live)、schenken (贈る)、spielen (遊ぶ)、hören (聞く) など。— 又本節 5 項に依るものは、setzen (置く、to set)、tanzen (舞踏する、to dance)、hassen (憎む)、wandeln (逍遙する)、tadeln (非難する)、klettern (攀づる) などである。

## 第 二 節

### 強變化動詞の現在變化

6. 強變化 (Starke Konjugation) 動詞の現在變化も既に略述したが、其或るものは、現在變化に於ては、弱變化と同一に取扱はれるから、これらは覚え易い。

kommen (來る)	gehen (行く)	schreiben (書く)
ich komm-e	ich geh-e	ich schreib-e
du komm-st	du geh-st	du schreib-st
er komm-t	er geh-t	er schreib-t
wir komm-en	wir geh-en	wir schreib-en
ihr komm-t	ihr geh-t	ihr schreib-t
sie komm-en	sie geh-en	sie schreib-en

【註】之に關するものは、bleiben (止まる)、steigen (登る)、fliegen (飛ぶ、to fly)、treiben (驅る、to drive) 等。

7. 然し、多くのものは現在變化の du 及び er に於て、その幹母音を變ずる。即ち a は ä に、o は ie に、i は i に、au

は äu に變はるのである。これらのものの語尾變化は、弱變化と同様である。

fallen (落ちる)	sehen (見る)	werfen (投げる)	laufen (走る)
ich fall-e	ich seh-e	ich werf-e	ich lauf-e
du fall-st	du sieh-st	du wirf-st	du läuf-st
er fällt	er sieh-t	er wirf-t	er läuf-t
wir fall-en	wir seh-en	wir werf-en	wir lauf-en
ihr fall-t	ihr seh-t	ihr werf-t	ihr lauf-t
sie fall-en	sie seh-en	sie werf-en	sie lauf-en

【註】之に關するものは、schlagen (打つ)、fahren (車・船等にて行く)、schlafen (眠る)、helfen (助ける、to help)、sterben (死す)、brechen (破る)、treffen (當てる) 等。

8. 語幹が -d 又は -t に終るもので、(a) du 及 er に於て、その幹母音を變じないものは、du, er, ihr に於て、語尾の初めに -e を採る。(b) 之に反して du 及 er に於て母音を變ずるもののうち、(b. 1) -t に終るものは、du に於ては -st をつけ、er に於ては何等の語尾もつけない。(b. 2) 然し -d に終るものは、du に於ては -st, er に於ては -t を附ける。

(a) schneiden (截る)	(b. 1) halten (保つ)	(b. 2) laden (載せる)
ich schneid-e	ich halt-e	ich lad-e
du schneid-est	du hält-st	du läd-st
er schneid-et	er hält	er läd-t
wir schneid-en	wir halt-en	wir lad-en
ihr schneid-et	ihr halt-et	ihr lad-et
sie schneid-en	sie halt-en	sie lad-en

【註】齒音に終るものの取扱方は、前節第五節と同じ。

lesen (讀む): ich lese, du ließt (od. liehest), er liest; wir lesen.....

beißen (噛む): ich beiße, du beißt (od. beißest), er beißt; wir beißen.....

其他 reißen (裂く)、weisen (示す)、messen (測る) 等。——又 7, 8 (b) に屬するもの、raten (忠告する)、schelten (叱る) 等。

### 第三節

#### 動詞の過去變化

9. 弱變化動詞は、過去 (Imperfekt [R.], Vergangenheit [S.]) に於て、その幹母音を變じないことは、前に述べたが、次の如き語尾をつける。

ich	—(e)te	wir	—(e)ten
du	—(e)test	ihr	—(e)tet
er, sie, es	—(e)te	sie	—(e)ten

【註】 du, er, ihr の語尾の先頭の e については、既に述べたとほりである。

【例】

loben	sagen	reden
ich lob-te	sag-te	red-ete
du lob-test	sag-test	red-etest
er, sie, es lob-te	sag-te	red-ete
wir lob-ten	sag-ten	red-eten
ihr lob-tet	sag-tet	red-etet
sie lobt-ten	sag-ten	red-eten

弱變化の過去分詞は、通常 ge- を語幹の前に置き、(e)t を語幹の後に置く。ge- を付けないものについては、後に云はう。

ge-lob-t    ge-sag-t    ge-red-et

10. 強變化動詞の過去變化は、弱變化とは異なり、次のやうな語尾をつける。

ich	—	wir	—en
du	—(e)st	ihr	—(e)t
er, sie, es	—	sie	—en

【例】

schlagen		raten	
ich schlug	wir schlug-en	ich riet	wir riet-en
du schlug-st	ihr schlug-t	du riet-est	ihr riet-et
er, sie, es schlug	sie schlug-en	er, sie, es riet	sie riet-en

過去分詞は、ge- を語幹の前につけ、-en を語幹の後につける；但し ge- を戴かないものもあるが、これは後に述べよう。

schlagen—ge-schlag-en    raten—ge-rat-en

11. 強變化動詞の数は多いけれど、それを大別すると、三種の種類になる。

- I) 不定法と過去分詞とが、同一母音を有するもの：  
schlagen, schlug, geschlagen; lesen, las, gelesen.
  - II) 過去と過去分詞とが、同一母音を有するもの：  
bleiben, blieb, geblieben; fließen (流れる) floß, geflossen.
  - III) 不定法・過去・過去分詞が、共に其幹母音を異にするもの：  
finden, fand, gefunden; brechen, brach, gebrochen.
12. (I) 不定法と過去分詞と同一母音のもの：

【A】 q (不定法の幹母音)——ie (過去の幹母音)——a (過去分詞の幹母音)。

fallen (落ちる), fiel, gefallen; halten (保つ), raten (忠

告する)、schlafen (眠る); blasen (吹く); lassen (to let, せしむる); \*hangen (懸る)、\*fangen (捕へる)。

- 【註】 I. 現在に於ての注意は、前節 7 項、8 項に述べてある：例へば ich blase, du bläst (od. bläsest), er bläst の如きものである。
- II. \*hangen の過去は hing となり、fangen のそれは fing となる：hieng, fieng としてはならぬ。—又 hangen は「懸る」意味で、hängen は「懸ける」の義である。

Er hing nur am Geld.

(彼は金にばかり執着してゐた。) (hangen)

Er hängte seinen Rock an den Nagel.

(彼は彼の上着を釘にかけた。) (hängen)

但し現在に於ては、前者は ich hange, du hängst, er hängt であり、後者は ich hänge, du hängst, er hängt であるが故に、両者が混合せられて、すべてを hängen とする風がよく見受けられる。

III. 上記のほか au-ie-au: ei-ie-ei 等上に準じて、これに附屬せしめてよいものが少しある：laufen (走る、to run); tief gelaufen; hauen, (截る)、hieb, gehauen; heißen (と云ふ、命令する)、hieβ, gehieβen の如きものである。

IV. 強變化動詞の分鏡法は、人によつて異なるから、其點のみ込んで置かねばならない。名詞の變化の分類法についても、同様の事が云はれ得る。

V. なお強變化動詞の過去(直接法・可能法)、過去分詞、命令法及二人稱、三人稱の單數形は、各字典の前又はうしろにつけてある習慣である。

[B] a-u-a

fahren, fuhr, gefahren; schlagen (打つ)、tragen (擔ふ)、\*laden (積をつむ)、wachsen (生長する)、waschen (洗ふ); \*schaffen (造る)。

- 【註】 I. \* の laden は現在の du 及 er に於て、二體の形を探る；

du lädst (od. ladest); er lädt (od. ladet).

II. \* は少し例外で、不定法に於ては a は短かく、過去では長く、過去分詞では、再び短かい。故に綴字は、schaffen, schuf, geschaffen である。又現在の du 及 er に於ては、a は變音しない；ich schaffe, du schaffst, er schafft である。—次に schaffen が強變化するのと、弱變化するのとは、意味が異なる。前者の場合には、「創造する」義であり、後の場合には、「なす」「働らく」「才覚する」義である。

【強】 Gott schuf die Welt. (神が世界を創造した。)

【弱】 Was macht der Vater? Er schafft (=arbeitet).

(父は何をしてゐるか? 働いてゐる。)

Wir haben heute nicht viel geschafft (=geleistet).

(われらは今日たんと仕事をしなかつた。)

[C] e-a-e

geben (與へる)、gab, gegeben; sehen (見る)、sahen; \*treten (歩む); \*essen (食ふ)、freissen (喰ふ)、messen (測る)。

- 【註】 I. treten は du, er に於て母音が短かく、du trittst, er tritt となる。

II. essen 以下の三つは、現在の母音が短かい。然し過去では長く、過去分詞は再び短かい；即ち essen du isst (od. issest), er isst, aβ, gegessen となる；gegessen の第二の g は變音のため、特に入れたもの。—又 du issest に於て du isest と書くのは間違である。何となれば、i が短かいからである。然し er isst と書くのも間違である。何となれば t の前だからである。定義して曰ふ、ff と β とは共に「エス」の清音をあらはすものなれど、二個の母音の間に介在して、前の母音短かき時は、ff を使用す。しかし t の前ではいつも β となり、語又は綴の終りでも β となる。我國の學生はよく間違へるから注意を要する。

(II) 過去と過去分詞とが同一幹母音なるもの:

[A] (a) e-i-i (i は短音)

beißen (噛む)、biß, gebissen; greifen (掴む); reißen (裂く)、reiten (乗馬して行く)、streiten (争ふ); \*schneiden (切る)、leiden (なやむ)。

【註】 schneiden, leiden は、共に d に語幹が終つてゐるが、過去は schnitt, litt; 過去分詞は geschnitten, gelitten となる。d が二重の t になることに注意せよ。

[A] (b) ei-ie-ie (ie は i の長音)

bleiben (止まる)、blieb, geblieben; schreiben; leihen (貸す)、schweigen (沈黙する)、steigen (登る)、scheinen (見える、seem)、schreien (叫ぶ、to cry)、treiben (驅る、to drive)。

[B] (a) ie (od. e)-o-o (o は短音)

fließen (流れる)、floß, \*gefloßen; \*gießen (注ぐ)、kriechen (這ふ)、\*schießen (射る)、\*schließén (閉ざす)、riechen (嗅ぐ)。— \*sechten (闘ふ)、flechten (編む)、\*schmelzen (溶ける)、\*quellen (湧き出づる)。

【註】 I. gefloßen にあらず; o が短かいからである; 同じやうに geschossen, geschlossen で、geschossen, geschloßen ではない。

II. sechten, socht, gesochten; du sichtigst, er sieht; flechten も同様に變化する。

III. schmelzen は「溶ける」意味に於て、弱變化する: Der Schnee schmilzt (過去: schmolz) (雪はとける); 「溶かす」意味に於て弱變化する: Der Goldschmied schmelzt (過去: schmelzte) zwei Pfund Silber. (金細工人は二ポンドの銀を熔す(した))。

IV. quellen は「湧き出づる」意味に於ては弱變化する: Das

Wasser quillt (quoll) aus der Erde. (水は地中から湧き出づる(出た。)); 「ふくらす」「浸す」義では、弱變化する: Die Stöchin quillt (quollte) die Erbsen. (料理女が豌豆を水にひたす(した))。

[B] (b) e (od. e)-o-o (o は長音)

biegen (曲げる)、bog, gebogen; bieten (申出す)、fliegen (飛ぶ)、fliehen (逃げる)、frieren (凍る)、\*ziehen (引く); \*heben (擧げる)、\*weben (織る)、\*scheren (毛を剪む)、\*pflegen (なす); \*schwören (誓ふ); \*lügen (うそをつく)。

【註】 I. ziehen の過去は zog, 過去分は gezogen となる。

II. heben, weben, scheren は du 及 er に於て母音を變じない。

III. pflegen は「看護する」、又は「習慣である」の意味では、弱變化する。即ち:

1. Ich pflegte den Kranken.

2. Er pflegte (=hatte die Gewohnheit) zu sagen.

弱變化は「なす」の義で、

Damals pflog ich noch Umgang mit ihm.

(當時はまだ彼と交際をしてゐた。)

Wir pflogen Rat. (われらは相談をした。)

IV. 次の二つは、この種に附屬させて覺える。— 此外 stehen (立つ)、stand, gestanden の如き; tun (なす)、tat, getan の如きも、これにつけて覺えたらよからう。

(III) 不定法・過去及過去分詞が、共に其幹母音を異にするもの:

[A] ē (ē)-ā-o (o)

(1) brächen (破る、to break)、brach, gebrochen; treffen (當てる)、sprechen (云ふ、to speak)、stechen (刺す)。

(2) stehlen (盗む)、stahl, gestohlen; \*befehlen (命令する)、

empfehlen (推薦する)。

(3) \*nehmen (取る)、nahm, genommen.

- 【註】 I. (1) は ē-ā-ō; (2) は ē-ā-ō; (3) は ē-ā-ō である。  
 II. be-, emp- を帶く動詞は、過去分詞に於て、ge- を取らない。  
 befehlen, befahl, befohlen. 此種のものには後述する。  
 III. nehmen の現在(は、du nimmst, er nimmt.

【附】 e-a-o.  
 sterben (死す)、starb, gestorben; helfen (助ける)、werfen  
 (投げる)、bergen (かくす)。

【B】 i-a-u.  
 finden (発見する); fand, gefunden; binden (結ぶ)、dringen  
 (突入する)、klingen (鳴る)、trinken (飲む)、ringen (格闘する)、  
 springen (跳ぶ)、singen (唄う)、sinken (沈む)、zwingen (強める)、  
 winden (捲く)。

【C】 i-a-o.  
 schwimmen (泳ぐ)、schwamm, geschwommen; spinnen (紡ぐ)、  
 beginnen (始まる)、\*gewinnen (儲ける)、sinnen (考へる)。

【註】 ge- に始まるものは、過去分詞で ge をつけない; gewinnen,  
 gewant, gewonnen; 又【A】の(c)に属するものに、genesen  
 (癒ゆる)がある; genas, genesen.

【D】 i-a-e 及其他:  
 bitten (乞ふ)、bät, gebäten; liegen (横はる)、\*sitzen (坐する);  
 \*gehen (行く)。

【註】 sitzen, gehen は特別の變化をする; sitzen, saß, gesessen; gehen,  
 ging, gegangen となる。

ip

13. 強變化動詞と弱變化動詞との外に、別に若干の動詞があつて、それは強變化の特徴を具備すると共に、弱變化のそれをも持つて居る。これを稱して混合變化 (Gemischte Konjugation) の動詞といふ。例へば動詞 brennen (燃える、to burn) を見ると、その過去は brannte であり、その過去分詞は gebrannt であつて、幹母音を變ずると云ふ強變化の特徴と、過去には -te を添え、過去分詞には t をつけると云ふ弱變化の特質とを、併せて所有してゐるのである。

kennen (知る)	kannte	gekant
nennen (名づける)	nannte	genannt
rennen (走る)	rannte	gerannt
senden (送る、to send)	*sandte	gesandt
	*sandete	gesendet
wenden (向ける)	wandte	gewandt
	wendete	gewendet
bringen (持つて來)	brachte	gebracht
denken (考へる)	dachte	gedacht
wissen (知る)	wußte	gewußt

この種の動詞の、も一つの特徴は、その現在變化が、幹母音を變えない事にある: ich renne, du rennst, er rennt.

- 【註】 I. sandte, gesandt 等に於ける dt の發音に關しては、tt と同じ取扱をする; sandete, gesendet は、勿論純粹の弱變化である。  
 II. wissen は、特殊の變化をする: ich weiß, du weißt, er weiß, wir wissen, ihr wißt, sie wissen.—又 wissen と kennen とは、共に「知る」事なれど、kennen は人又は物を知ること、wissen は事實を知り、又は或事に対する智識・熟練等を有することを意味する: Ich kenne den Herrn, aber ich weiß, wie er heißt. (私はこの紳士を知つてゐるが、何と云ふ名か、私は知らない)。

### 第 四 節

#### 動 詞 の 過 去 分 詞

14. 動詞の過去分詞の作り方については、既に述べた。即ち強變化・弱變化・混合變化、は三つとも同様に *ge-* を頂かしめ、強變化は *-en* に、弱變化及混合變化は *-et* に終るのであるが、*ge-* をつけないもののあることは、すでに述べた。そこでこの *ge-* をつけないものは、

i) 高音なき前綴 (*Vorhilfe* [ʃ], *Präfig* [ʁ]).

*be-, er-, ent-, emp-, ge-, miß-, ver-, zer-*

【註】これらは單獨には使用されないもので、名詞其他の品詞、例へば名詞・形容詞などの前につけられて、いろいろの限定や修飾をする。これについては、後章非分離動詞の條でのべよう。

【例】

<i>be+stehen,</i>	<i>bestehen</i> (存立する),	<i>bestand,</i>	<i>bestanden</i>
<i>er+ziehen,</i>	<i>erziehen</i> (教育する),	<i>erzog,</i>	<i>erzogen</i>
<i>ent+kommen,</i>	<i>entkommen</i> (逃れる),	<i>entkam,</i>	<i>entkommen</i>
<i>emp+fangen,</i>	<i>empfangen</i> (受取る),	<i>empfang,</i>	<i>empfangen</i>
<i>ge+loben,</i>	<i>geloben</i> (誓約する),	<i>gelobte,</i>	<i>gelobt</i>
<i>miß+brauchen,</i>	<i>mißbrauchen</i> (濫用する),	<i>mißbrauchte,</i>	<i>mißbraucht</i>
<i>ver+beißen,</i>	<i>verbeißen</i> (忍ぶ),	<i>verbiß,</i>	<i>verbissen</i>
<i>zer+reißen,</i>	<i>zerreißen</i> (寸断する),	<i>zerriß,</i>	<i>zerrißen</i>

ii) 高音のない *durch, hinter, über, um, unter, voll, wider, wieder* を前に持つ動詞。

【註】これらのものの大部分は、その上に高音があるとき、意味と取扱ひとを異にする。悉しくは「時に分離し時に分離せざる動詞」の

條でのべる。

*voll+ziehen, vollziehen* (實行する), *vollzo'g, vollzo'gen*  
*wider+streiten, widerstreiten* (抗争する) *widerstritt*  
*widerstritten*

iii) *-ie-ren* に終る動詞。

*studie'ren* (學ぶ, to study) *studie'rte studie'rt*  
*buchstabile'ren* (綴字する) *buchstabile'rte buchstabile'rt*

iv) *-ie-en* に終る動詞。

*prophezei'en* (豫言する), *prophezei'te, prophezei't,*  
*kaufte'en* (禁慾させる), *kaufte'te, kaufte't*

【註】其他上掲の如く、外的特徴によつて、總括することの出来る若干の動詞がある：*champagn'ern* (三鞭酒をのむ), *schmaro'gen* (寄生する), *trompeten* (ラッパを吹く), *tumorten* (騒ぐ) 等。

15. 動詞によつては、強弱二種の過去分詞のあるものがある。例へば *salzen* (鹽をを入れる) の過去分詞が *gesalzen* 又は *gesalzt* であり、*spalten* (割る) のそれが、*gespalzen* 又は *gespalzt* である如きものである。

*spalten* (割る) *gespalzen gespalzt*  
*beklemmen* (挟壓する) *beklemmen beklemmt*  
*verwirren* (混亂させる) *verwirren verwirrt*

【註】強變化に従ふ方は、形容詞として用ゐられることが多い。中には兩方共形容詞として使用され、しかも意味を少し異にするものもある。

*Ich habe das Holz gespalzt.* (私は木材を割つた。)

*klein gespaltenes Holz.* (細かく割られた木材。)

*Er hat diesen Brief gefalzt.* (彼は此手紙をたぐんだ。)

*mit gefalzenen Händen* (手を組合せて。)

勿論、前者に *gespalzen* を用ゐ、後者に *gefaltet* を用ゐる事もりる。



Ich bin heute ganz verwirrt. (私は今日は、全く昏迷して [=betäubt] ぬる); Das Garn ist verworren. (糸がもつれてある.); verworrene Träume (混沌たる夢)。

16. 過去分詞に於て、ge を有し又は有せざるものが少しある。

offenbaren (示す)	offenbarte	offenbart	geoffenbart
froh/locken (後躍する)	froh/lockte	froh/lockt	gefroh/lockt
lieb/kojen (撫愛する)	lieb/kojete	lieb/kojst	gelieb/kojst
will'fahren (聽從する)	will'fahrte	will'fahrt	gewill'fahrt

### 第五節

#### 時稱の構成と意義

17. 現在・過去以外の時稱は、時の助動詞を借りて作るものであるから、これを複合時稱 (zusammengesetzte Zeitformen) と稱し、現在・過去とを單獨時稱 (einfache Zeitformen) と名づける。又そのあらはす意味から見て、六時稱を二つに分けることが出来る。

{	現在 (Präsens)	{	現在完了 (Perfekt)
	過去 (Imperfekt)		過去完了 (Plusquamperfekt)
	未來 (Futurum I)		未來完了 (Futurum II)

即ち「時」は大別すれば、現在・過去・未來となるが、言ひあらはされる行爲又は状態の繼續か完了かと云ふ方から、二つにわけて、繼續をあらはす時稱と、完了をあらはす時稱とになり、かくして六時稱が成立するのである。

#### [A] 現在 (Präsens [R.], Gegenwart [R.]).

18. 現在の構成法は、既に述べたが、その用途をあげると、

I) 現在に於て繼續しつゝある行爲又は状態をあらはす。

Ich wohne in Tokyo. Ich schreibe einen Brief.

【註】 現在時をあらはす形は、獨逸では一體しかない。即ち英語の He writes, he is writing, he does write. の如き區別はなく、みな er schreibt である。疑問に於ても同様で、Is he writing? Does he write? などの區別なく、みな Er schreibt er? と云ふ。屢時の副詞を用ゐて、現在時なることを明示する; Er schreibt eben (jetzt) (just (now)).

II) 過去時から初まつて、現在まで繼續してゐる行爲又は状態をあらはすときに使用される。

Wie lange lernen Sie schon\* Deutsch? (いつから貴君は獨語を習つてみますか?)

Ich lerne es seit\* drei Monaten. (僕はそれを三月前から習つてみます。)

Ich warte schon\* eine Stunde lang auf Ihren Bruder. (私はもう一時間もあなたの兄弟を待つてみます。)

【註】 I. これは目下繼續中で、既にいくらかはやられたけれど、今なほ繼續進行中であつて、完了に至らない事をあらはすのである。これには屢 bereits (既に)、schon (既に)、lange (久しく) 等の時の副詞を入れ、又は seit (以來) と云ふ前置詞を入れて、過去から繼續してゐることを明示する。

II. 英語では、かゝる場合に現在完了、即ち所謂 present perfect tense を使用する、例へば上例で云ふと: How long have you been studying German? I have been learning it for three months.—I have been waiting you for an hour.—又 Wir arbeiten schon drei Jahre an diesem Buche = We have worked already three years at this book.

III) 未來に於て、確かに起るべき事柄を云ふに使はれる。この時には、未來時を示す副詞又は副詞的の句が並用される。

Nächstes Jahr reise ich in die Schweiz.

(來年、私は瑞西へ旅行する。)

Morgen ist sie meine Frau. (明日になれば、彼は私の妻だ。)

Ich gehe aufs Schloß und bin in zwei Minuten wieder hier.

(私は城へ行く、そして二分間のうちには、またこゝへ歸つて来る。)

【註】 英語にも此用法はない譯でもないが、獨逸ほど廣くは行はれて居ない。大抵はちやんと未來にする。例へば、上例の第二は、矢張、Tomorrow she will be my wife. となり、第三の例は、I am going to the castle and in two minutes shall be back here again. となる。

IV) 物語に於て、過去に起りし事件を、眼前に躍動させるがために、特に現在時を用ゐることがある。これを歴史的現在 (historisches Präsens) と名づける。

Zwei Ziegen begegneten einander auf einem schmalen Stege. Keine wollte die andern auch hiüberlassen. Lange stritten sie miteinander, und der Zank wurde immer heftiger. Da riß ihnen endlich die Geduld. Mit geheulten Hörnern rennen sie gegeneinander und fallen in den tiefen Bach.

(二匹の山羊が狭い橋の上で相會つた。どつちも相手をまづ渡らせやうとしなかつた (wollte は wollen [欲する] の過去)。長い間彼等は互に争つた、そして喧嘩は愈烈しくなつた。そこでとうとう、彼等の忍耐が破れた。角を下げて、彼等は互に走つてぶつかり合ふ、そして深い小河の中に落ちる。)

V) 命令法の代りに用ゐられる (従つて二人稱單數であつて、此方が強い)。

Du bleibst zu Hause! (お前はうちに居るのだぞ!)

Du wartest auf mich! (私を待つてゐるのだよ!)

VI) 常習眞理法則等をあらはす。これらは時間に制限されないからである。

Ich trinke keinen Wein. (私は葡萄酒を飲みません [常習]。)

— Drei mal drei ist neun (三三が九。)— Die Cholera ist ansteckend. (コレラは傳染する。)

— Der Rhein fließt in die Nordsee. (ライン河は北海に流れ入る。)

— Die Erde dreht sich um die Sonne. (地球は地球の周りを廻る。)

[B] 過去 (Imperfekt [R.], Vergangenheit [G.])

19. 過去の構成法は既に述べた。此時稱は、或過去に持續したる行爲又は状態を指すのであるが、悉しく云ふと、その用途は次のやうである。

【註】 現在と同じく、過去もドイツでは一體しかない; I said, I was saying, I did say=ich sagte.

i) 過去時の出來事を、現在とは全く關係なく、單にありし事として叙述するに使はれる。これには屢過去時を云ひあらはす副詞又は副詞的の句又は文が並用される。

Er wohnte früher in dieser Stadt.

(彼は以前此の町に住んで居た。)

Ich wohnte zur Zeit des deutsch-französischen Krieges in Paris. (僕は獨佛戦争の時パリに住んでゐた。)

此體は上達のやうに、過去の事件を、たゞ過去として談るも

のであるから、物語的の説話に用ゐられる。普通の談話にて  
も、二個以上連続して起れる過去の事件を語るに使用される。  
物語りの例は、前項 IV にあるが、二つ以上の事件とは、例へ  
ば、

Er schlief, als ich kam. (私が来た時に彼は眠つてゐた。)  
Ich sang, während er arbeitete.  
(彼が働いてゐる間私は歌つた。)

等の類である。

【註】 なほ過去の常習も云ひあらはされる。

Jeden Tag machte ich einen Spaziergang.  
(毎日僕は散歩をした。)

ii) 或過去の時稱に始まり、これに後れる或過去の時點まで  
繼續せる行爲又は状態を云ひあらはすのに用ゐられる。

Als er in Tokyo ankam, arbeitete ich dort schon seit sieben  
Monaten. (彼が東京へ到着した時には、私はそこでもう七  
ヶ月も仕事をしてゐた；彼の東京へ到着したよりも、自分  
の仕事の始めた方が時間的には先きで、彼の来た時まで繼  
續して居たのである。)

Wir wohnten dann schon drei Jahre in dieser Stadt. (その  
時はわれわれはすでに七年も此町に住んでゐたのだ；dann  
は何等かの事件のあつた過去時を示してゐる。)

【註】 英語ではかゝる場合には過去完了、即ち pluperfect を使用する。  
When he arrived in Tokyo, I had already been working  
there for seven months. — We had then been living here  
for three years. — 英語から入つた人はよく混合するから、注意  
を要する。

〔C〕 現在完了 (Perfekt [R.], vollendete Gegenwart [G.])

20. 現在完了の構成法も、既に述べたが、それは、動詞の過  
去分詞と、haben 又は sein の現在變化とによつて作られる。い  
かなる動詞が haben と結合し、いかなるものが sein と結合す  
るかは、動詞そのものの性質によるもので、これは後に述べる  
が、大體他動詞 (四格を取るもの) や、再歸動詞は haben と結  
合する。

	schlagen (打つ)		reisen (旅する)		
ich	habe	} geschlagen	ich	bin	} gereist
du	hast		du	bist	
er	hat		er	ist	
mir	haben		wir	sind	
ihr	habt		ihr	seid	
sie	haben		sie	sind	

【註】 正置法に於ては、過去分詞は文末に来る。

その用途はなかなか廣いが、大體をあげると、此時稱は現在  
から見て、或行爲又は状態が、既に完了せることをあらはすも  
ので、現在とそれから完了された時點との間の距離は、問題に  
ならない。換言すれば、それが五分前でも、百年前でも千年前  
でもよろしい。

【註】 従つて英語のやうに、時の副詞に制限されることはない。例へ  
ば英語では、時の副詞 yesterday のある時には、過去を使用す  
べきで、I have been at the ball (舞踏會) yesterday. は誤用  
で、I was at the ball yesterday. と云はなければならないけれ  
ど、獨逸では何の譯文へもなしに、Ich bin gestern auf dem  
Balle gewesen. と云ふ。又時の疑問副詞 when (いつ) のある  
ときには、英では現在完了を使用しないで、過去を使ふが、これ

は英語では、いづれにてもよろしい。例へば、英語では、When has he come? と云はないで、When did he come? と云ふけれど、獨逸語では、Wann ist er gekommen? と、Wann kam er? と云へる。即ち時節は、云ひあらはさんとする意味内容によつて決定されるもので、時の副詞などによつて割附されるものではない。

現在完了の使途は、まづ

i) 過去時に於て完了されたる事件であつて、その結果が今に残留するものを云ひあらはすに使用する。

Kolumbus hat Amerika entdeckt.

(コロンバスはアメリカを発見した。)

Shakespeare hat etwa vierzig Drama geschrieben.

(沙翁は約四十の戯曲を書いた。)

Ich habe ein Geldstück gefunden, hier ist es.

(私はお金を見つけた、こゝにそれがある。)

Meine Mutter ist zu Markte gegangen; sie ist jetzt nicht zu Hause. (私の母は市場へ「買入れに」行つた; 今は留守だ; zu Hause sein=在宅である。)

ii) 今、完了せる行爲又は状態を示す。

Ich bin eben aus der Schule gekommen.

(私は丁度學校から歸つて来たところです。)

Soeben ist er zu Ihnen gegangen.

(丁度今彼はあなたのところへ行きました。)

iii) 上掲第一種・第二種の範圍に屬せざる過去の一事實を、單獨に報告し (mitteilen) ・報知する (melden) ために使用される。従つて此種の現在完了は、會話に於て甚屢表はれて来る。

Ich habe Sie letzten Sonntag erwartet. (私は前の日曜日に

貴方がおいでだらうと待つてゐました。)

Vorgestern habe ich an meinen Onkel geschrieben.

(一昨日私は彼の叔父に手紙をやつた。)

Das ist das interessanteste Buch, das ich je (=bis jetzt) gelesen habe. (これは私が嘗つて「これまでに」讀んだなかで、一番面白い本です。)

Letztes Jahr bin ich in Berlin gewesen.

(去年は僕は伯林に居た。)

【註】 會話に於て、現在完了が愛用せらるる結果、過去形が漸次に退却し(或地方では全く退却し)て、意味の如何に關せず、現在完了形を使用する方が、一般に昌んになつたのに對して、過去はその形の短かきため、又は口語に於て現在完了の改訂するの對して、文語ではこれが好んで用ゐられる。この現象は新聞などには特に甚しく、無暗に現在完了を驅逐したがる風が見える。實用上から見て、どつちでもよい場合も、勿論あり得るのである。

【D】 過去完了 (Plusquamperfekt [Pl.], vollendete Vergangenheit.)

21. 過去完了は、動詞の過去分詞と haben 又は sein の過去變化とを以て作るのである。今念のため變化を示すと:

schreiben (書く)		kommen (来る)	
ich hatte	} geschrieben.	ich war	} gekommen.
du hattest		du warst	
er hatte		er war	
wir hatten		wir waren	
ihr hattet		ihr wart	
sie hatten		sie waren	